

東町遺跡 8

-高崎市労使会館建替え事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2 0 2 5

高崎市教育委員会

東町遺跡 8

—高崎市労使会館建替え事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2025

高崎市教育委員会

序

高崎市は、古来より関東と信越をつなぐ交通の要衝に位置する人口約37万人の中核市です。

本市ではユネスコ「世界の記憶」となった上野三碑をはじめ、本丸西虎口の石垣や本丸・蔵屋敷間の木橋等の復元された史跡箕輪城跡、史跡保渡田古墳群とそれに近接するかみつけの里博物館などに多くの見学者が訪れ、文化財への興味が高まっています。

本書で報告する東町遺跡8は、高崎市労使会館建替え事業に伴って発見された埋蔵文化財であり、令和5年3月から令和6年3月にかけて発掘調査を実施したものです。このたびの調査では、平安時代水田跡及び大正・昭和時代の製糸場跡等を検出し、古代に暮らした人々の生活や本市における近代化遺産の一端を知る成果を上げることができました。

本報告書はこの成果について文化財調査報告書第512集としてまとめたものです。

結びに、本遺跡の発掘調査および報告書刊行にあたりご協力いただきました関係機関ならびに関係者の皆様に心から感謝申し上げ、序といたします。

令和7年3月

高崎市教育委員会
教育長 小林良江

例 言

1. 本書は、高崎市労使会館建替え事業に伴う東町遺跡8の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市東町80-1に所在する。
3. 本遺跡は、高崎市遺跡番号「860」である。
4. 発掘調査作業及び整理作業は、高崎市教育委員会文化財保護課が行った。調査体制は次のとおりである。

教育長	飯野眞幸（～令和5年6月）、小林良江（令和5年10月～）
教育部長	小見幸雄（令和4年度）、青柳正典（令和5・6年度）
文化財保護課長	角田真也
課長補佐兼埋蔵文化財担当係長	清水豊（令和4・5年度）
埋蔵文化財担当係長	滝沢匡、小根澤雪絵（令和6年度）
庶務担当	佐藤聡子、深澤恵（令和4・5年度）、木村夏葵、伊藤育美（令和4年度）、瀧上充弘（令和5年度）
	小保方勝、印南舞日愛（令和6年度）
調査担当	和田健一（令和4・5年度）、宮下昌文
整理担当	田村孝、宮下昌文

5. 発掘調査及び整理作業期間は以下のとおりである。

A・B区発掘	令和5年3月1日～令和5年7月26日
C区発掘	令和6年1月29日～令和6年3月16日
整理作業及び報告書作成	令和6年4月1日～令和7年3月31日
6. 本書の執筆・編集は田村、宮下が行った。発掘調査中の遺構等記録写真撮影は和田が実施した。
7. 発掘調査に際し、表土掘削および埋め戻し作業は（株）井ノ上が実施した。
8. 本遺跡の調査および整理作業に係る各種業務委託は、以下のとおりである。

基準杭設置および遺構測量：（株）測研	空中写真撮影：（株）測研
出土遺物デジタル記録作成：（有）毛野考古学研究所、（株）測研	
自然科学分析：（株）古環境研究所	
9. 本調査の出土遺物や記録図面、写真類は高崎市教育委員会文化財保護課で保管している。
10. 発掘調査にあたり、地元関係者及び関係機関、所管部署にご協力をいただきました。
11. 本書の作成にあたって、次の機関・個人から御指導御協力をいただいた。記して感謝いたします。
大西雅弘、片野雄介、永井尚寿、水谷貴之、國見 徹、山本修弘、結城理恵、マックス株式会社、高崎市立中央図書館市史担当（順不同・敬称略）

12. 東町遺跡の既刊報告書として、次の文献がある。

『東町遺跡調査報告書 高崎市文化財調査報告書第98集』	高崎市教育委員会	1989年
『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 東町Ⅱ遺跡 高崎市文化財調査報告書第120集』	高崎市教育委員会	1992年
『東町遺跡Ⅲ 高崎市文化財調査報告書第130集』	高崎市教育委員会	1993年
『東町Ⅳ遺跡 高崎市文化財調査報告書第138集』	高崎市教育委員会	1995年
『東町Ⅴ遺跡 高崎市文化財調査報告書第146集』	高崎市教育委員会	1996年
『東町Ⅵ遺跡 高崎市遺跡調査会調査報告書第78集』	高崎市遺跡調査会	2000年
『東町遺跡7 高崎市文化財調査報告書第301集』	高崎市教育委員会	2012年

凡 例

1. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25000地形図「高崎」、高崎市都市計画基本図1/2500を使用した。
2. 本書で使用した座標値は平面直角座標第IX系国土座標（新世界測地系2011）を用い、方位は同座標北である。
3. 遺構図および遺物図の縮尺は、各図に示した。
4. 土層・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会事務局・（財）日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』（2015年版）を使用した。
5. 本書で触れる代表的なテフラ等火山噴出物の略号は次のとおりである。
As-A（浅間A軽石）：天明3（1783）年 Hr-FA（榛名二ツ岳渋川テフラ）：6世紀初頭
As-B（浅間B軽石）：天仁元（1108）年
As-C（浅間C軽石）：3世紀後半
6. 遺物観察表の数値は、以下のとおりである。
数値のみ：完存値（ ）：残存部分の数値
7. 遺物註記の略号は次のとおりである。
CR：陶磁器類 FL：製糸器具類 FP：耐火製品類 GL：ガラス製品類 IN：罫子類
RB：赤煉瓦 WB：耐火煉瓦

目 次

序

例言

凡例 目次

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	2

第2章 遺跡の地理的環境と周辺の遺跡

第1節 地理的環境	2
第2節 周辺の遺跡	2
第3節 基本土層	5

第3章 検出した遺構・遺物

第1節 概要	6
第2節 検出した遺構	6
第3節 出土遺物	18

第4章 調査成果と課題

第1節 東町遺跡周辺の水田遺構との関連	44
第2節 近代における高崎市東町80番地周辺の土地利用と検出された遺構について	44
第3節 出土繰糸鍋・煮蕪鍋と刻印について	47
第4節 出土繰糸鍋・煮蕪鍋と2つの製糸場について	48
第5節 2つの製糸場に関わる出土遺物について	49

第5章 自然科学分析

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図1	調査区位置図	1
図2	東町遺跡8・近隣遺跡位置図	3
図3	周辺の遺跡分布状況	4
図4	基本土層図	5
図5	A・B区B軽石下水田跡全体図	8
図6	C区B軽石下水田跡検出馬蹄跡 平面・エレベーション図	9
図7	A～C区近代面全体図・ A区基礎石列平面図	12
図8	A区・B区調査区壁地層断面図	14
図9	A区1号コンクリート遺構・ レンガ遺構全体図	15
図10	A区3号レンガ遺構平面図	15
図11	B区井戸跡平面図・ C区1号コンクリート遺構断面図	16
図12	C区1号レンガ遺構全体図	16
図13	出土遺物実測図1	27
図14	出土遺物実測図2	28
図15	出土遺物実測図3	29
図16	出土遺物実測図4	30
図17	出土遺物実測図5	31
図18	出土遺物実測図6	32
図19	出土遺物実測図7	33
図20	出土遺物実測図8	34
図21	出土遺物実測図9	35
図22	出土遺物実測図10	36
図23	出土遺物実測図11	37
図24	出土遺物実測図12	38
図25	出土遺物実測図13	39
図26	昭和9年高崎市鳥瞰図 吉田初三郎作	50
図27	上記の拡大図	50
図28	東町遺跡8周辺地図変遷	51
図29	『高崎大観』所収 小口組高崎製糸所	52
図30	山田興業株式会社 工場敷地建物配置図	52
図31	山田興業株式会社 工場機械配置図	52
図32	東町遺跡8周辺空中写真(昭和23年)	53
図33	東町遺跡8周辺空中写真(昭和36年)	54

写真図版目次

PL1	A区近代面遺構1
PL2	A区近代面遺構2
PL3	A区近代面遺構3
PL4	A区近代面遺構4
PL5	B区近代面遺構1
PL6	B区近代面遺構2
PL7	B区近代面遺構3・C区近代面遺構1
PL8	C区近代面遺構2
PL9	C区近代面遺構3
PL10	C区近代面遺構4
PL11	A・B区B軽石下水田跡・A区B軽石下 水田跡全景
PL12	A区B軽石下水田跡状況
PL13	A区B軽石下水田跡状況・B区B軽石下 水田跡全景
PL14	B・C区B軽石下水田跡状況
PL15	出土遺物1～4
PL16	出土遺物5～9
PL17	出土遺物10～27
PL18	出土遺物28～42
PL19	出土遺物43～49
PL20	出土遺物50～53
PL21	出土遺物54～65
PL22	出土遺物66～79
PL23	出土遺物80～102・106～108
PL24	出土遺物103～105・109～116
PL25	出土遺物117～131
PL26	出土遺物132～142

表目次

出土遺物観察表1(製糸器具類鍋)	40
出土遺物観察表2 (製糸器具類その他・陶磁器類)	41
出土遺物観察表3(陶磁器類・瓦類・煉瓦類)	42
出土遺物観察表4 (耐火製品類・ガラス製品類)	43
出土遺物観察表5(ガラス製品類・木製品類)	44

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

令和3年(2021)5月26日、市商工観光部産業政策課(以下、「市産業政策課」という。)から、高崎市東町80-1に所在する高崎市労使会館の建替え計画があり、対象地内における埋蔵文化財の照会が高崎市教育委員会文化財保護課(以下、「市教委」という。)にあった。

対象地は南側の市道新設や東側の東三条通り拡幅工事の際の発掘調査(東町V遺跡、東町IV遺跡)で平安時代のAs-B直下水田が検出されていることから、事前に試掘調査をする必要がある旨を市産業政策課に伝えた。市産業政策課から令和3年10月11日付けで試掘調査の依頼を受け、市教委では令和3年11月25日労使会館建物南側駐車場の新規建物計画予定地に3箇所試掘溝を設定し調査した結果、3箇所ともAs-B下に水田土壌と思われる黒色土の堆積を検出した。市教委は令和3年11月30日付け第224-5号で埋蔵文化財試掘調査結果および意見について市産業政策課へ回答し、令和3年12月1日付け第245-1号で対象地を周知の埋蔵文化財包蔵地として把握した旨を群馬県知事(地域創生部文化財保護課)に報告した。試掘調査結果を基に市教委は埋蔵文化財保護について市産業政策課及び建築工事を所管する市都市整備部市街地整備課と協議を進めたが、計画変更は不可能であるとの結論に達した。このため建物新築部分について事前に発掘調査を行い記録保存の措置を講ずることになった。調査は令和4年度(2022)当初予算をもって市教委直営で実施することとなった。

労使会館の建替え計画範囲は現駐車場および現建物の一部であることから、現建物の解体後にも発掘調査が必要であった。また労使会館が令和5年(2023)3月末日まで利用される都合で、調査は会館南側の駐車場部分から着手し、会館建物解体中に工事立会を実施、建物解体後は会館南に隣接する駐車場部分および建物下部について実施する運びとなった。なお、調査開始時期が令和5年3月初旬であり令和4年度内に完了できないため、予算の繰越措置を執った。

第2節 調査の方法

発掘調査は令和5年3月1日から7月26日まで、および令和6年(2024)1月29日から3月16日まで実施した。当初は調査対象地から調査中に生じた排土を外部に搬出する計画であったが、搬出先の都合で置き場は労使会館敷地内に確保することになった。このため、調査対象地を東西で2分割(A区、B区)し、東側(A区)から着手し、終了後反転し西側(B区)を調査した。建物解体後の調査区をC区とした。

発掘調査は、試掘調査結果に基づきAs-B直上まで重機を使用して表土掘削作業を行った。ところが、コンクリート下から多量の煉瓦、瓦や縁糸鍋破片が埋め立てに使用した炭殻層直上から見つかった。これらは大正時代から昭和初期の製糸工場に関連する遺物であることが想定され、コンクリート構造物も製糸工場に関連するものとみられることから、可能な範囲で近代遺構を調査する方針を取った。排土中にコンクリート、煉瓦等が多量に混入していることから作業員による分別作業を逐次実

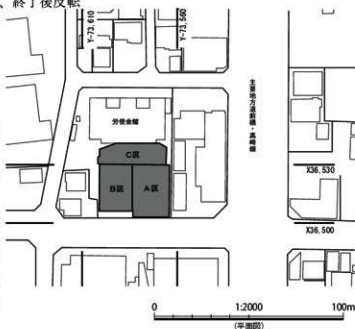


図1 調査区位置図

施した。発掘調査中の掘削によって生じた排出土は、調査区横を仮置き場として管理した。遺構確認後は、人力により遺構の掘削や軽石層の除去を順次行った。各遺構の覆土堆積状況などの土層観察は調査区壁面を利用し、分層作業や写真撮影、断面図化作業を行った。掘削が完了した遺構はフィルムカメラを用いて35mmモノクロフィルム及びデジタルカメラにより記録写真撮影を行った後、適宜記録図作成を行った。調査完了後にA区・B区は埋め戻しを行った。C区については、近代コンクリート基礎が強固なため一部分のみAs-B直上まで掘削して水田面を検出した。調査完了後は埋め戻しせず現場を工事施工業者に引き渡した。

第3節 調査の経過

<令和5年>

- 3月1日 現地での調査機材等搬入作業開始
- 3月6日 バックホウ搬入、調査区（A区）の掘削開始、作業員投入
- 5月10日 A区空中写真撮影
- 5月11日 A区埋め戻し作業開始
- 5月18日 B区掘削開始
- 5月22日 高崎市やるベンチャーウィークで市立第一中学校生徒4名受入れ（25日まで）
- 6月12日 高崎市やるベンチャーウィークで市立大瀬中学校生徒5名受入れ（15日まで）
- 6月27日 B区空中写真撮影
- 7月5日 B区埋め戻し開始
- 7月10日 B区埋め戻し完了、以降調査事務所残務整理（26日まで）

<令和6年>

- 1月29日 調査区打合せ
- 1月30日 調査区（C区）掘削開始、1号煉瓦遺構を検出
- 2月6日 前夜から降雪。積雪のため除雪作業
- 3月7日 C区空中写真撮影
- 3月16日 機材撤収、調査完了

第2章 遺跡の地理的環境と周辺の遺跡

第1節 地理的環境

本遺跡は高崎市東町80-1に所在し、J R 高崎駅北北東450mの高崎市街地に位置する。榛名山南麓に広がる相馬ヶ原扇状地は、南下していくと平坦な地形の前橋台地へと続いていく。この前橋台地の東縁は前橋市の広瀬川、西縁は高崎市の烏川とされ、その中央付近を東南流する井野川流域には井野川低地帯が広がっている。井野川低地帯の西側を特に高崎台地と呼ぶことが多いとされ、広域な平坦面が展開している（高崎市2003）。高崎台地では烏川左岸や井野川右岸、台地内を東南流する粕沢川や一貫堀川など小河川沿いに自然堤防状微高地が展開する。戦後、市街化した地域が拡大したことや1970年代後半からの大規模圃場整備事業や区画整理事業、工業団地造成などによって自然地形が大きく変わってきているが、自然堤防のやや高い所では畑が、その他では水田が広がるという景観がかつては本遺跡周辺でも見られた。標高は95.10mである。

第2節 周辺の遺跡

旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物は本遺跡周辺では検出されていない。本遺跡の立地する高崎市地上においては縄文時代の土器や石器の出土は確認されるものの遺構として確認できる遺跡の分布は

極めて少ない。本遺跡の東南東1.7km程の上中居遺跡群(46、図3の番号、以下同じ)では前期後半及び中期中葉～後期中葉の多量の土器が出土しているが、堅穴建物跡として確認されているものはない。図3の範囲外になるが、高崎情報団地Ⅱ遺跡では井野川右岸の自然堤防状微高地に中期後半からの大規模な集落が形成されている。

弥生時代は中期後半になると高関村前Ⅱ遺跡(31)で堅穴建物跡、高関堰村遺跡(27)で環濠の溝が検出されている。また、高崎競馬場遺跡(35)でも環濠集落が確認され、堅穴建物跡や掘立柱建物跡、礎床木棺墓などが検出されている。高崎城三の丸遺跡(36)でも環濠集落が確認され、中央部に四隅陸橋型の方形周溝墓が検出されている。近隣の東町Ⅲ遺跡(4)、東町Ⅳ遺跡(5)では弥生時代後期とみられる溝が検出されている。

古墳時代になると上中居遺跡群(46)で前期の集落と2基の方形周溝墓が、上中居辻薬師Ⅱ遺跡(30)で2基の方形周溝墓が、中居町1丁目遺跡(42)では1基の方形周溝墓が調査されている。さらに、中居町1丁目遺跡4(45)では前方後方形周溝墓とみられるものが1基確認されている。これらの遺跡の東方には井野川低地帯が広がり、その右岸の微高地に周溝墓群が展開していたことが理解される。東町Ⅲ遺跡(4)では古墳時代初頭に降下した浅間C軽石下水田跡が、東町Ⅳ遺跡(5)では水田の畦畔は確認されなかったものの水田土壌を検出している。水田面からは弥生中期から後期、古墳前期の土器片が出土していることや水田の下層には前述の弥生時代後期の溝が確認されていることなどから、弥生時代後期からの耕作の継続が推定されている。古墳時代中・後期になると高崎城坪の樹形及び三の丸遺跡、三の丸遺跡(36)で後期の堅穴建物跡が検出されているが、大規模な集落としては高崎情報団地Ⅱ遺跡がある。5世紀中頃から末までの堅穴建物跡185軒を調査している。古墳は本遺跡の南東2.2kmに墳丘長推定130m程の前方後円墳の越後塚古墳(47)が位置している。主体部は堅穴式系の埋葬施設と推定されている。この他小円墳が散在していたようだが、現在は上中居諏訪神社がまつられている稲荷塚古墳(48)、『上毛古墳総覧』佐野村71号)が存在するにとどまる。

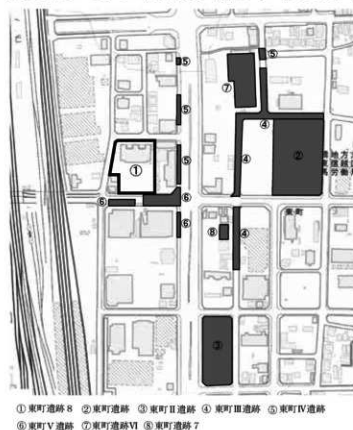


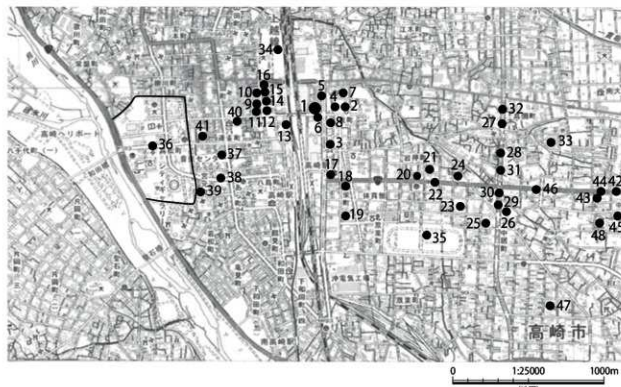
図2 東町遺跡8・近隣遺跡位置図

奈良平安時代になると集落が広く分布する。また、天明元年(1108)の浅間山噴火に伴うテフラ(浅間B軽石)に埋没した平安時代の水田跡が広域に検出されている。火山噴出のテフラはその性質から広域に同時性が確認できる特徴を持っている。したがって、このテフラに直接埋没している水田跡同士は同時期に存在したことが明らかで、大規模な耕地開発が行われていたことが把握される。本遺跡を始めてとして、図3に掲載した遺跡から検出されている。

中世になると高関村前遺跡(28)、高関村前Ⅱ遺跡(31)、高関堰村遺跡(27)、上中居辻薬師遺跡(29)、上中居辻薬師Ⅱ遺跡(30)などで城館・環濠屋敷が確認される。上中居辻薬師遺跡Ⅰ・Ⅱ、上中居西屋敷Ⅱ遺跡(26)は隣接した遺跡で、反町城といわれる中世居館跡とされる。

近世になると慶長3年(1598)に井伊直政が箕輪城から高崎城に拠点を移したにより、城下町が形成される。高崎城遺跡(36)の発掘調査は25次まで実施されてきており、本丸、二の丸、三の丸、榎郭、西郭の堀跡等が検出されている。本遺跡の西250m程の真町Ⅰ遺跡(9)、真町Ⅱ遺跡(10)では高崎城下町の周囲を区切る「遠構え」の堀が確認されている。本遺跡一帯は高崎城下の外側に位置し、赤坂村の一部であったことがわかる。東町Ⅴ遺跡(6)では天明3年(1783)噴火の浅間A軽石に埋没した水田を復旧した痕跡が確認されている。東町Ⅲ遺跡(4)では浅間A軽石下の水田跡とそれの復旧痕が検出されている。同様な復旧痕は栄町Ⅰ遺跡(17)、栄町Ⅲ(19)遺跡、真町Ⅰ遺跡などでも発掘調査されており、自然災害後の人々の復旧作業の動きが捉えられる。

栄町Ⅰ遺跡(17)では炭殻層除去段階で大型木造建築の基礎に用いたと思われる松杭列が確認されている。大正5年(1916)の「高崎市街全図」や昭和6年(1931)の「高崎市全図」などをみると、高崎駅東口側には高崎板紙会社があったことがわかり、それに関する建物の可能性がある。飯塚西金井Ⅱ遺跡でも木杭列が確認されている。この地は明治30年(1897)に製糸工場碓氷社高崎分工場が設立されており、集緒器やガラス製フリカギ、繰糸鍋などが捨てられた土坑も発掘されており、碓氷社関連の建物が検出されたものとみられる。



- ①. 東町遺跡8(本調査) ②. 東町遺跡 ③. 東町Ⅱ遺跡 ④. 東町Ⅲ遺跡 ⑤. 東町Ⅳ遺跡 ⑥. 東町Ⅴ遺跡
 ⑦. 東町Ⅵ遺跡 ⑧. 東町遺跡7 ⑨. 真町Ⅰ遺跡 ⑩. 真町Ⅱ遺跡 ⑪. 真町Ⅲ遺跡 ⑫. 旭町Ⅰ遺跡
 ⑬. 旭町Ⅱ遺跡 ⑭. 旭町Ⅲ遺跡 ⑮. 旭町Ⅳ遺跡 ⑯. 弓町Ⅰ遺跡 ⑰. 栄町Ⅰ遺跡 ⑱. 栄町Ⅲ遺跡
 ⑲. 栄町Ⅴ遺跡 ⑳. 岩押町Ⅰ遺跡 ㉑. 岩押町Ⅱ遺跡 ㉒. 岩押町Ⅲ遺跡 ㉓. 上中居平塚遺跡
 ㉔. 上中居平塚Ⅱ遺跡 ㉕. 上中居西屋敷Ⅰ遺跡 ㉖. 上中居西屋敷Ⅱ遺跡 ㉗. 高岡塚村遺跡
 ㉘. 高岡村前遺跡 ㉙. 上中居辻薬師遺跡 ㉚. 上中居辻薬師Ⅱ遺跡 ㉛. 高岡村前Ⅱ遺跡
 ㉜. 高岡東沖・村前遺跡 ㉝. 岡久保遺跡 ㉞. 江木諏訪西遺跡 ㉟. 高崎競馬場遺跡 ㊱. 高崎城Ⅰ～25次
 ㊲. 松物町遺跡 ㊳. 城下町遺跡 ㊴. 城下町Ⅱ遺跡 ㊵. 連雀町遺跡 ㊶. 柳町遺跡 ㊷. 中居町1丁目遺跡
 ㊸. 中居町1丁目遺跡2 ㊹. 中居町1丁目遺跡3 ㊺. 中居町1丁目遺跡4 ㊻. 上中居遺跡群
 ㊼. 越後塚古墳 ㊽. 稲荷塚古墳

○ 内数字の遺跡では浅間B軽石下水田が検出されている

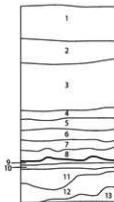
図3 周辺の遺跡分布状況

第3節 基本土層

調査地は労使会館の駐車場として使われており、全面アスファルト舗装となっていた場所である。アスファルトの下が砕石層で、現地地表70cm程までは近代以降の建物を解体した残土を埋めたり、建物基礎部分の残骸などが確認されたり、コンクリート塊、礫、煉瓦片などが混在する攪乱層になる。遺存状況の良い場所ではこの層から炭殻層（一部は下層の水田面）にかけて建物基礎などの近代遺構が検出される。この攪乱層の下に層厚40～50cmの炭殻層が確認される。この層は石炭の焼却灰の堆積層で、高崎駅周辺の栄町遺跡、旭町遺跡、本遺跡を含む東町遺跡などで広範囲に検出されるものである。鉄道の蒸気機関車の燃料として使用された石炭の焼却灰を主な供給源とし、市街化の過程で土地のかさを上げるために埋設されたものとみられ、明治17年(1884)の高崎駅開業以降の堆積と考えられる。

炭殻層下が旧地表面で、明治時代の地図によれば水田が広がっていたことがわかる。この土には天明3年(1783)噴火の際の浅間A軽石が混入しており、近世後期から近代にかけての堆積土であることがわかる。本遺跡では確認できなかったが、南に隣接する東町V遺跡ではこの層の下部に浅間A軽石降下で埋没した水田を復旧している遺構が確認されている。A・B区ともに8層は天仁元年(1108)降下の浅間B軽石層で、その下が平安時代水田跡となる。

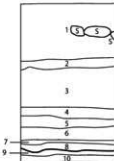
A区 北壁柱状図
L=95.100m



A区 北壁柱状図

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1 褐灰色 (10YR 6/1) | 砕石(10～60mm)層。 |
| 2 灰黄褐色 (10YR 5/2) | 砂利(3～5mm)層。 |
| 3 黒褐色 (10YR 3/1) | 炭殻層。粘性なし、しりりなし。 |
| 4 黒褐色 (10YR 3/2) | As-A(1～5mm)含む。粘性なし、しりりあり。 |
| 5 暗褐色 (10YR 3/3) | As-A(1～2mm)含む。粘性なし、しりりあり。 |
| 6 黒褐色 (10YR 2/3) | As-A(1mm)含む。粘性なし、しりりあり。 |
| 7 黒褐色 (10YR 2/2) | 粘性なし、しりりあり。 |
| 8 灰黄褐色 (10YR 6/2) | As-B層。粘性なし、しりりなし。 |
| 9 黒色 (10YR 2/1) | 粘質土(水田面)。しりりあり。 |
| 10 褐灰色 (10YR 4/1) | 粘質土。しりりあり。 |
| 11 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) | 粘質土。しりりあり。 |
| 12 褐色 (7.5YR 4/6) | 粘質土。酸化物を多く含む。しりりあり。 |
| 13 にぶい黄褐色 (10YR 6/3) | 粘質土(前橋泥流)。しりりあり。 |

B区 西壁柱状図
L=95.100m



B区 西壁柱状図

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) | 砕石・コンクリート塊・煉瓦を混入する。 |
| 2 黒褐色 (10YR 3/2) | 砂質土。モルタル含み粘性なし、しりりあり。 |
| 3 黒褐色 (10YR 3/1) | 炭殻層。粘性なし、しりりなし。 |
| 4 黒褐色 (10YR 3/1) | 粘性なし、しりりなし。 |
| 5 黒褐色 (10YR 2/3) | As-A(1mm)含む。粘性なし、しりりあり。 |
| 6 黒褐色 (10YR 3/1) | As-A(1mm)含む。粘性なし、しりりあり。 |
| 7 黒褐色 (10YR 2/2) | 粘性なし、しりりあり。 |
| 8 灰黄褐色 (10YR 4/2) | As-B層。粘性なし、しりりなし。 |
| 9 黒色 (10YR 2/1) | 粘質土。As-C(1mm)含む。しりりあり。 |
| 10 黒褐色 (10YR 3/1) | 粘質土。しりりあり。 |

0 1:40 1m
(断面図)

図4 基本土層図

第3章 検出した遺構・遺物

第1節 概要

東町8遺跡の調査範囲は、新労使会館建物の建設予定地部分である。現行建物の使用状況や建物解体工事の都合によりA区（駐車場部分東側）、B区（駐車場部分西側）、C区（建物南側に隣接する駐車場部分及び建物下部南側）に分割して調査した。

調査面積は概ねA区450㎡、B区450㎡、C区400㎡で、合計1,300㎡である。

各調査区からはAs-B一次堆積層直下の水田跡、近代（大正時代～昭和20年代頃）の工場遺構および近代遺物が検出された。なお、C区の北側約1/3は労使会館建物により壊されていた。

第2節 検出した遺構

○水田跡（図5、6）

A区全面、B区全面、C区東西の各端部で、As-B一次堆積層直下から水田面を検出した。As-B一次堆積層は調査区全体から確認された。水田土壌は黒色粘質土を基調とする。A区で東西走向の畦畔1条、B区で南北走向の畦畔1条、東西走向の畦畔1条を検出した。C区では畦畔は検出されず、南西部分で若干低くなる。水田面の標高は93.35～93.54mで、西から東に向かって低くなる傾向にある。A区北側の水田面は凹凸が少なく、他の水田面では凹凸が目立った。明確な馬蹄跡や人足跡のみ図示した。なお、南北走向の畦畔はB区の調査当初に東壁際排水用の溝を掘削した際に検出できておらず、畦畔遺構の一部を壊す結果となった。

畦畔の幅は0.9m～1.2m、水田面からの比高差は0.05m前後である。水口や水路は確認されなかった。また水田跡に伴う遺物はなかった。なお、A区北東北壁際に黒色粘質土の下層からHr-FA二次堆積土が広がる範囲が見られ、Hr-FAを除去すると浅い不整形の掘り込みが存在した。

○近代（図7～12）

表土（元駐車場なので主に砂利層）直下に厚さ15～25cm程度のコンクリート面が広がっていた。このコンクリートを除去するとほぼ直下に密着するようにコンクリート遺構や煉瓦遺構が広がっていた（PL1）。当初As-B下水田面に松杭が打設されていた箇所とコンクリート構造物の時代が分からず調査区東側から順次As-B直上まで重機で掘削を進めていたが、図7のSPA-A'ラインまで掘削したところで、コンクリートの中から多量の煉瓦、屋根瓦片が見つかり、近代遺構が随所で残っていると判断された。しかしコンクリート同士が固着した場所が多く、掘削する際に遺構範囲の把握や記録が不完全な箇所が出るなど、調査情報に不備があることをお断りしておく。

1号コンクリート遺構（PL1） A区中央西寄りに位置する。南北5.4m、深さ44cm、壁厚18cmの箱状の形態。コンクリートの下部に栗石が敷き詰められていた。内側には煉瓦、耐火煉瓦、瓦破片が隙間なく詰め込まれた状態で、その上はコンクリートで塞がれていた。貯水槽と推定される。

2号コンクリート遺構（PL1） A区南西壁際に位置する。南北方向に延びる建物土台と土間の一部で、調査区外南側に続く。下部は栗石が敷かれ、南端と北端には大きめの石が置かれ石間距離は約3.6m（PL1）であった。建物基礎および床面と推定される。

3号コンクリート遺構（PL5） B区南東壁際に位置する。東側と中央部分に南北方向に延びるコンクリート根太基礎跡および土間が残る。東側の土間には円形の穴が1箇所ある。建物基礎および床面と推定される。

4号コンクリート遺構（PL5） B区中央に位置する。コンクリート土間に南北方向の凸状に根太基礎跡の高まりがある。北側と南側には東西方向のコンクリート側溝があり、コンクリート蓋で塞がれ

L=94.100m
SP1

SP1

L=94.400m
SP1

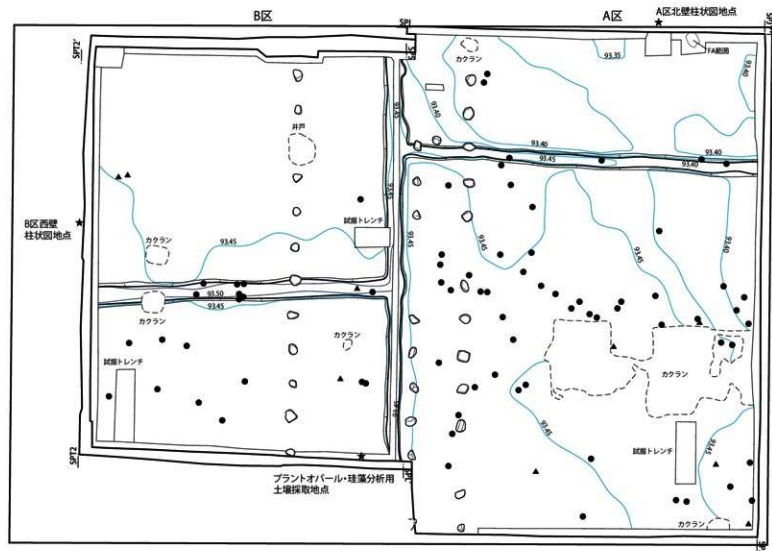
SP1

(SPH-1)

- 1 黒色 (10YR 2/1) 粘質土(赤褐色)。粘性あり、しまりあり。
- 2 褐色 (10YR 4/1) 粘質土。粘性あり、しまりあり。
- 3 にいり黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土。粘性あり、しまりあり。
- 4 褐色 (7.5YR 4/6) 粘質土。赤い腐植体が多く含む。粘性あり、しまりあり。
- 5 にいり黄褐色 (10YR 6/3) 粘質土(腐植体)。粘性あり、しまりあり。

X=36530
Y=75910

X=36530
Y=75500



X=36500
Y=73610

X=36500
Y=73500

L=94.000m
SP12

SP12

L=94.100m
SP5

SP1

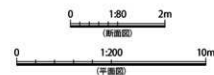


図5 A・B区B軸石水田跡全体図

ていた。建物基礎および床面と推定される。

5号コンクリート遺構 (PL 5) B区西壁付近から東西方向の根太基礎跡が南北に各1本及び下部には栗石を配する。南北の布基礎間隔は約4.5m。南側基礎中央付近には四角柱状の高まりと平面的な広がりが存在する。表面はコンクリートで覆われていたがコンクリート面を除去すると下部から不整形の石6個 (S-35～S-40) を検出した。北側にはコンクリート側溝が伸びていたと想定される。石は6個以外に北辺コンクリート布基礎の下層から下部断面に3個確認でき、S-36とS-40の北に列状に延びる構造物の礎石と推定される。礎石構造物を設置後、新たに5号コンクリート遺構が構築されたとみられる。

6号コンクリート遺構 (PL 5) B区西壁際中央に位置し、東西方向に長い箱状の遺構で、下部に栗石と若干のレンガ片を配する。東西6.8m、南北2.2m、壁厚20cmで、北辺中央の北側に陶製甕1基が埋設されていた。コンクリート製便槽と推定される。

7号コンクリート遺構 (PL 5) B区西壁の南隅に位置する。南北62cm、東西72cm、壁厚30cmの強固な枡状遺構。埋土は下層に淡緑色土、上層に硬い金属サビ状固形物が堆積していた。軍需工場以降に伴う構造物と推定される。

8号コンクリート遺構 (PL 1) A区南西に位置する。東西に延びるコンクリート布基礎および土間の一部である。下部には栗石を配する。建物基礎および床面と推定される。

C区1号コンクリート遺構 (PL 8、図11) C区中央に位置し上層に2号側溝、南にC区2号レンガ遺構がある。南北2.25m深さ30cm壁厚8cmで底面は土圧により歪みがある。埋めた後北側に2号側溝が作られている。埋土中に白色物質 (漆喰片) が見られた。製糸工場の貯水槽と推定される。

A区1号レンガ遺構 (PL 2) A区中央やや北寄り。1号コンクリート遺構の北側に隣接する。煉瓦三段積で東側に延びていたと思われる。煉瓦積みの下に繰糸鍋破片が底部を上にして埋没していた。

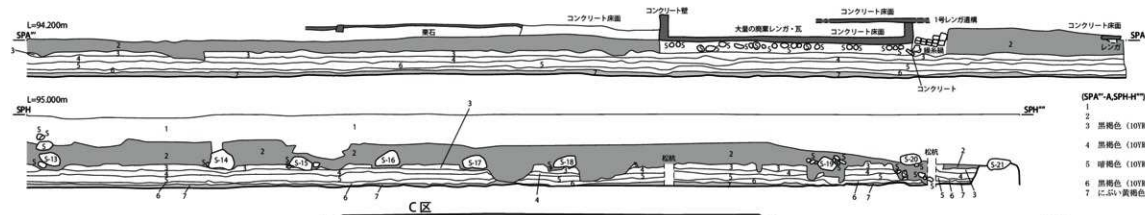
A区2号レンガ遺構 (PL 3) A区西S-8に直立する角柱石の南西に隣接する。煉瓦7段積みの枡および枡から東と北へ延びる土管各1本が確認された。東へ延びる土管は調査区東壁断面 (SPJ-J') の北から3本目の土管に対応すると推測される。

A区3号レンガ遺構 (PL 3) A区中央西のS-9西側に位置する。煉瓦と耐火煉瓦を縦積みにした枡状の遺構で、周囲は栗石である。東西50cm、南北57cm。南西側にも耐火煉瓦が不規則に置かれ、東側と南側は栗石で囲まれていた。

A区4号レンガ遺構 (PL 3・4) A区北西のS-9～S-12の西側に位置する。煉瓦7段積みで床面があり、表面および内面にモルタルを塗った構造物である。東壁の表側に突出して築かれた部分「支え壁」が2箇所ある。煉瓦外側の下4段目まではモルタルが塗られていないことから、このレベルまでは地中に埋まっていた可能性がある。床面は正方形と長方形の2区画あり、北側の区画の南東隅に円形の穴が1箇所ある。また南東隅の煉瓦基礎の下から南へ延びる土管1本を確認した。A区2号レンガ遺構へ延びていたと思われる。遺構の構造から貯水槽と推測される。

C区1号レンガ遺構 (PL 8) C区西壁際に位置する。北側は労使会館建物で壊されていた。栗石を敷き詰めた上に砂礫を多く含むやや粗いコンクリート (厚さ約20cm) で固めた基礎 (東西1.8m以上、南北4.3m以上) を構築後、コンクリートの周囲に煉瓦を3段積みになっている。煉瓦積みの内側部分は炭殻を充填後、上面をモルタルで仕上げていた。調査区西際には煉瓦を8個横置きし正方形に組んだ高まりを南北2箇所、その南側には煉瓦を横置きして敷き詰め表面をモルタルで仕上げている。製糸工場以降の建物基礎と推測される。

C区2号レンガ遺構 (PL 9) C区中央に位置し、北隣にC区1号コンクリート遺構がある。東西65cm南北70cmの煉瓦積みで表面および内面をモルタルで塗った枡状遺構である。栗石が充填されていた。北側壁面に土管を使用した穴が1箇所ある。C区1号コンクリート遺構に関連する貯水施設と推

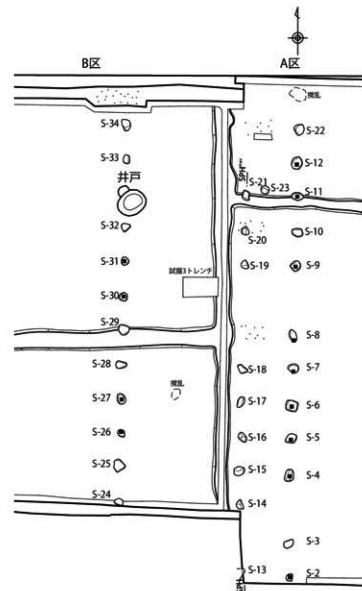


(SPA~A,SPH~H)
 1 表土、腐植土
 2 黒褐色 (10TR 3/1)
 3 黒褐色 (10TR 3/2)
 4 黒褐色 (10TR 3/2)
 5 黒褐色 (10TR 3/3)
 6 黒褐色 (10TR 2/2)
 7 に近い黄褐色 (10TR 5/3)

表土、腐植土
 砂質土、As-A(層小1mm以下)を含む(N5)、粘りなし、しまりなし。
 砂質土、As-A(層小1mm以下)を含む(N5)、粘りなし、しまりなし。
 砂質土、As-A(層小1mm以下)を含む(N5)、粘りなし、しまりなし。
 As-粘りなし(N5)、粘りなし、しまりなし。
 As-粘りなし、しまりなし。
 As-粘りなし、しまりなし。

X=36335
 Y=73935

X=36335
 Y=73935



X=36300
 Y=73935

X=36300
 Y=73935

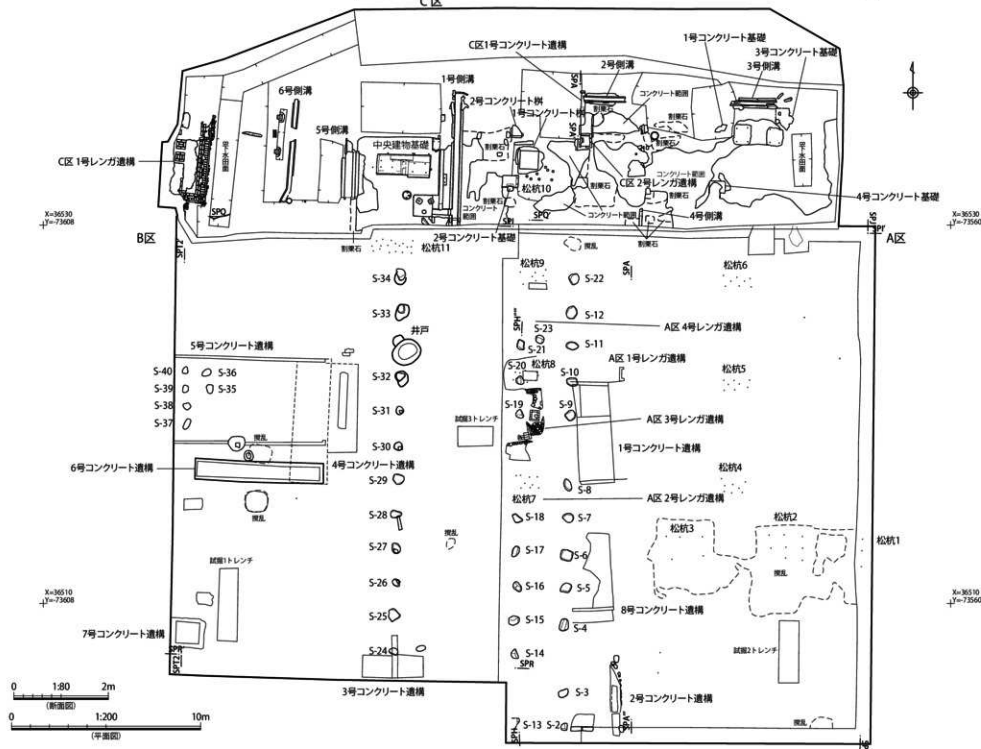


図7 A~C区近代面全体図・A区基礎石列平面図

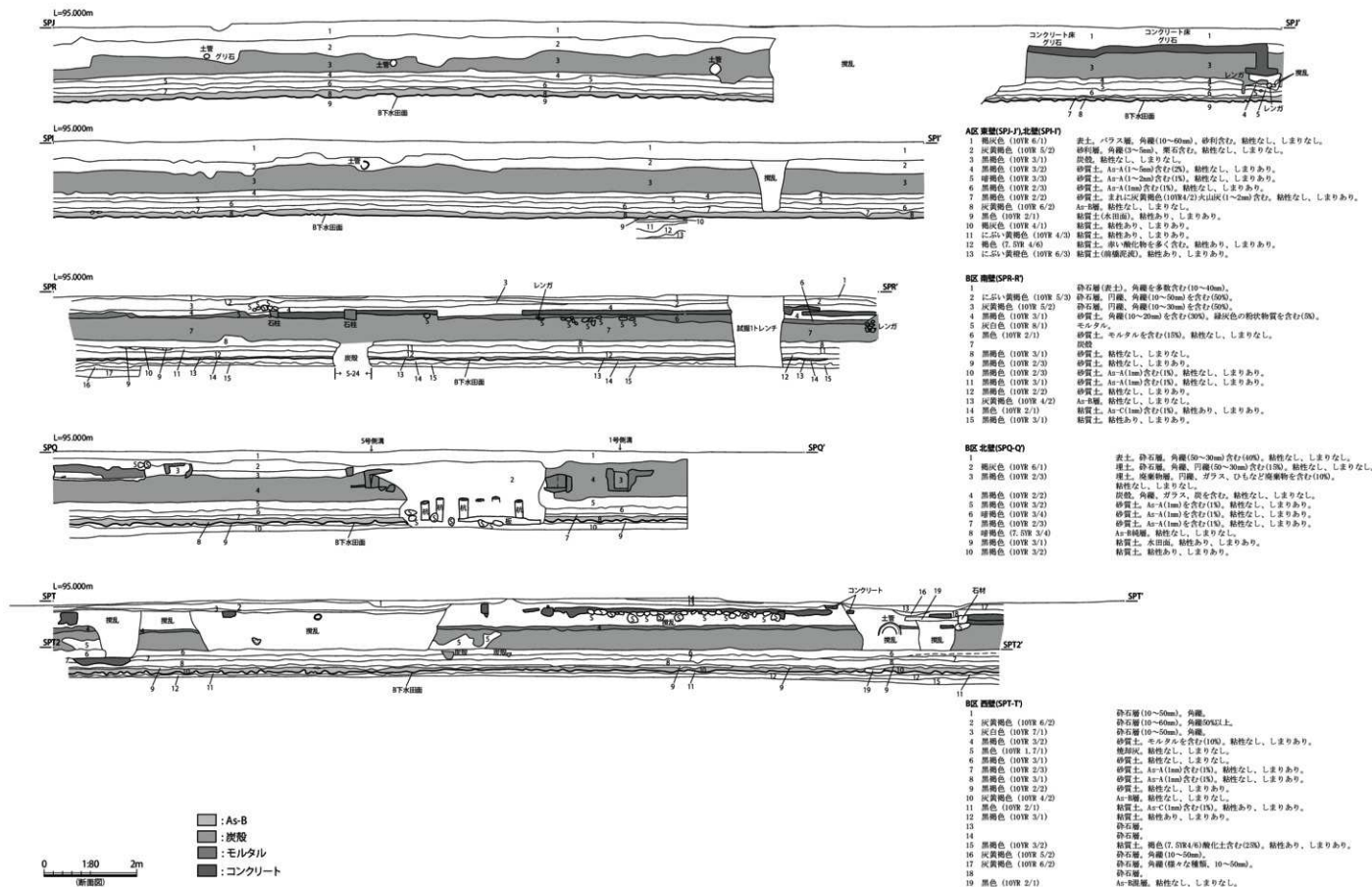
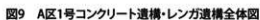


図8 A区・B区調査区壁地層断面図



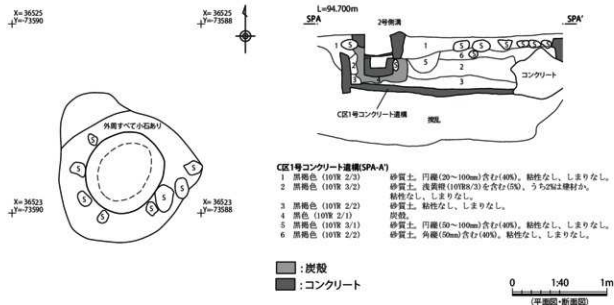


図11 B区井戸跡平面図・C区1号コンクリート遺構断面図

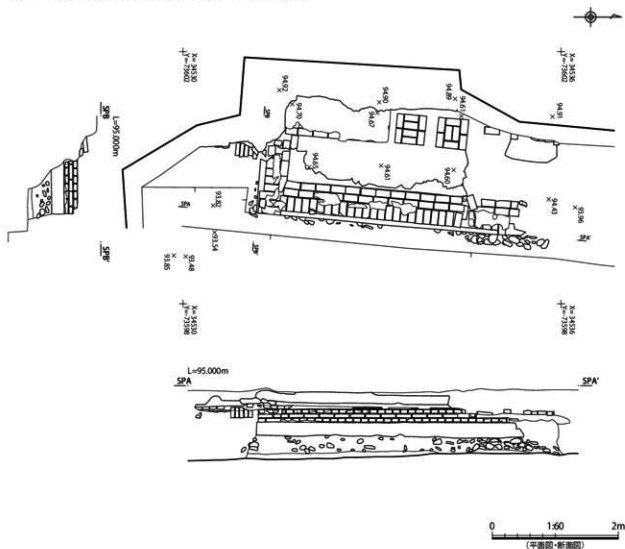


図12 C区1号レンガ遺構全体図

測される。

1号コンクリート基礎 C区東に位置する厚さ15cmの構造物。北辺中央に口の刻みがある。

2号コンクリート基礎 C区中央の松杭10の西に接する。固いコンクリート製で、基礎南側中心に凝灰岩の切石柱が埋め込まれていた。軍需工場の建物基礎と推測される。

3号コンクリート基礎 (PL 8) C区東壁際に位置し、北側の上層に3号側溝がある。厚さ15～20cmコンクリート構造物で、11cm×14cmの穴が4箇所あった。コンクリート上面から青色ガラス製糸鉤の破片が出土した。製糸工場の構造物と推定される。

4号コンクリート基礎 C区南東に位置する。2号コンクリート基礎と同様固いコンクリート製で、東側捨てコンクリートの上に大型コンクリート基礎が接していた。軍需工場の建物基礎と推測される。

1号コンクリート樹 (PL 8・9) C区中央に位置し、松杭10上の大型コンクリート基礎で一部壊されている。煉瓦、石、電線が埋め込まれ北東側上層には強固な捨てコンクリートが接着していた。大型コンクリート基礎の支えとして利用されたと思われ、軍需工場に関連する構造物と推定される。

2号コンクリート樹 (PL 9) C区中央に位置し、東辺壁と北辺壁は労使会館建物により壊されていた。埋土には白色物質（漆喰）が混入し、底部から横転したガラス瓶が出土した。

中央建物基礎 (PL 9) 東側の1号側溝に沿って根太基礎の高まり、その西側に平面長方形および正方形のコンクリート構造物、底面はコンクリートでほぼ平坦、底面中央にコンクリート円形蓋が設置される。底面から鉄製管数本が延び、コンクリート表面には鉄製ボルトが残る。淡緑色土混じり土および瓦破片で埋められていた。

1号側溝 (PL 7) C区中央建物基礎東側に位置し、南北方向に延び北端で東側に折れるコンクリート製水路。南端に西側から直交する側溝があるが、合流部はコンクリートで塞がれていた。

2号側溝 (PL 8) C区東西方向に延びるコンクリート製水路。2層構造で幅30cm高さ18cmのU字溝を設置し使用した後、厚さ2cmのコンクリートで溝を覆い両側に厚さ約12cm高さ25cmのコンクリート壁を作り新たな側溝としている。底面には緑色物質が付着していた。

3号側溝 (PL 8) C区北東に位置し東西方向に延びるコンクリート製水路。基本的な構造は2号側溝と同じで、3号コンクリート基礎を埋めてU字溝を構築していた。2号側溝の続きと想定される。

4号側溝 C区内の南北方向に延びる陶製土管。コンクリート面の直下に埋設されていた。

5号側溝 C区西寄りの南北方向に延びる三面コンクリート製U字溝で、コンクリート蓋が設置されていた。中央建物基礎を埋めた後に構築されている。工場関連の構造物と推測される。

6号側溝 C区西側に位置する。三面コンクリート側溝で幅14cm上部は欠損し、南側で松杭を避けやや西に屈曲していた。底面には緑色物質が付着していた。中央は塩ビ管により壊されていた。

井戸 (PL 7) B区北東のS-32とS-33の間に位置する。口径81cm、長さ61cm、厚さ5cmの土管を埋め込み周囲は石で充填していた。地下水位は土管の口まで達していた。石列のS-32とS-33の間の石を壊して新たに作られたものと推定され、内部から板等が出土した。

石列 (PL 4) S-2～3、S-4～8、S-9～22およびS-24～34は、B下水田面をやや掘り込むレベルで直径40～60cm前後の石が約1.8m間隔で南北方向に並び出土した。石の上に角柱の切石を直立させた検出例が多かった。S-13～22は炭殻層の最下層レベルから約1.8m間隔で南北方向に並び出土した。S-35～40は炭殻層の最下層レベルから約1.8m間隔で南北方向に並び出土した。

松杭 (PL 4) 直径15cm前後の丸太杭を一箇所当たり8本程度打設していた。工場建物の大型コンクリート基礎を支えたものと推定される。

第3節 出土遺物

本遺跡出土の遺物は、ほとんどが炭殻層より上位の土層（造成土・炭殻、礫及びコンクリート片を含む近代以降の擾乱を受けている土層）からの出土で、特定の遺構から出土したものは極めて限られる。したがって、遺物の出土位置や高さの記録、出土状況の写真撮影などが行われていないものがほとんどである。遺物の記録は、取上げ後に調査区単位で器種ごとの整理番号を付して行ったものであり、その中から主な遺物について掲載した。

○製糸関連遺物

本遺跡の南に隣接する東町V遺跡では、大正5年（1916）に創業された株式会社龍栄社、それを吸収合併して大正13年（1923）に操業開始した小口組製糸場高崎工場に関係する遺物が出土している（高崎市教育委員会1996）。昭和6年（1931）、昭和9年（1934）の地図には「小口組製糸所」の建物位置が記されており、両者で建物配置が若干異なるが、今回の調査対象地がそれに含まれることは確かである。出土した遺物にも製糸関連のものが多数含まれている。

繰糸鍋（図13-1・2、図14-3・5、図15-6・7）

湯をはって繭糸をほぐし、繭から糸を取って生糸にする作業を行う鍋で、陶器製の半月形をしたいわゆる「半月鍋」である。繰糸鍋の構造は、繰糸作業者から見て手前が円形部、奥が直線部となっている。直線部の右端上側に蒸気導入部があり、上端径1.8～2.0cm程の穴があく。筒状になっており、パイプを入れて蒸気を導入する。直線部内壁に沿ってDの字状に粘土を貼り付け蒸気管を形成して、その面に蒸気を噴出するための小孔を列状にあけている。この蒸気噴出小孔列から鍋内に蒸気が広がる構造になっている。直線部左端外側には排水部が設けられている。排水部は上下それぞれに穴があく筒状を呈している。上穴は半円形で長径3.1～4.0cm、短径2.3～2.8cm、下穴は1.3～1.5cmの円形である。繰糸作業をするときは、上から棒を差し込み下穴をふさぎ、湯をためる。余分の湯は上穴の切込み部分から溢れ出る仕組みになっている。鍋本体の排水部につながる部分には径8mm程の排水小穴が5～7カ所あいており、ここから排水部に流れるようになっている。

蒸気導入部と排水部の位置は、当初は鍋の内側に設置されていたものが作業スペースの確保のため次第に外側に付けられるようになっていく。今回の調査で出土した繰糸鍋は、蒸気導入部、排水部ともに外側に設置されているいわゆる「外吹込み外排水」と呼ばれるものであった。

図13-1・2、図14-3・4の繰糸鍋は胎土が浅黄橙色を呈し、内面から口縁部外側まで灰白色の釉薬が施される。鍋全体の長軸（A）は44～46cm、短軸（B）は31～32cm程、全体高（C）は11cm程である。ほぼ同様な法量を示しており、規格性があると考えられる。鍋の底面には、釉薬が剥がれ、凹凸が目立つ部分がほぼ同様な位置に確認される。重ね焼きの痕跡とされる。円形部外面には製造者の刻印や筆文字が見られる。1には半月鍋の図案の中に「要」の文字、図案の上に右から「ナベヨ」、右に「登録」、左に「商標」の文字、左下に方形内に「末光」が斜めに、図案の左側に「江州信楽ナベヨ製」の刻印が押されている。また、刻印の左側に「龍」の筆字が刻印側を上にして書かれている。これらの刻印から明治時代信楽の奥田要助が創業した「信楽鍋要」の製品であることが判明する。

2には方形内に「（右から）信長 ー（カネ）上」の刻印が押されている。刻印の右側には「竜」の筆字が刻印側を上にして書かれている。

3には1と同じ刻印3点が同様な位置関係で押されている。「龍」の字の筆字も見られ、同様に刻印側を上にして書かれている。4は円形部左半分程が欠損しており、残存部分には刻印、筆文字は確認されなかった。A区1号レンガ遺構（煉瓦による排水溝）の下から出土している。

5～7の繰糸鍋は欠損部分が多いが、基本的には7と同様のものと見られる。にぶい橙色の胎土で形成され、口縁部及び直線部の壁は黒色釉、底面から円形部壁は灰白色釉が施されている。大きさは

欠損部分が多いので明確ではないが、残存部分が多い7をもとに見てみると、鍋全体の長軸36.7cm(現存)、短軸35.1cm(現存)、全体高は11cmを測る。1～4に比べるとひとまわり大きいものである。重ね焼き痕跡は見られない。

大きく異なる点は底面が直線部壁と並行するように3分割され、底面が直線部から円形部にかけて順に高くなる点である。直線部に近い面は目皿を設置する部分、中央の面は蝸溝と呼ばれるもので中程がやや低くなっている。円形部寄りの面には円形もしくは楕円形の浅い凹みが設けられ、蝸溝と細い溝でつながっている。また、円形部側の底面には幅1.5～2.5cm、高さ2cm程の脚がついており、円形部側が上げ底状になるように作られている。

7には直線部口縁上部に上幅1cm、深さ1.2cm程の細い溝が作られている。注水溝と呼ばれているもので、そこから注入口が設置され、鍋内に水が流れるようになっている。また、直線部の壁には縦方向の浅い溝が全面にわたって設けられている。排水部に接した口縁部上面に「○千」の刻印が、円形部外面には「○ヤ」の刻印が3個並んで押されている。口縁部の○千刻印から長野県上伊那郡高遠町(現伊那市)にあった合名会社九千組による生産であることが判明する。

6は残存状況が悪く、底面から円形部の1/2程が残存しているのみであったが口縁部の一部が幸いにも残っていた。黒色釉が施軸されている口縁部上端に径7mm程の穴があいている。円形部の外面に鉄泥による文字らしき筆痕跡が見られる。

5は底部しか残存していなく、残存範囲では刻印・筆文字などは確認できなかった。

煮蘭鍋 (図16-8、9)

蘭を固めているセリシンという物質を溶かし、蘭糸がほぐれて繰り出しやすくするために蘭を煮る作業を行う鍋で、繰糸鍋と同様に陶器で作られているが、半月形でなく丸鍋形である。

8は口縁部～底部の一部が欠損しているが、口径推定19.0cm、底径18.5cm、器高13.3cmを計測する。胎土はにぶい橙色で、内面～口縁部外側まで淡黄色の釉薬が施されている。胴部外面～底部は無釉。胴部外面に筒状の蒸気導入部と排水部がつく。蒸気導入部は口径1.8cmの穴があき、そこから蒸気を取り入れ、底面から約1.5cm上に設置された蒸気管に続く。蒸気管はDの字状に粘土を貼り付けて作られ、壁面に沿って1周し、そこに蒸気噴出小孔列が設けられる。排水部は、上穴は半円形で長径3.1cm、短径2.3cmを測る。上端外側に切込みがあり、余水はここから溢れ出る仕組みとなっている。排水小穴は蒸気噴出小孔列より上に径8mm程の穴が3カ所、下の底面に1.8×0.5cmの楕円形の穴が1カ所認められる。文字・刻印等は、胴部外面にヘラ書きで「龍」の文字が刻まれている。

9は底部のみの残存で、径18cmほどである。底面から1.5cm上に断面Dの字状に蒸気管がめぐり、蒸気噴出小孔列に続く。刻印・筆字などは、外面底部寄りに鉄泥による筆文字が認められるが、上位が欠損しているので判読できない。また、筆文字に重なるように「方形内に八(ヤマ)の下に弥製」の刻印が押される。

集緒器 (図17-10～13)

繰糸鍋でほぐされた蘭糸を目的とする生糸の太さになるよう数本ずつまとめて撚りをかける工程で、極小の孔を通すことで蘭糸をまとめ撚りをかける働きをする径2cm程の磁器製の円盤状の道具。A区から20個、B区から9個出土している。掲載した4点とも径2cm程、厚さ0.6cmで多少のゆがみはあるがほぼ円形の皿型に作られている。側面の中心に幅1mm程の溝が回る。この溝に二股に分かれた支えの金具(集緒器支持器)がはまって固定される。内面に「小」と青字で書かれたものが2点、外面に青で・(てん)が書かれたものが1点出土している。

糸鉤(フリカギ) (図17-14~23)

集緒器で撚りをかけて太くした生糸は糸巻き(小杵)に巻き取られるが、そこへまでの糸道の要所に取りつけられるもので、糸を傷つけないようにガラス製で作られている。破片も含めてA~C区で81点出土している。14・15・17~20は完形で細いガラス製の棒を二重に巻いて並列する環状にしたもので、二重に巻いた環状の内側に糸が通るようにしたものである。全長3.5~4.0cm、ガラス棒の径は0.4cmを測る。青色ガラスで作られており、繰糸機本体に固定されるタイプのもので、取り付けられる側の軸部先端はピン状に尖っている。16は上記のものと同様であるが透明ガラスで作られたものである。21はぶら下げられて遊動タイプのもので、透明ガラスの先端を巻いて環状にしたものでその内側に糸が通るように作られている。22・23は大型の糸鉤で、ホーロー引きの鉄棒の先端を巻いて環状にしたものである。軸部先端はホーロー加工されていなくネジが切られている。揚げ返し(小杵に巻き取られた糸が湿気で互にくっついてしまうことを防ぐため、小杵に巻き取った生糸を乾燥させながら大杵に巻きなおす作業)機用の糸鉤である。

目皿(図17-24~26)

噴出する蒸気による対流を抑えるために繰糸鍋の底に置いて使う道具で、小さな穴が多数あけられている皿状のものである。いずれも陶器製で厚さは1.4~1.7cm程、上面は白色釉が施されている。24は直線状の端部が見られ、小孔はそれに並行するようにあけられている。端部の断面形は上面が平らで下面は斜めに立ち上がり台形状を呈する。孔径は4mm程である。25と26は端部のラインから円形を呈する目皿とみられ、端部の断面形は24と同様である。小孔は円形のラインに並行するようにあけられている。孔径は24よりやや大きく6~7mm程である。

ガラス管(図17-27)

揚げ返し機に取りつけられるガラス管の破片とみられるもので、径1.5cmを測るもので両端は欠損している。他に同様の破片がA区から2点出土している。

〇陶磁器類(図18-28~42、図19-43~49、図20-50)

28~31は磁器井・飯碗である。28は口縁部外面に緑色の二重圏線がめぐり、底部外面には青色で「瀬596」と捺されている。これは、原産地を示す記号と生産者別標示記号が組み合わされたいわゆる統制番号で、戦時体制下での経済統制の一環として昭和15年(1940)~昭和21年(1946)頃に生産された陶磁器に付すことが求められたものである。統制番号の記された陶磁器は統制陶磁器と呼ばれ、その中でも緑の二重圏線が入っているものは国民食器などと呼ばれている。これは愛知県瀬戸地域で焼かれたものと判明する。29は外面に緑色で銅板転写技法により帆掛け舟の絵を表している。30は外面中位に「小口」のマークが対称的な位置に2カ所捺されている。これは40の皿にも見られるもので、小口組製糸所で使用されていたものと判断されている。底部外面には緑色で「TRADE 扇の文様 MARK」が捺されており、美濃窯業で製造されたものであることがわかる。31は青色と緑色で銅板転写技法による草花が表現されている。内面の見込部に青色で三つ輪違い文が筆書きされている。

32~37は磁器湯呑茶碗で、33・34・36は筒形、37は端反形を呈する。32の底面には青色で「□の中」に中藤醬油店の文字が捺されている。33の胴部には「福」「寿」の文字が、34の底部には統制番号「岐397」が、35の底部には「二重の口内に市」が書かれている。34の「岐397」は岐阜県土岐津陶磁器工業組合の(有)土岐津窯業で焼かれたものである。36は外面口縁部に緑の二重圏線、中央部に「賞」それを挟んで右から「選薦優良」「◇S」「昭榮製絲株式会社」の文字が捺されている。昭榮製絲株式会社は昭和4年(1929)、昭和5年(1930)の世界的な恐慌などにより経営破綻した岡谷の山十組

製絲場を整理の抵当権者安田銀行がバックアップして昭和6年(1931)に成立させた会社である。近くでは埼玉県本庄市に昭榮製絲株式会社本庄工場があった。36は昭和6年以降の品物と判断される。37の外縁口縁部にも緑の二重圏線がめぐり、底面に統制番号の一部「岐」が陰刻されている。

38は湯呑茶碗の蓋で、上面に蚊の絵と「結果自然成 京月」と書かれている。高崎城遺跡24出土遺物湯呑茶碗や徳利の中にも同じ語句が書かれたものがあり、達磨大師が弟子慧可に伝えた伝法偈の一句であるとされる。

39・40は磁器皿である。39は小皿で口縁部内面に緑色二重圏線がめぐり、高台部内面に「◇中に菊水」の文字が書かれている。文字の下が欠損しているため統制番号があったものとみられるが不明である。40は完形品で見込部中央に「小口」のマークが捺されている。底部外面には緑色で「TRADE MARK」が捺されており、30と同様に小口組製糸所で使用されたものと判断される。

41は磁器製の化粧品瓶で、底面にウテナ化粧品のマークが陰刻されている。42は磁器製であるが用途は判然としないもので、底面に緑色で統制番号「岐902」が捺されている。これは岐阜県下石陶磁器工業組合の(有)光洋製陶所が生産したものである。

43は陶器製汽車土瓶である。注口部に向かって左側(土瓶の表面)に「長野」、右側(土瓶の裏面)に「中島」とイッチン描きされている。口縁部内面には「キ」と呼ばれる蓋受けがついている。

44は汽車土瓶の湯呑である。外面体部中位から内面底部まで白色釉を掛けている。体部下半から底部までは無釉。汽車土瓶の湯呑であるが、44とセットになるか不明である。

45・46は磁器製品であるが用途は判然としない。両者とも全面に褐色釉を掛けたもので、いずれもB区の井戸内から出土している。46には表面に「○の中に延」「爆破防止」「3500V.100A」などと陽刻が見られる。褐色釉であることや陽刻の文字から判断すると高電圧がかかる機械類に付属していたものと推測される。

47～49は磁器製の碁子である。47・48はノブ碁子で梁などに取りつけて、電線を浮かしながら配線するために用いられるものである。49は引留碁子で電柱から各家庭への架空電線を引き留めるために使われる碁子である。碁子類はこの他、玉碁子、高圧引留め碁子、碁管、昭和40年(1965)高松電気製作所製造の高圧カットアウトの一部(写真125)など30点が出土している。

50は陶器製の染付小判形大便器である。全体的に白色釉を掛け、金隠し部分の内外面、縁部分に青色で草花を描く。B区井戸内からの出土である。

○瓦類(図20-51～53)

いずれも軒棧瓦で、51は小丸部分の径7.5cm、右回り三つ巴文である。珠文はない。全面に暗赤褐色釉を施す瓦である。52は51と同様に全面に暗赤褐色釉を施す瓦である。瓦当文様は、中心に半分の菊花文を据え、両脇に流水を表したとみられる文様が並ぶ。53は小丸部分の径7.8cmで、三つ巴は右回りで珠文は8個。瓦当表裏面に赤色物が付着する。

○煉瓦類

調査区内からは煉瓦を使用した建物の基礎部分、雨水枡、埋め立て廃棄されたものなど多数の赤煉瓦・耐火煉瓦が検出されている。それらの中からA区22点、B区2点、C区23点の計47点を回収し、15点の実測図を掲載した。煉瓦の一番大きな面を平面(ひらめん)、次に大きな面を長手面(ながてめん)、一番小さい面を小口面(こぐちめん)と呼ぶことにする。

赤煉瓦(図21-54～58)

色調は赤褐色を呈する。大きさは、長さは最小22.7cm、最大22.9cm、平均は22.8cmである。幅は最小11.2cm、最大11.4cm、平均は11.3cmを測る。厚さは最小5.9cm、最大6.0cm、平均は5.95cmで

ある。ほぼ同様な大きさである。いずれも平面に機械抜き成形で作られた痕跡である皺が確認される。また、赤煉瓦32点中21点に平面の片方に楕円形の枠内に右から「上敷免製」の刻印が押されている。刻印のないものが6点、5点は接着のモルタル等が付着しており不明である。57・58は特徴のある赤煉瓦である。57は平面から長手面に掛けて小口面から4cm離れた所に墨壺によるとみられる墨付け線が引かれており、長手面の直線部分には筆で丸が書かれている。また、58は平面から小口面にかけて長手面より4.4cm離れた場所に同様な直線が引かれており、小口面の直線部には筆で丸が書かれている。煉瓦を積む際の基準線であろうか。

耐火煉瓦 (図21-59・60、図22-61~68)

耐火煉瓦は15点回収した。色調は浅黄褐色～にぶい橙色を呈する。大きさは、長さは最小が22.8cm、最大が23.0cm、平均22.9cmである。幅は最小9.8cm、最大11.5cm、平均10.9cmである。厚さは最小5.9cm、最大7.4cm、平均6.3cmを測る。長さのちがいはほんのわずかだが、幅のちがいは1.7cmと大きい。これは最小値の9.8cmを示すのが59で、他の耐火煉瓦と比べて特別な形状をしていることと関連するものと思われる。60は平面に刻印のない平面から長手面に掛けての角の部分が断面弧状に削られ、加工されている。また、平面の端部に径1cm程の穴があき、裏側まで貫通し、そこにコイル状の針金が残っている。SK32という耐火度も刻印されており、他の耐火煉瓦使用場所と異なっていたことが推察される。さらに長手面から刻印のある平面にかけて黒い直線が見られる。小口面から8.6cm程内側に入った所に認められ、赤煉瓦の57や58に見られたような物と同様な線と考えられる。製造所を表す刻印と同じものは東町遺跡7、高崎城遺跡24でも出土している。

64は片側の横手面に成形後の幅11.0cm、深さ2.2cm程の切込みが見られ、これに重なるように刻印上端付近に小口面から11.7cm、深さ0.6cmの削り込みも見られる。また、刻印のない平面には小口面から1.5cm程に小口面に平行するように黒い直線が、この直線に直交するように小口面に黒い直線が確認される。60に確認されたものと同様のものとみられる。

耐火煉瓦の刻印は「KIB」4点、「MRFK」4点、「K ○の中にマークB」「SK32」・「Y.T.R」・「HND」・「TAIKA○イ」・「◇NT」「NTAIKA」・「O.Y」・不明各1点である。67の「◇NT」「NTAIKA」は両端が欠損しているが、類例から「NIHONTAIIKAKOGYO(日本耐火工業)」とみられ、茨城県の日本耐火工業株式会社(創業大正6年1917年)の製品と考えられる。68の「O.Y」は右端が欠損しているので明らかではないが、「O.Y.T(大阪窯業耐火煉瓦株式会社)」の製品の可能性がある。66は平面中央に小さな刻印があるが判読できない。平面に径7～8mmの円の中に横線が入る刻印が各辺に並行して4カ所で確認でき、裏側の平面でも同様の位置に同じ刻印が認められる。様相からして製造所の刻印ではなく、製造工程の中でついたものと考えられる。

○耐火製品 (図23-69~79)

69は丸熱板とみられるものの破片で、径13.2cm(推定)程の円板の溝に発熱線を通して加熱することによって発熱部として使用したものと推定される。

70・71は何に使われたか不明である。形状がそれぞれやや異なるが、長さ約22cm、幅約11cm、厚さ約6cmの直方体ブロックを加工して面を作っていることは共通している。また、胎土が七輪と同様な珪藻土を使用しているとみられることも共通している。さらに、直方体のブロックの大きさは赤煉瓦や耐火煉瓦の寸法とも共通していることが注意される。重さは耐火煉瓦の半分以下である。70は耐火煉瓦(図22-63)の片方の長手面から平面にかけて斜めにカットするという形状と同様である。珪藻土を使った製品に耐火性があることもふまえ推察すると、これらは耐火煉瓦と同様な場所で重量が

軽い方がよい場所に使われていた可能性が考えられる。72も珪藻土を使った直方体ブロックを輪切りにし、面加工をしている。73は平面を上にして両サイドと斜面部分を切り、加工している。70・71と同様な所で使用されたものであろうか。

74～76は型造り成形されているもので、特殊な形状をしている。76は直方体の上に台形状のものがついたような形を呈する。台形部分を櫛歯状にしているが、成形してからカットしているとみられ、その痕跡が残る。77は複雑な形ではなく、方形を呈している。これらはいずれも角の磨減が見られず、エッジがしっかりとしていたり、被熱痕が認められたりするなど共通する点が認められる。また、それぞれが複数個体出土しており、A・B区合わせて74は9点、75は10点、76は12点、77は36点出土している。

78は径約5cmの円筒形で中央に3×1.2cmの方形の穴が通るもので、一方の端部が欠損しており、現状では21.2cmを測る。全体的に2次被熱痕が見られる。同様なものが破片ではあるが他に6点出土しているが、このうち5点は79と同様の角柱の中に入った状態で出土している。本来は円筒形単独ではなく角柱の中に入った状態で使用されていた可能性が大きいと推察される。また、径4.5cmの円筒形で内径3cmの穴が中央にあくものが破片であるが2点出土している。この2点は穴が円形であることと鉄製の管が内壁に沿うようにあり、78とは異なる用途に使われていたものと考えられる。

79は1辺が約8cm、長さ29.7cmの角柱形で中央に径5.3cmの穴が通る形状を呈する。全体的に2次被熱で赤化しているが、片側の小口面の赤化は顕著である。同様の形状のものが他に7点出土しており、そのうちの5点には78と同様の円筒形のものが中に入っている。

○ガラス瓶類（図24-80～102、図25-103～108）

ガラス瓶類はA区で22点、B区で23点、C区で9点の計55点を回収し、代表的なものの実測図を掲載した。薬品瓶、医療用薬瓶、化粧クリーム瓶、飲料品瓶、食品瓶、日用品瓶などの用途があげられる。このうち出土位置が確認できるのは105のビール瓶だけである。

80・81は薬品瓶でいずれも小さな気泡が多くみられる。80の底面には「☆」が、81の底面には「○B」と不明なエンボスが見られる。82・83は医療用薬瓶とみられる。82は肩部に「○正100cc」、胴部に目盛線がエンボスされている。底部にはギザギザ加工のナールリングが施される。○正マークは昭和31年（1956）に容量の正確さを保証するためにつけられるようになったものである。83は横長八角形を呈する瓶で、底面に「楕円形の中にイマツ」のエンボスが施されている。84・85は試薬瓶と推定され、84は蓋、85は本体である。84の肩から下の体部外面には擦り加工が見られ、85の口縁部内面にも擦り加工が施される。同一個体であるかは不明だが、同様なセット関係であったと考えられる。86・87も医療用薬瓶とみられる。87の胴部には目盛線がエンボスされ、胴部正面にはラベルを貼る区画が区切られている。88は目薬瓶でスポイト型、先端はスクリュー栓でゴム製のキャップが残る。横面にそれぞれ「DAIGAKU」「EYE LOTION」のエンボスがある。

89～95は化粧品瓶である。95は化粧水瓶とみられるもので、胴形は円形でいかり肩を呈する。無色透明のガラス瓶である。他は化粧クリーム瓶で白色を呈する。90は胴部下端に「IDEAL」、91は胴部中央に不明なエンボスが、92は底部に「T-12」のエンボスが確認される。93は底面に「マリオ」、94は肩の張った円筒形で底面に「COZ」のエンボスある。

96は靴クリーム瓶とみられ、体部外面の対照的な位置に「コロムス」「☆」が2カ所確認される。

100は醤油瓶で、底面に「登録○97628号」「Kikko man」「ON」「Y」のエンボスが見られる。キッコマンの醤油瓶とみられる。

101・102は牛乳瓶である。101は無色透明の瓶で胴部下位に「○正180cc」、底面に「石」「6D」のエンボスが見られる。「石」のエンボスから石塚硝子、「○正180cc」とあることから昭和31年以降に石塚

硝子で製造された瓶であることが判明する。102は青緑色の瓶で胴部肩寄りに「楕円の中に右から全乳」、胴部下位に「180cc」のエンボスが認められる。○正マークがない180ccであること、右から「全乳」のエンボスであること、無色透明でなく青緑色の瓶であることなどから昭和31年以前で、戦前の可能性が考えられる。牛乳瓶はこの他6本回収されている。いずれもA区からで○正マークがついているものである。底部のエンボスから石塚硝子の他に日本硝子のものも見られる。牛乳製造会社のロゴマークなどが瓶にプリントされているものは1点のみで、「森永200 ホモチャンマーク morinaga」「要冷蔵」である。昭和40～50年代のものと判断される。

103はサイダー瓶とみられ、肩部の対象位置に「BNK」、胴部下位に右から「日本麦酒醸造株式会社製造」、底面に「2 NBK 3」のエンボスがある。日本麦酒醸造は大正10年(1921)に設立され、ユニオンビールや三ツ矢サイダーなどを製造販売していた。昭和8年(1933)に大日本麦酒と合併したためわずかに10数年の歴史の会社である。肩部に見られる「BNK」のエンボスは大日本麦酒の瓶にも見られるもので、日本麦酒醸造と大日本麦酒の両者のエンボスがあることから昭和8年前後のものであろうか。

104はいかり肩のビール瓶で、肩部に右から「登録商標」、胴部下位に「SAKURA BEER」、右から「サクラビール」、底面に「KYO 29」のエンボスが確認される。エンボスから帝国麦酒株式会社の「サクラビール」の瓶とみられる。帝国麦酒株式会社は明治45年(1912)に福岡県大里町(現北九州市門司区)に設立された会社で、大正2年(1913)に「サクラビール」が発売されている。昭和4年(1929)には桜麦酒株式会社に商号を変更している。大正2年に発売以降、エンボスのアルファベット表記が筆記体であったとされており、昭和3年(1928)の帝国麦酒のチラシにも同様に筆記体で表現されている。104のエンボスは筆記体でないことから昭和3年の商号変更以降の製品の可能性を持つものである。汐留遺跡Ⅱでも同様のビール瓶が出土していることが報告されている。105もいかり肩のビール瓶で、肩部に「TRADE ○の中に不明マーク MARK」、胴部下位に「ANGLO JAPANESE BREWERY」「COMPANY, LTD., TOKYO」、底部に「3」のエンボスが見られる。このビール瓶はC区の2号コンクリート構からの出土である。106～108は用途不明の小さな瓶である。

○木製品 (図25-109～111)

109・110は木桶の側板とみられるもので、長さ29cm、幅7cm、厚さ1.3cm程の板で多少の磨滅はあるが遺存状況は良好である。両者とも上端から4.2～4.3cm下に径2.4×2.7cm程の円形の穴があく。また、内面の下端から1.0cm程上に幅1.0cm程の浅い溝が認められる。ここに底板がはめられていたものと判断される。外面には胴部下位と中位に縦(たが)の痕跡とみられる筋も残存している。111は連歯下駄で、幅8.1cm、長さ22.0cmの小判形を呈する。磨滅が多く台部分の木目が浮き出ている状況である。鼻緒を通す穴「眼」の内、前のものは径0.5cm、後ろのものは2つとも径1.0cmを測る。台の中ほどに赤色の塗りの痕跡が確認される。

○その他 (写真112～142)

112は24.3×17.0cm、厚さ1.5cmの長方形の板で、B区井戸内からの出土である。両短辺の小口面に釘穴状の小穴が4個ずつ、両長辺の小口面には6個ずつ確認される。表面には「□□江梨」「□江」の型抜きによる文字が見られる。113は52.1×20.5cm、厚さ0.8cmの長方形の板である。B区井戸内から出土している。短辺の上面には5～6個の釘穴状の小穴が見られ、錆痕も確認される。表面には筆文字があり、「高崎□□町八〇」「山田□□KK御中」「□□□□スマート□」と書かれている。木箱の蓋に住所・宛先が書かれたものと判断されるが、3行目の文字は判読できないものが多いので判然としない。ただ、本遺跡の所在地は高崎市東町80-1であり、昭和17年(1942)に設立された山田航空工業株式会社が戦後山田興業株式会社と改称し、台所用品・建築用資材などの製造・販売を行っていた。

たことがわかっており、山田興業に関わるものであると判断される。山田興業の後身はホッチキス生産のマックス工業である。マックス株式会社のホームページによると商品の販売体制確立を目的としてスマート製販株式会社を昭和24年(1949)に設立している経緯があるので、そのことを考慮するとスマート製販株式会社から山田興業株式会社へ送られた木箱入りの荷物の蓋であった可能性が出てくる。スマート製販株式会社は昭和29年(1954)にマックス製販株式会社と商号を変更している。山田興業株式会社も昭和30年(1955)にマックス工業株式会社に商号を変更しているため、昭和24年から昭和29年の間のものということができる。裏面中央には「神田」「㊦」「入」の型抜きによる文字が見られる。別なものに利用されていた板の裏側を再利用したものと思われる。

114もB区井戸内からの出土で、告別式のお知らせ記事が掲載された新聞の切れ端である。記事によれば昭和27年(1952)2月の新聞とみられる。

115はA区、116はC区出土の樹脂製歯ブラシである。115は長さ13.4cm、幅1cm、厚さ0.5cm、オレンジ色で植毛は16・17・16の合計49本である。「エガ□□・・・」の刻印が見られる。柄尻部に掛け具が認められる。116は長さ14.2cm、幅1cm、厚さ0.4cm、茶色を呈し、植毛は9・10・9の28本である。「千代田歯ブラシ公一五号品124工20」の刻印がある。

117はA区出土のブラシである。長さ19.7cm、ブラシ部幅5cm、柄部幅2.8cm、厚さ1.2cmを測り、柄尻部に径0.6cmの穴があく。

118はC区1号側溝内出土の鉛筆である。2つに割れていたり、端部が欠損していたりするが長さ16.2cmを測る。外面は黄色で塗られ、断面六角形で芯も存在する。外面には「MASAKI YAMATO*Patented 三菱のマーク“MITSUBISHI”9820 No.2」「©PHOTO RETOUCHING DRAWING PAT. No.111938 No.2」の文字が打たれている。

119はA区出土の挿櫛の破片である。長さ5.5cm(現状)、胴から歯先までの幅4.1cmを測る。プラスチック製とみられ、胴部分に花?の印刻が見られる。

120～124はプレートで全てA区からの出土である。120は長さ16.4cm、幅6.4cm、厚さ0.3cm、緑色に塗られたプラスチックプレートで、「電熱器」と白の筆文字で書かれている。上端部に0.3cmの穴があく。121は長さ10cm、幅3cm、厚さ0.2cmの白いプラスチックプレートで、「取締役部品部長?桜井栄三郎」と黒色で書かれ、上端部に径0.4cmの穴があく。122は長さ6.4cm(下半欠損)、幅3cm、厚さ0.2cmの白いプラスチックプレートで、「監査役 清水寅口」と黒色で書かれている。上端部に径0.3cmの穴があく。123、124はいずれも長さ10cm、幅3cm、厚さ0.2cmの白いプラスチックプレートで上端部に径0.3cmの穴があく。123は片面に「吉田政一」と黒色で名前が書かれ、裏面には赤色で「吉田政一」と書かれている。124も同様で各面に「関口将伸」と黒色と赤色で書かれている。

125は磁器製の高松式の高圧カットアウトで長さ28.5cm、幅7.8～8.5cmを測る。表面には「高松電気製作所のマーク PC-7 高松式 高圧カットアウト TAKAMATSU PRIMARY. CUTOUT. 6900V. 100A. PAT. No.508595 No.481776 1965」の文字が緑色で捺されている。高圧機器を回路から切り離すスイッチで、中にヒューズを入れ、ヒューズの定格電流に達することでヒューズが切れ、過負荷、短絡事故を防ぐ働きをしていたものとみられる。昭和40年(1965)に製造されたもので、把手の部分は高圧用の製品なので茶褐色に塗られている。昭和時代にこの遺跡地内に高圧機器が存在していたことが判明する。

126～137は繰糸鍋等につけられていた刻印や筆書きなどの文字資料である。126には「竜」の筆字と「(右から)信長 一 (カネ) 上」の刻印、127は「(右から)信楽八(ヤマ)口」の刻印、128は「龍」の筆字と「ナベヨ製」の刻印、129は「○千組製」「ス ス」の刻印、130は図15-7と同様な場所に「○千」の刻印の一部が捺されている。131には「特許林式」の浮き文字が、132は「信州口」の刻印が、133は筆文字で「特許二九〇六〇 四五一一口」が認められる。134は「龍」の筆字、135は「龍」の筆字

が、136は「○や ○や ○や」の刻印が、137は「特許KO式」の筆字が書かれている。

138は多孔鉄管で長さ23.5cm、径4.2cmのものが3本、長さ10cm(現状)、径4.2cmのものが1本、長さ9cm(現状)、径4.2cmのものが1本である。5本とも全面にわたって径2mm程の小孔があけられている。長さ23.5cmのもの内2本は、一方の小口面が閉じられており、そこにも小孔が見られる。残りの1本はそこが割れており不明であるが、同様であったと思われる。完形とみられるものでは1列に29ないし30個の小穴が19列にわたってあけられている。また開いている方の小口側から4cmのあいだは全く小穴が穿たれていない部分が1周する。長さ5cmほどの錠状の金属が小穴に通っているものもある。139は長さ13.5cmボルトと6角形のナットで錆ぶくれて詳細は不明である。

140は長さ24cm、幅15.2cm、厚さ3～4.5cmの方形の陶板である。表面はにぶい黄色の釉薬が施されている。裏面は中央に長さ24cm、幅10cmの無軸部分があり、そこに7.5×9cmの窪みが2カ所並ぶ。表面の端部分の22.5×4.5cmが0.5～1cm程一段高くなっている。両小口面には長さ13cm、幅0.9cmの浅い溝が彫られ、径0.5cmの穴がそれぞれ2カ所あいており、裏面の窪みまで貫通している。

141は口径11.8cm、深さ3.8cmの素焼の器で、B区井戸から出土している。体部器壁は0.9cmの厚さでやや厚みがあるが、底部は0.5～0.7cm程になる。やや浅いが形態的には焼き物のサヤ鉢の可能性がある。若干の被熱痕も見られる。

142は推定径12cm、厚さ1.5cmの円形物の破片である。上下両面とも平坦に作られており、径1.8cmの穴が上面から下面まで貫通する。完存する穴は1個だが他に半分ほどの穴が4個見られる。七輪のサナのような形態だが不明である。

近代における高崎市東町80番地周辺の土地利用および関連する事項について

明治43年(1910)11月 高崎市上水道が完成

大正元年(1912)12月 高崎市製糸工場奨励規定が制定される。

大正3年(1914)3月 高崎駅東側(八島町)に高崎板紙株式会社(工場主名 井上保三郎)創立

大正5年(1916) 赤坂村(現在の東町)株式会社龍栄社製糸所(工場主名 井上保三郎)創業

大正12年(1923)4月 東三条通の開通式挙行

大正12年(1923)9月 関東大震災発生 小口組赤羽工場(東京府)が被害を受ける。

大正13年(1924)1月 小口組が龍栄社製糸所を買収し、小口組高崎製糸所として事業を開始 同時に380釜を540釜に拡張して工女620人を雇用

昭和8年(1933)5月 小口組、土地所有者から土地返還と工場・寄宿舎の取払い請求訴訟を起こされる 秋の糸価暴落により経営破綻に追い込まれる

昭和16年(1941) 山田航空機製作所(社長 桐生市在任の山田勝太郎)が旧小口組高崎製糸所の土地建物を買収し、航空機板金部品加工および組立作業を開始

昭和17年(1942)11月 山田航空工業株式会社の設立総会開催 中島航空機株式会社の下請け部品製造工場として航空機のウイング部品(昇降舵、方向舵)メーカーとして設立

昭和19年(1944)11月 山田航空工業株式会社が軍需省監督工場に指定(皇国第四六九五工場)

昭和20年(1945)9月 山田航空工業株式会社は山田興業株式会社と改称 事務機の生産を開始

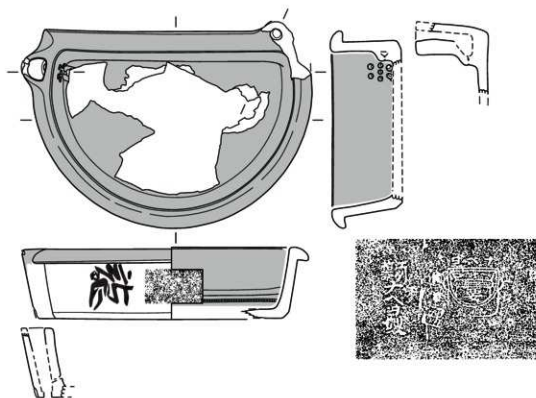
昭和21年(1946)10月 群馬トヨタ自動車株式会社設立 同年11月 高崎駅東口に営業開始

昭和24年(1949) 山田興業は販売体制確立のため、販売会社としてスマート製販株式会社を設立

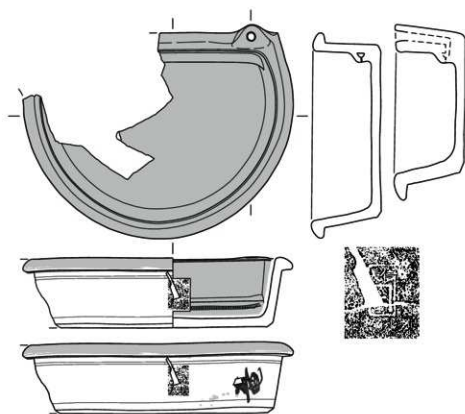
昭和29年(1954) スマート製販株式会社はマックス製販株式会社と改称

昭和30年(1955) 山田興業株式会社はマックス工業株式会社(現 マックス株式会社)と改称

昭和55年(1980) 東町80番地に高崎市労使会館竣工



1



2

茶範圍
輪範圍

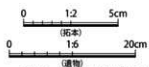
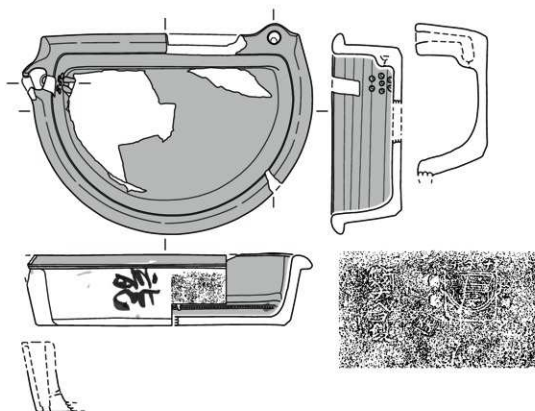
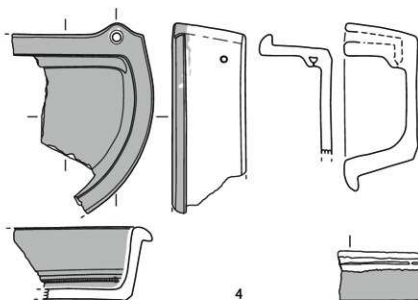


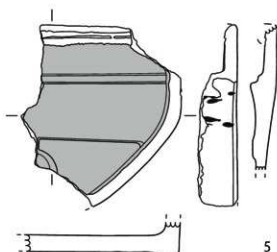
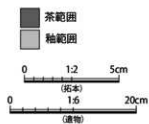
圖13 出土遺物實測圖1



3

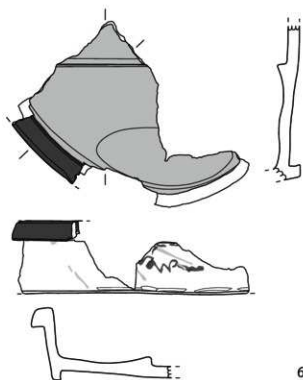


4

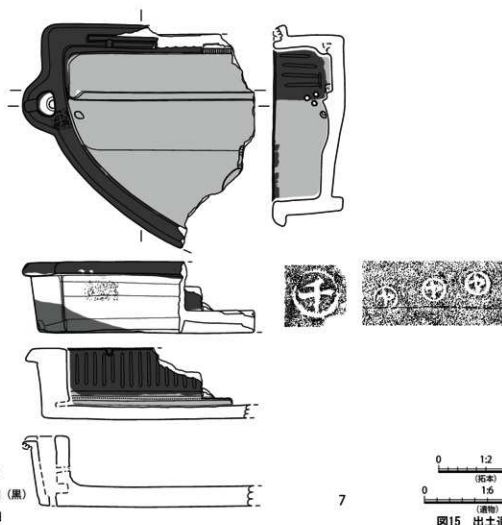


5

図14 出土遺物実測図2



6



7

圖15 出土遺物実測図3

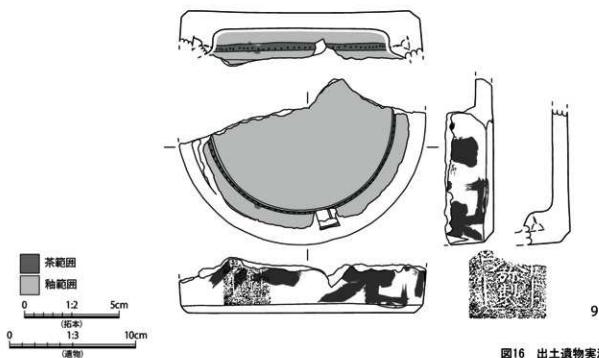
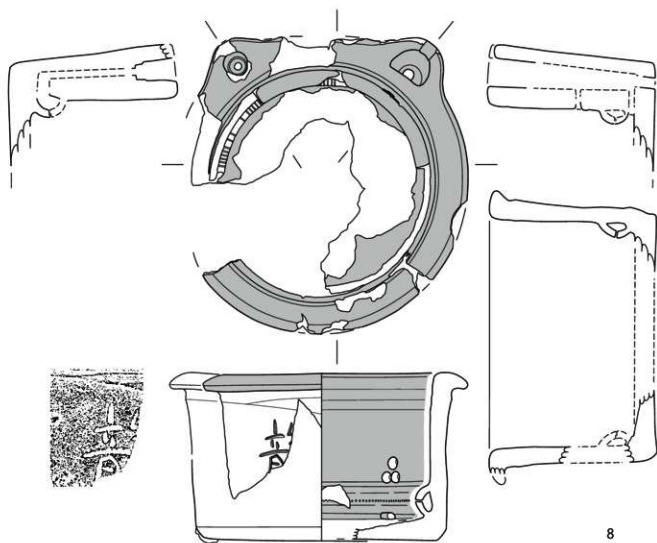


圖16 出土遺物実測図4

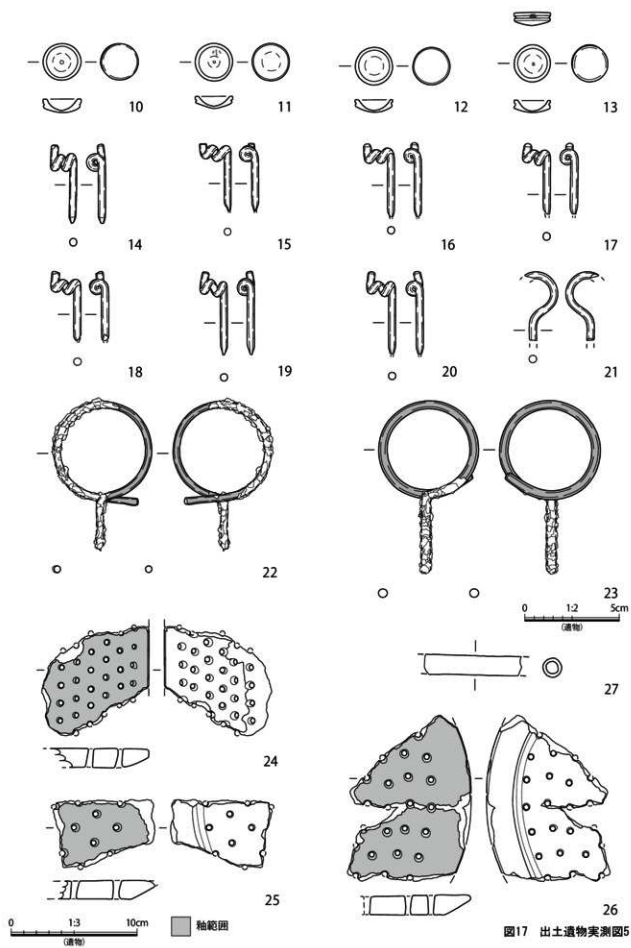


圖17 出土遺物實測圖5

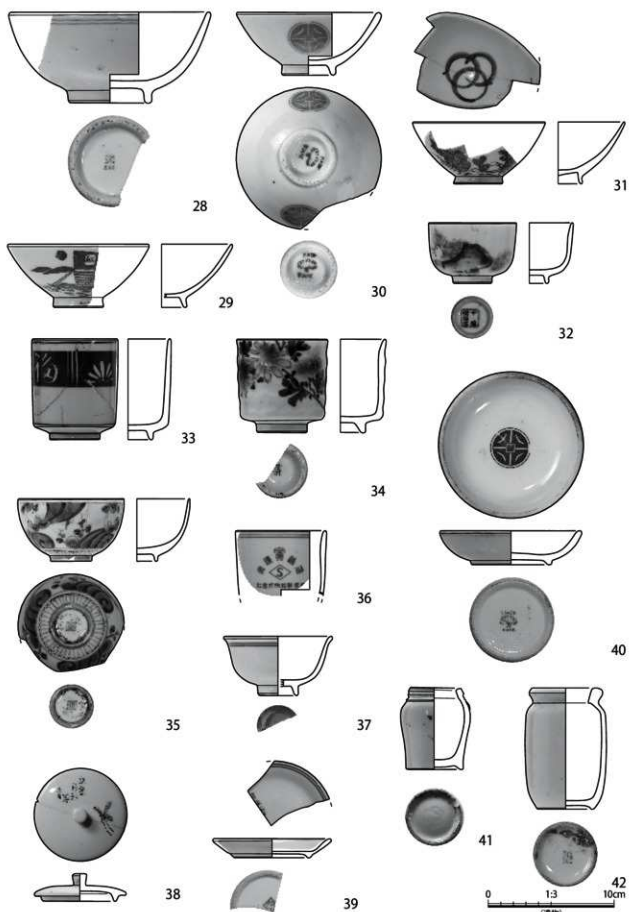
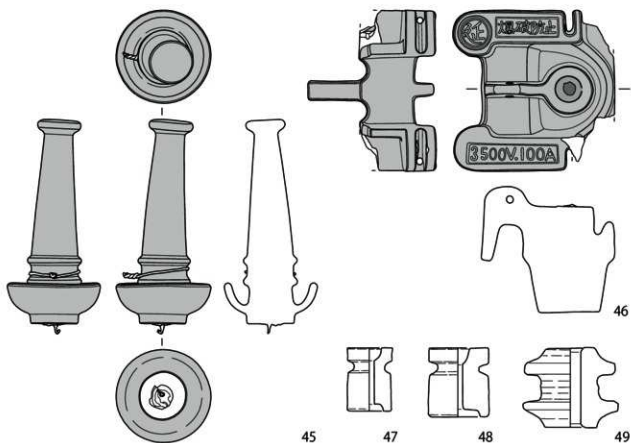
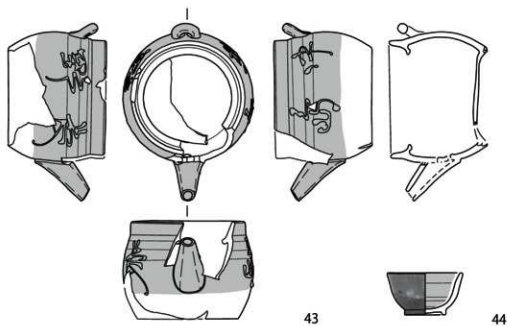
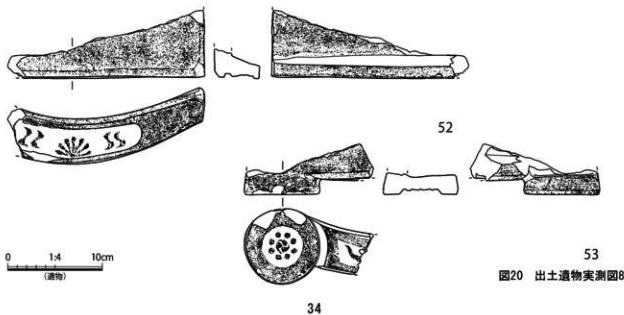
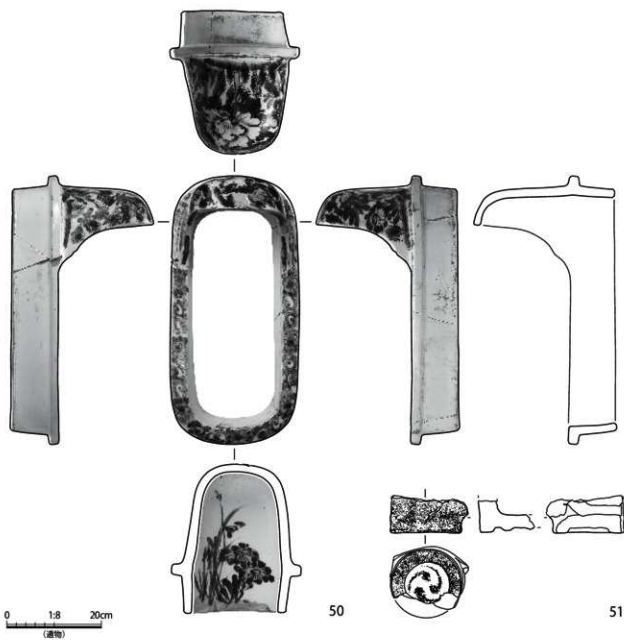


圖18 出土遺物実測図6

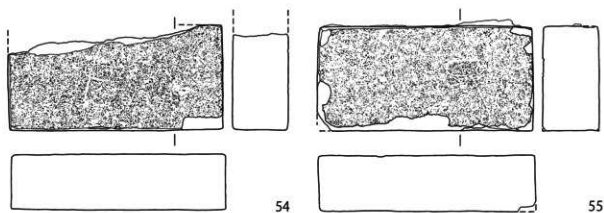


0 1:3 10cm
(遺物)

図19 出土遺物実測図7

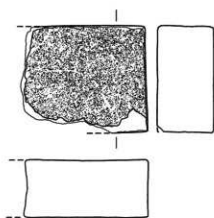


53
圖20 出土遺物實測圖8



54

55



56



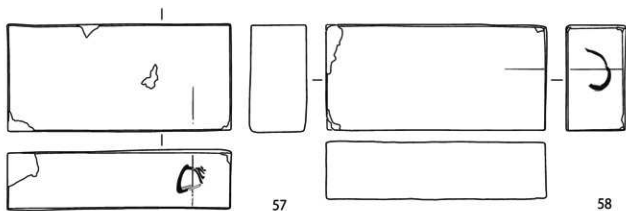
54の刻印



55の刻印

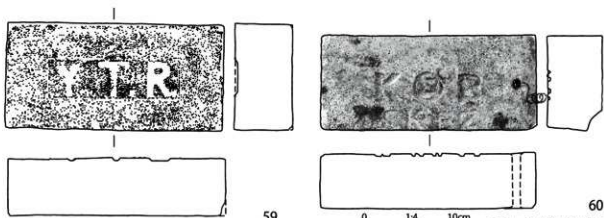


56の刻印



57

58



59

60

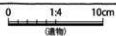
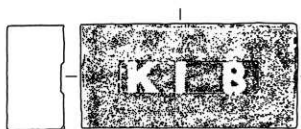
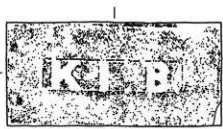


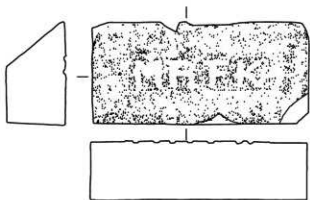
図21 出土遺物実測図9



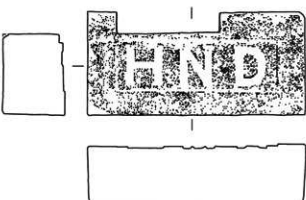
61



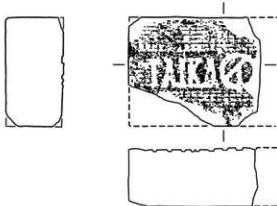
62



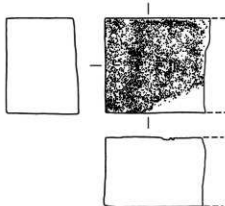
63



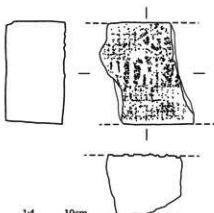
64



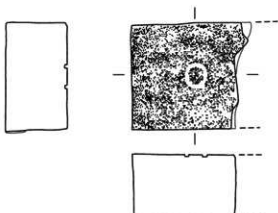
65



66



67



68



図22 出土遺物実測図10

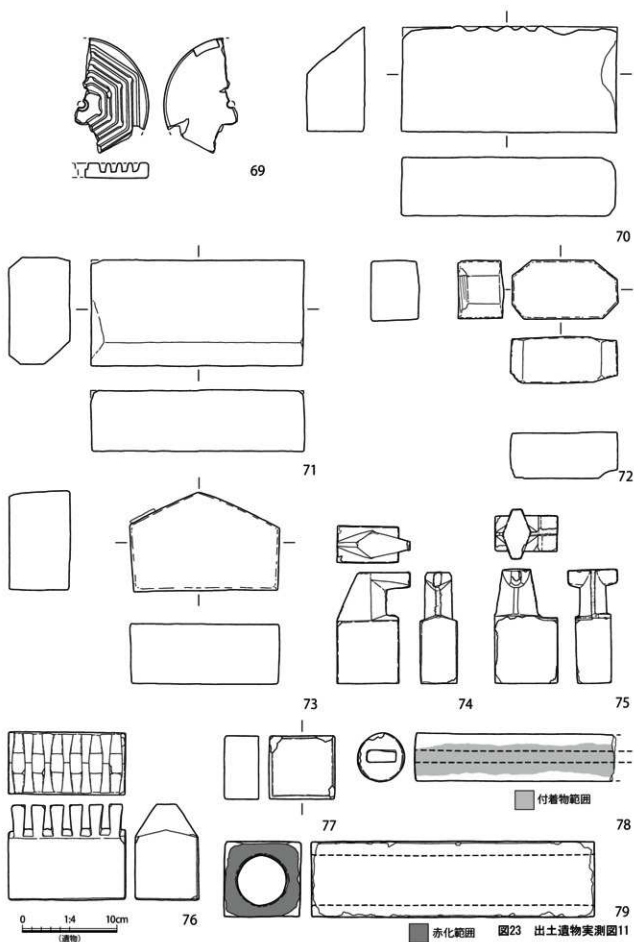


図23 出土遺物実測図11

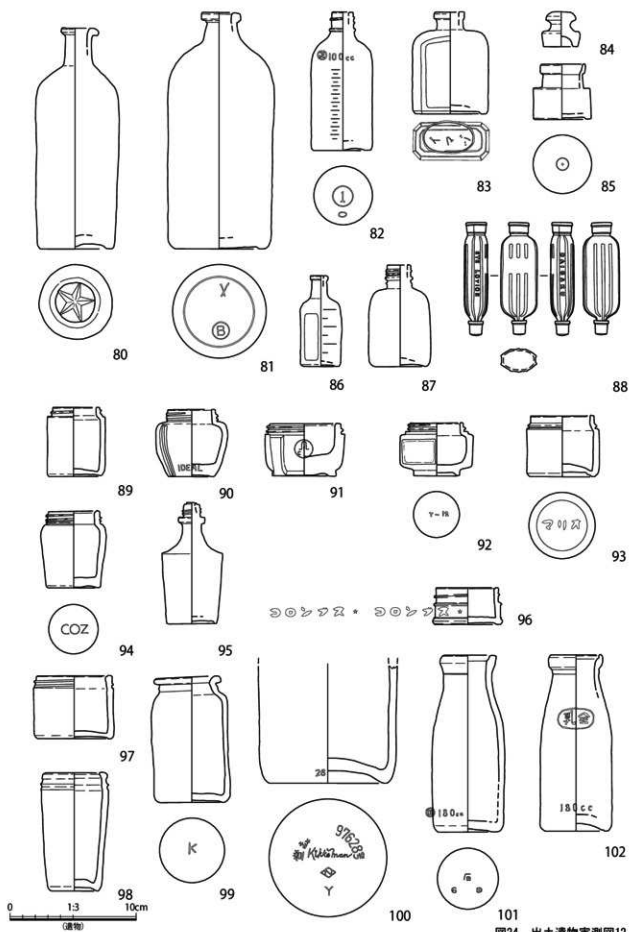


図24 出土遺物実測図12

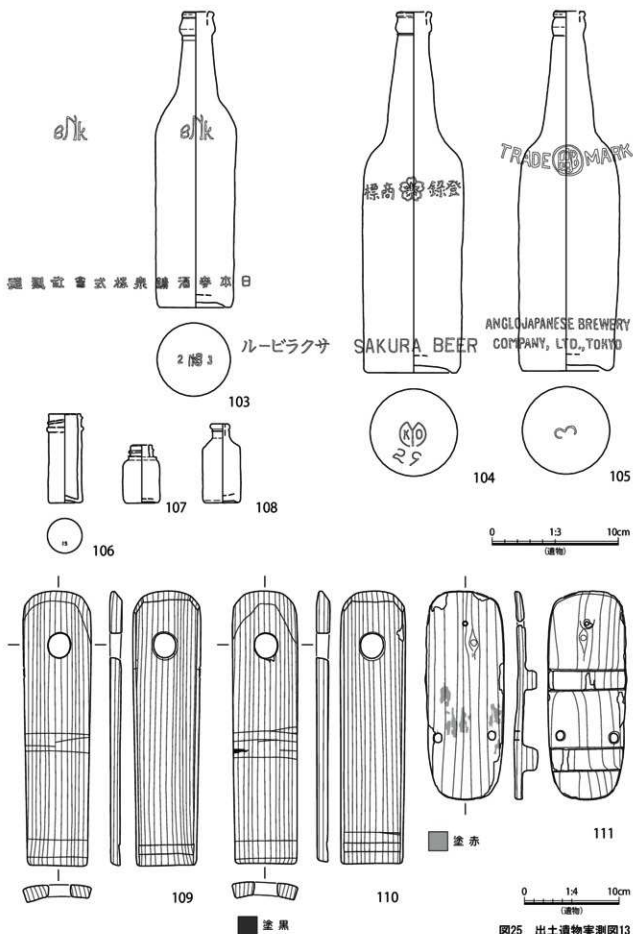
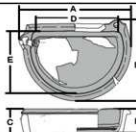


図25 出土遺物実測図13

出土遺物観察表1

製糸器基盤(鉢)

押図	No.	調査区	整理No.	種別	種類	特徴・備考
13	1	A区	鉢①	陶器	緑糸織	保存状況: 蒸気導入部分及び排水部、底部一部欠損。内側底面は平らに形成されているが重ね焼き痕跡が認められる。色調: 粘土 淡黄褐色。内側～口縁部外側無釉部 灰白色。流量: A: (45.8cm) B: (31.4cm) C: (11.1cm) D: (34.5cm) E: (25.0cm) F: (10.1cm) G: (33.2cm) H: (21.0cm) 蒸気導入部: 径(1.9cm) 直線部に沿って底面から1.5cm程度上に蒸気管が通り、蒸気噴出小孔列につながる。蒸気噴出小孔列の部分は幅5mm程度で直線部に無釉となっている。蒸気管は鉢の内面両端まで続いており、そこで径1cm程度の大きさで円形である。排水部: 上穴は半円形で長径3.4cm、短径(径3.4cm) 上面に切込みがある。下穴径1.5cm、排水小穴径は7mm程度。文字・刷印等: 円形部外面に刻印「半月輪の図案内側に「龍」の文字、図案上に右から「ナベヨ」、右に「登録」、左に「商標」の文字」 左下に刻印「方形内に「東光」」 左側に「江州信楽ナベヨ製」。円形部の刻印の左側に鉄泥で「龍」の筆字。AKFL2+10+16+33+89の接合
13	2	A区	鉢②	陶器	緑糸織	保存状況: 直線部左半～排水部及び底部の一部欠損。内側底面は平らに形成されているが重ね焼き痕跡が認められる。色調: 粘土 淡黄褐色。内側～口縁部外側無釉部 やや赤みのある灰白色。流量: A: (45.8cm) B: (31.4cm) C: (11.1cm) D: (34.5cm) E: (25.0cm) F: (10.1cm) G: (33.2cm) H: (21.0cm) 蒸気導入部: 径(1.9cm) 直線部に沿って底面から1.5cm程度上に蒸気管が通り、蒸気噴出小孔列につながる。蒸気噴出小孔列の部分は幅5mm程度で直線部に無釉となっている。蒸気管は断面半円形で長径1.1cm、短径0.7cmを測る。蒸気管は直線部左半部分が欠損して不明だが、右端は鉢の外周までつながらない。文字・刷印等: 円形部外面に刻印「方形内に「東光」」 左側に「江州信楽ナベヨ製」。円形部の刻印の左側に鉄泥で「龍」の筆字。AKFL5+13+17+19+26+31の接合
14	3	A区	鉢③	陶器	緑糸織	保存状況: 直線部上端及び底部の一部欠損。内側底面は平らに形成されているが重ね焼き痕跡が認められる。色調: 粘土 淡黄褐色。内側～口縁部外側無釉部 灰白色。流量: A: (45.7cm) B: (31.8cm) C: (11.2cm) D: (34.2cm) E: (25.5cm) F: (9.2cm) G: (31.0cm) H: (20.5cm) 蒸気導入部: 径(2.0cm) 直線部に沿って底面から1.5cm程度上に蒸気管が通り、蒸気噴出小孔列につながる。蒸気噴出小孔列の部分は幅5mm程度で直線部に無釉となっている。蒸気管は鉢の外周両端まで続いており、そこで径9mm程度の大きさで円形である。排水部: 上穴は半円形で上端外側に切込みがある。長径3.4cm、短径2.8cm、下穴径1.4cm、排水小穴径は7mm程度。文字・刷印等: 円形部外面に刻印「半月輪の図案内側に「龍」の文字、図案上に右から「ナベヨ」、右に「登録」、左に「商標」の文字」 左下に刻印「方形内に「東光」」 左側に「江州信楽ナベヨ製」。円形部の刻印の左側に鉄泥で「龍」の筆字。AKFL3+14+21の接合
14	4	A区	鉢④	陶器	緑糸織	保存状況: 直線部から円形部にかけて右側2/3程度残存。内側底面は平らに形成されている。色調: 粘土 淡黄褐色。内側～口縁部外側無釉部 灰白色。流量: A: (45.7cm) B: (31.7cm) C: (11.7cm) D: (34.7cm) E: (25.7cm) F: (9.7cm) G: (31.7cm) H: (20.7cm) 蒸気導入部: 径(1.9cm) 直線部に沿って底面から1.5cm程度上に蒸気管が通り、蒸気噴出小孔列につながる。蒸気噴出小孔列の部分は幅5mm程度で直線部に無釉となっている。蒸気管は直線部左半部分が欠損して不明だが、右は鉢の外周まで続いており、そこで径1cm程度の大きさである。蒸気噴出小孔列の部分は、幅5mm程度で直線部に無釉となっている。AKFL35。AK1号レンガ遺構下出土
14	5	A区	鉢⑤	陶器	緑糸織	保存状況: 底面1/2程度残存。色調: 粘土 ぶいり褐色。形状: 底面～円形部は灰白色釉。内側底面は直線的に3分割され、直線部から円形部にかけて順に高くなる。直線部に近い面には目皿を受ける段が形成される。中央の面は横溝と目皿を受けるもので中がやや低くなる。円形部の面には円形もしくは横溝の図案が形成され、横溝と細い溝でつながる。円形部底の底面には、幅2.5cm、高さ2cmの脚が付き、上げ底を呈する。AKFL39
15	6	A区	鉢⑦	陶器	緑糸織	保存状況: 底面～円形部1/2程度の残存。色調: 粘土 ぶいり褐色。口縁部は黒色釉。底面～直線部は灰白色釉。形状: 円形部の口縁に径7mm程度の欠け。鉢⑤と同様に内側底面が3分割される。高さも同様に順に高くなる。円形部寄りの底面には、横溝の図案がある。円形部底の底面に幅1.5cm、高さ2cmの脚が付き、上げ底となる。文字・刷印等: 円形部外面に鉄泥による文字らしき筆跡が見られる。AKFL46+BSFL4の接合
15	7	B区	鉢⑤	陶器	緑糸織	保存状況: 直線部～円形部にかけて1/2程度欠損。色調: 粘土 ぶいり褐色。口縁部及び直線部の壁は黒色釉。底面～円形部壁は灰白色釉。底面外部～直線部外面にかけて鉄釉を施す。流量: A: (36.7cm) B: (35.1cm) C: (11.2cm) D: (26.5cm) E: (28.5cm) F: (7.6cm) 形状: 直線部口縁上に注水溝。注水溝に続く注入口がある。直線部の壁には縦方向の溝が全面につけられている。底面は直線部に並行するように3分割され、最も高い部分には円形もしくは横溝の図案があり、横溝と細い溝でつながる。円形部底の底面に幅2cm、高さ2cmの脚が付き、上げ底としている。蒸気導入部: 直線部に沿って底面から1cm程度上に蒸気管が通り、蒸気噴出小孔列につながる。蒸気管は断面半円形で長径1.1cm、短径0.6cmを測る。蒸気管は直線部を含む右半部分が欠損して不明だが、左は鉢の外周まで続いており、そこで径9mm程度の大きさで円形を呈する。排水部: 上穴半円形。長径4.0cm、短径2.8cm、下穴径1.3cm、排水部上端に切込みがあり、排水小穴は15mm程度。径8mmの穴が3箇所、横溝からの径8mmの穴が1箇所、目皿設置溝に0.8×2.2cmの穴が1箇所あり。文字・刷印等: 排水部に接した口縁部上面に「○の中にナ」の刻印。円形部外面に「○の中にナ」の刻印が3個並ぶ。BSFL8
16	8	A区	鉢①	陶器	煮黒釉	保存状況: 口縁部～底部の一部欠損。色調: 粘土 ぶいり褐色。胴部～底部の無釉部 ぶいり褐色。内面～口縁部外側無釉部 淡黄色。蒸気導入部及び排水部の外面のみオーブ色の施釉。流量: 口径(19.0cm) 底径18.5cm 器高13.3cm 蒸気導入部: 径1.8cm、底面より1.5cm上に蒸気噴出小孔列がめぐる。排水部: 上穴は半円形で上端外側に切込みがある。長径3.1cm、短径2.3cm、排水小穴は蒸気噴出小孔列より上に径8mm程度の穴が3箇所、蒸気噴出小孔列より下の底面に1.8cm×0.5cmの円形の穴が1箇所認められる。文字・刷印等: 円形部外面にへっ書きによる「龍」の文字がある。AKFL7+20+22の接合
16	9	A区	鉢②	陶器	煮黒釉	保存状況: 底面の2/3程度の残存。色調: 粘土 ぶいり褐色。底面は灰白色釉。流量: 底径(18cm) 蒸気導入部: 底面から1.5cm上に断面半円形の蒸気管(長径9cm、短径6cm)がめぐり、蒸気噴出小孔列がめぐる。外面に横溝と目皿を受けるもので中がやや低くなる。円形部の面には円形もしくは横溝の図案が形成され、横溝と細い溝でつながる。円形部底の底面には、幅2.5cm、高さ2cmの脚が付き、上げ底を呈する。AKFL11+BSFL11の接合



() 数字は現存部分の規模

出土遺物観察表2

調査員氏名(その他)

押印 No.	調査区	整理No.	種別	種類	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	特徴・備考	
17	10	AIK	F.L.87-8	磁器	集結部	1.9	1.9	0.6	径1.9cmの底状を見する。完形。その中心に0.1mm程度の微小孔があく。側面の中心位には幅1mm程度の溝が1周する。内面外面共に文字、文様などはない。
17	11	AIK	F.L.87-1	磁器	集結部	1.9	1.9	0.6	径1.9cmの底状を見する。完形。その中心に0.1mm程度の微小孔があく。側面の中心位には幅1mm程度の溝が1周する。内面に青色で「小」の文字が書かれている。
17	12	BIK	F.L.25-6	磁器	集結部	2.0	2.0	0.6	径1.9cmの底状を見する。完形。その中心に0.1mm程度の微小孔があく。側面の中心位には幅1mm程度の溝が1周する。内面外面共に文字、文様などはない。
17	13	BIK	F.L.25-8	磁器	集結部	2.0	2.0	0.6	径1.9cmの底状を見する。完形。その中心に0.1mm程度の微小孔があく。側面の中心位には幅1mm程度の溝が1周する。内面外面共に文字、文様などはない。
17	14	AIK	F.L.88-1	ガラス	糸鉤	全長4.0	径0.4	—	青色。完形。細いガラス棒を二重に巻いて(ループさせて)並列する環状とし、その内側を糸が通るようにしている。取り付け側の輪郭先端はピン先状に尖る。
17	15	AIK	F.L.88-2	ガラス	糸鉤	全長3.5	径0.4	—	青色。完形。細いガラス棒を二重に巻いて(ループさせて)並列する環状とし、その内側を糸が通るようにしている。取り付け側の輪郭先端はピン先状に尖る。
17	16	AIK	F.L.88-3	ガラス	糸鉤	全長3.9	径0.4	—	無色透明。完形。細いガラス棒を二重に巻いて(ループさせて)並列する環状とし、その内側を糸が通るようにしている。取り付け側の輪郭先端はピン先状に尖る。
17	17	CIK	F.L.13-1	ガラス	糸鉤	(3.6)	径0.4	—	青色。完形。細いガラス棒を二重に巻いて(ループさせて)並列する環状とし、その内側を糸が通るようにしている。取り付け側の輪郭先端はピン先状に尖る。CIK3号側溝内出土。
17	18	BIK	F.L.24-1	ガラス	糸鉤	(3.5)	径0.4	—	青色。完形。細いガラス棒を二重に巻いて(ループさせて)並列する環状とし、その内側を糸が通るようにしている。取り付け側の輪郭先端はピン先状に尖る。
17	19	BIK	F.L.24-2	ガラス	糸鉤	全長4.3	径0.4	—	青色。完形。細いガラス棒を二重に巻いて(ループさせて)並列する環状とし、その内側を糸が通るようにしている。取り付け側の輪郭先端はピン先状に尖る。
17	20	CIK	F.L.11-1	ガラス	糸鉤	(4.2)	径0.4	—	青色。完形。細いガラス棒を二重に巻いて(ループさせて)並列する環状とし、その内側を糸が通るようにしている。取り付け側の輪郭先端はピン先状に尖る。CIK1号側溝内出土。
17	21	AIK	F.L.88-4	ガラス	糸鉤	(3.6)	径0.4	—	無色透明。細いガラス棒を環状にしたもので、両端が欠損する。
17	22	AIK	F.L.90	ホーロー	糸鉤	(7.8)	外部外径5.3	輪郭径0.5	ホーロー引きの鉄棒の先端を巻いて環状とし、その内側を糸が通るようにしている。取り付け側の輪郭先端はホーロー加工されているとみられる。先端欠損。
17	23	CIK	F.L.15	ホーロー	糸鉤	全長9.1	外部外径5.4	輪郭径0.5	ホーロー引きの鉄棒の先端を巻いて環状とし、その内側を糸が通るようにしている。取り付け側の輪郭先端はホーロー加工されていないとみられる。先端欠損。
17	24	AIK	F.L.85	陶器	目皿	(8.5)	(7.0)	1.7	上面は白色釉が施される。径4mm程度の孔が多数あく。直線状の断面が見られ、孔はその直線状の断面に並行するようにあけられている。断面の断面形状は上面が平らで下面は斜めに立ち上がり台形状を見する。
17	25	BIK	F.L.21	陶器	目皿	(5.0)	(7.8)	1.4	上面は白色釉が施される。径6mm程度の孔が多数あく。孔間の長さは24の目皿に比べて長い。底面の状況から断面は円形を見ることが判断される。断面の断面形状は上面が平らで下面は斜めに立ち上がり台形状を見する。
17	26	BIK	F.L.22, 23	陶器	目皿	(9.3)	(12.4)	1.7	上面は白色釉が施される。径7mm程度の孔が多数あく。断面は円形を呈し、半径13.7cm程度を有する。孔は円形のラインに並行するようにあけられている。断面の断面形状は、上面が平らで下面は斜めに立ち上がり台形状を見する。
17	27	AIK	F.L.88-5	ガラス	製糸部具	径1.5	長さ(7.7)	厚さ(0.2)	青色。細いガラス棒に取りつけられるガラス管。両端欠損。

陶器類

押印 No.	調査区	整理No.	種別	種類	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	特徴・備考
18	28	A区 CR1	磁器	井	(15.2)	6.6	7.4	外面：口縁部に緑色の二重線。底面に青色で「瀬996」と捺されている。
18	29	A区 CR16	磁器	飯碗	(11.0)	(4.0)	5.2	外面：緑色で銅板転写技法による帆掛け舟の絵
18	30	B区 CR2	磁器	飯碗	11.4	4.2	5.0	外面：底面に緑色で「TRADE MARK」。中心位に青色で「小口」のマークが対称的な位置に2カ所捺される。
18	31	A区 CR15	磁器	飯碗	—	4.0	4.9	外面：青色と緑色で銅板転写技法による草花。内面：見込部に青色で三つ輪の文を筆書きする。
18	32	B区 CR11	磁器	湯呑茶碗	6.9	3.2	4.8	外面：青色で山を描く。底面に青色で「口の中に中藤藤吉店」の文字が捺される。
18	33	A区 CR2	磁器	湯呑茶碗	6.6	4.0	8.0	筒形。外面：口縁部、底面、両肩部に各一糸の青色線。中央部に「飯」「寿」の文字。
18	34	B区 CR1	磁器	湯呑茶碗	7.2	4.1	7.4	筒形。外面：青色で菊花を描く。底面に緑色で製器番号「3979」を捺す。
18	35	A区 CR22	磁器	湯呑茶碗	8.4	3.2	4.9	外面：青で花・鳥を描く。底面に「二重口に市」
18	36	A区 CR9	磁器	湯呑茶碗	(7.2)	—	—	筒形。外面：口縁部に二重線。中央部に緑色で「實業通商銀行」の「◇の中にS」の昭和製鉄株式会社」の文字。
18	37	A区 CR18	磁器	湯呑茶碗	(8.6)	(3.4)	4.9	碗形。外面：口縁部に緑色の二重線。底面に製器番号の「底」の陰刻。
18	38	A区 CR4	磁器	湯呑茶碗	7.4	幅み1.1	2.2	外面：虹の絵。「結実自然成 京月」の文字。
18	39	A区 CR14	磁器	小皿	(8.8)	(6.6)	1.5	外面：底面に緑色で◇の中に「菊水」の文字。内面：口縁部に緑色の二重線。
18	40	A区 CR25	磁器	皿	11.4	6.4	2.7	外面：底面に緑色で「TRADE MARK」 内面：底面中央に青色で「小口」のマーク。
18	41	B区 CR25	磁器	化粧品瓶	4.1	4.5	6.5	底面にウツタ化粧品のマークが陰刻される。
18	42	B区 CR26	磁器		5.8	4.3	9.7	底面に緑色で製器番号「9020」が捺される。

出土土物観察表3

陶器類

検出	No.	調査区	整理No.	種類	種類	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	特徴・備考
19	43	A/K	C R 27	陶器	汽車土版	9.0	7.8	7.7	外面：体部中位から口縁部まで褐色釉を掛け、注口部に付いて左側（土版の表面）に「長野」、右側（土版の裏面）に「中島」とイッチン書きされる。口縁部内面に「年」と呼ばれる意匠が刻む。
19	44	A/K	C R 26	陶器	湯呑	5.8	3.3	3.3	外面：体部中位から内面底部まで白色釉を掛ける。体部下半から底部まで無釉。汽車土版の湯呑。
19	45	B/K	C R 21	磁器	不明	最大径7.2	最小径2.4	16.0	全面に褐色釉が掛り、下部に針金が1周する。下面中央から数が出る。井戸内から出土。
19	46	B/K	C R 22	磁器	不明	径12.6	径10.2	奥行10.6	全面に褐色釉が掛り、表面に「〇の中に延」「燐酸防止」「3500V、100A」文字の彫刻。
19	47	A/K	I N 2	磁器	硝子	上部径3.4	下部径3.3	5.0	ノップ硝子。底面以外全体的に透明釉を施す。
19	48	A/K	I N 8	磁器	硝子	上部径4.7	下部径4.8	5.4	ノップ硝子。底面以外全体的に透明釉を施す。
19	49	A/K	I N 21	磁器	硝子	3.8	4.1	6.3	引留硝子。底面以外全体的に透明釉を施す。最大径7.6cm
20	50	B/K	C R 23	陶器	便筒	54.0	30.0	10.0	金盥し部分の高さ30cm。金盥し部分内外面、縁部分に青色で草花を焼く。

瓦類

検出	No.	調査区	整理No.	種類	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴・備考
20	51	C/K	カワラ2	瓦	軒瓦	(3.8)	(7.2)	(2.0)	焼成 良好。胎土 赤褐色。白色灰や褐色灰を含む。全面に暗赤褐色釉を施す。小丸部分のみの残存で径7.5cm。三ツ巴は右回り。瓦文なし。
20	52	C/K	カワラ1	瓦	軒瓦	(7.0)	(20.4)	(1.8)	焼成 良好。胎土 赤褐色。白色灰や褐色灰を含む。全面に暗赤褐色釉を施す。瓦当文様は、中心に三分の四の瓦文を施す。両面に赤褐色を表現したと思われる瓦文が施される。
20	53	B/K	カワラ1	瓦	軒瓦	(3.5)	(13.6)	(2.0)	焼成 普通。胎土 灰色。瓦当表裏面に赤色物付着。小丸部分の径7.8cm。三ツ巴は右回り。瓦文は5個。

埴土瓦

検出	No.	調査区	整理No.	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴・備考
21	54	A/K	R B 2	赤煉瓦	22.7	11.2	5.9	2154	にぶい赤褐色。ほぼ方形。機械抜き成形によるシワ模様が見られる。平面に楕円形の「製鉄敷上」の刻印あり。印長4.4cm、印幅1.7cm。
21	55	A/K	R B 3	赤煉瓦	22.9	11.3	6.0	2324	にぶい赤褐色。4/5残存。機械抜き成形によるシワ模様が見られる。平面に楕円形の「製鉄敷上」の刻印あり。印長4.4cm、印幅1.8cm。
21	56	A/K	R B 5	赤煉瓦	(13.5)	11.4	6.0	1388	明赤褐色。ほぼ方形。機械抜き成形によるシワ模様が見られる。平面に楕円形の「製鉄敷上」の刻印。印長4.3cm、印幅1.7cm。長手面以外5面にモルタルが付着。
21	57	C/K	R B 19	赤煉瓦	23.4	11.0	5.7	2515	赤褐色。ほぼ方形。機械抜き成形によるシワ模様が見られる。平面の中央から長手面にかけて黒い直線（墨線）によって墨付け痕か？があり、長手面の直線上には手摺とみられる丸印がある。直線と丸印のある長手面以外にはモルタルの痕跡がある。
21	58	C/K	R B 20	赤煉瓦	23.1	10.9	6.0	2540	赤褐色。ほぼ方形。機械抜き成形によるシワ模様が見られる。平面の端寄りから小口面にかけて黒い直線があり、小口面の直線上には手摺とみられる丸印がある。直線と丸印のある小口面以外にはモルタルの痕跡がある。
21	59	A/K	W B 4	耐火煉瓦	23.1	11.5	6.2	2799	浅黄褐色。ほぼ方形。平面に「Y. T. R.」の刻印。小口面以外5面にモルタルが付着。
21	60	A/K	W B 8	耐火煉瓦	22.8	9.8	5.9	2213	浅黄褐色。ほぼ方形。平面に「K. O. マーク B」「SK 3 2」の刻印。平面の端寄りに径1cmの穴があり、裏側まで貫通する。そこはコイル状の跡が残り、刻印のない平面端部から長手面にかけて断面形状に附れ、加工されている。断面が付着。長手面から刻印のある平面にかけて黒い直線（墨線）によって墨付け痕か？が見られる。
22	61	A/K	W B 1	耐火煉瓦	23.0	11.2	6.1	2678	浅黄褐色。ほぼ方形。平面に「K. I. B」の刻印。長手面から平面にかけて成形成後の段階で斜めにカットされ、断面形状を呈する。長手面には平面に直交するように幅5～3.5cm幅で直線的に被焼痕が見られる。
22	62	A/K	W B 3	耐火煉瓦	22.8	11.0	5.9	2435	浅黄褐色。ほぼ方形。平面に「K. I. B」の刻印。長手面から平面にかけて成形成後の段階で斜めにカットされ、断面形状を呈する。長手面には平面に直交するように幅5～3.5cm幅で直線的に被焼痕が見られる。カットされた面には平面に直交するように幅5～3.5cm幅で直線的に被焼痕が見られる。
22	63	A/K	W B 6	耐火煉瓦	22.9	10.9	6.2	2090	浅黄褐色。平面の角が欠損。平面に「M. R. F. K」の刻印。長手面から平面にかけて成形成後の段階で斜めに大きくカットされ、断面形状を呈する。
22	64	A/K	W B 9	耐火煉瓦	23.0	10.9	6.5	2440	浅黄褐色。ほぼ方形。平面に「H. N. D」の刻印。片側の横手面に成形成後の幅11.0cm、深さ2.0cmの切り込みが見られる。これに垂直なように、刻印と平行な小口面から長さ11.7cm、深さ0.6cmの切り込みが見られる。平面、切込みのある横手面、小口面にモルタルの痕跡。刻印のある平面に黒色物が附着する。刻印のない平面には小口面から1.5cm幅に、小口面に平行するように黒い直線が、また、この直線に直交するように小口面に黒い直線が確認される（墨線による墨付け痕か？）。
22	65	A/K	W B 10	耐火煉瓦	(14.0)	11.5	6.1	1360	にぶい褐色。2/3残存。平面に「A. I. K. O.」の刻印。平面122面と小さな格子目瓦をもつディンプル加工が施される。全体的に数分が付着。刻印のある平面に黒色物が附着。
22	66	A/K	W B 11	耐火煉瓦	(11.1)	10.1	7.4	1430	明褐色。1/2残存。平面に2×1cm程度の刻印があるが文字不明。平面に径7～8mmの円に縦線が入る刻印が各辺に40所程度確認できる。裏側の平面でも同様の位置に同じ刻印が確認できる。小口面、長手面の1面、刻印のない平面の一部が熱を受け変色している。
22	67	A/K	W B 12	耐火煉瓦	(7.5)	10.8	6.1	760	にぶい褐色。1/3残存。平面に「〇の中にNT」「NTA I K」の刻印。平面122面と小さな格子目瓦をもつディンプル加工が施される。長手面の1つが熱を受け変色している。
22	68	C/K	W B 1	耐火煉瓦	(11.1)	11.2	6.6	1515	浅黄褐色。1/2残存。平面に「O. Y.」の刻印。一方の長手面に数分が直線的に附着する。

出土土物観察表4

耐火製品

押図	No.	調査区	整理No.	種別	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・備考
23	69	A/K	F P 1		丸煎板	径(13.2)	—	1.7	—	径13.2cm程の円板状のものの上に直線状の溝が平六角形状を呈して回るとみられる。中央に直径1.3cm程の円形の穴があく。
23	70	A/K	F P 2	環土器	不明	22.6	11.1	6.1	755	灰白色。大きな割には非常に軽い。吸水性に富む。長手面の一つが斜めにカットされ、断面が台形を呈する。カットされている面には、長手面の長軸に平行して幅1.3~1.8cm程の工痕が見られる。形状が鋭く幾何学的な形状に類似する。
23	71	A/K	F P 3	環土器	不明	22.4	11.3	6.3	935	灰白色。大きな割には非常に軽い。吸水性に富む。平面から横手面にかけ斜めにカットされている。カット面の長軸方向に対し、直交方向に傾き直がみられる。
23	72	A/K	F P 4	環土器	不明	11.1	6.2	5.1	240	灰白色。吸水性に富む。八面体を呈するが、斜めにカットしている面はきれいな形ではなく、大きさにばらつきがあり作りだされている。長手面は短軸、小口面は短軸、平面に富む平らな面となっている。
23	73	A/K	F P 5	環土器	不明	15.7	10.4	6.4	490	灰白色。吸水性に富む。2つの平面と1つの長手面は平らで、残りの面は長軸方向に傾き直がみられる。1つの斜めの面に縁状のてがつく付着する。
23	74	A/K	F P 15-1		不明	11.8	7.7	3.9	348	灰白色。定形で残る。方形の上部にL字状のものが接合したような形態で、製造り成形とみられる。縁線が明確に見られ、磨滅していないがL字状部分の下面を中心にバリが顕著。2次焼成痕あり。一部欠け付着。
23	75	A/K	F P 16-1		不明	12.1	6.7	5.3 3.8	379	灰白色。定形で残る。ASP15と類似する形態だが方形の上部にT字状のものが接合したような形態となる。製造り成形とみられる。縁線が明確に見られ、磨滅していないがPP15-1と同様な箇所バリが顕著に見られる。2次焼成痕あり。
23	76	A/K	F P 17-1		不明	12.3	10.1	6.7	1130.7	灰白色。定形で残る。直方体の上部に台形を呈する断面状のものが接合したような形態である。製造り成形とみられ、磨滅していない。断面状の部分からカットしている痕跡が見られる。2次焼成痕あり。一部欠け付着。
23	77	A/K	F P 14-1		不明	6.7	6.95	3.65	294	灰色。定形で残る。断面状と見られ、各辺の縁線も明確で磨滅していないが、上部に位置する大きな縁線にはバリが認められる。PP15-1やPP16-1の下部の方形とはほぼ同様の大きさである。
23	78	A/K	F P 19-1		不明	(21.2)	径 4.9~ 5.1	—	(573.1)	にふいづ色。2/3焼成。円筒形で中央に3x1.2cmの方形の孔が通る。全体的に2次焼成で磨滅している。部分的に鉄屑が付着する。胴部を縦断するように焼成色の付着物が認められる。
23	79	A/K	F P 18-1		不明	29.7	8.0	孔径 5.3	2076.2	浅黄褐色。定形で残る。1辺が約8cmの角柱で中央に径5.3cmの穴が通る。全体的に2次焼成で磨滅しているが、片側の小口面の磨滅が顕著である。

ガラス製品

押図	No.	調査区	整理No.	用途	色調	底形	胴形	口形	口径 (cm)	底径 (cm)	脚高 (cm)	特徴・備考
24	80	A/K	G L 2	薬品	淡青色	円	円	平	1.8	5.8	17.5	薬品瓶。エンボス 底面「☆」。小さな気泡多い
24	81	A/K	G L 3	薬品	緑色	円	円	平	1.8	7.4	18.8	薬品瓶。エンボス 底面「○の中に△」。不明なもの。小さな気泡多い
24	82	A/K	G L 4	薬品	褐色	円	円	S	1.8	4.6	11	薬瓶。エンボス 肩部「○の中に正 100cc」。胴部に目線線。底面に「①」と不明なもの。底面にネーミング
24	83	B/K	G L 5	薬品	褐色	横長八角形	横長八角形	平	1.7	5.8×2.4	8.1	薬瓶。エンボス 底面「樽の中にイマツ」
24	84	B/K	G L 12	薬品	無色透明	円	円	平	つまみ 径2.4	2.8	2.8	試薬瓶？。肩から下の体部部加り。85とは合わないが同様の形状
24	85	B/K	G L 8	薬品	無色透明	円	円	平	3	4.6	4.4	試薬瓶？。エンボス 底面に「○の中に・」。口縁部内部に磨り加工
24	86	A/K	G L 8	薬品	無色透明	円	円	平	1.2	2.9	7.2	薬瓶。エンボス 胴部線「目線線」。胴部線にラベルを貼る区画が線で区切られる
24	87	B/K	G L 3	薬品	緑色	横円	横円	S	2	4.2×1.8	8.1	薬瓶。全体的に細かな気泡多数
24	88	A/K	G L 1	薬品	淡青色	—	横円	S	1.6	胴径 2.7×1.6	8.6	目薬瓶。先端部スクエア切。胴部は横円形で両端部が平坦になる。横面にエンボス「BAGGAGE」 「EYE LOTION」
24	89	B/K	G L 24	化粧品	黒色	円	円	S	3.4	4.2	5.5	化粧クリーム瓶。円筒形
24	90	B/K	G L 25	化粧品	白色	横円	横円	S	3.2	3.6×3.0	5.3	化粧クリーム瓶。いかり罫。胴部に縦溝3本が4セット。エンボス 胴部下縁に「I D E A L」
24	91	B/K	G L 27	化粧品	白色	円	円+方形突起	S	4.8	5	4.1	化粧クリーム瓶。体部4カ所に往状突起。エンボス 胴部に「○の中に不明なデザイン」
24	92	B/K	G L 26	化粧品	白色	円	円	S	3.6	3.6	4.2	化粧クリーム瓶。円筒形。エンボス 底面に「T-1 2」
24	93	B/K	G L 19	化粧品	白色	円	円	S	(4.0)	5.2	4.9	化粧クリーム瓶。円筒形。エンボス 底面に「マリオ」
24	94	C/K	G L 8	化粧品	褐色	円	円	S	3.3	3.8	6.1	化粧クリーム瓶。肩の裏った円筒形。エンボス 底面に「C O Z」
24	95	B/K	G L 11	化粧品	無色透明	円	円	S	0.6	4	9.6	化粧水瓶？。いかり罫
24	96	B/K	G L 1	日用	無色透明	円	円	S	4.4	5.6	2.9	化粧クリーム瓶。エンボス 外面に斜線的に「コロンブス」が2箇所「☆」が2箇所
24	97	B/K	G L 18	日用	淡青色	円	円	S	5.5	5.6	5	薬瓶。小さい気泡が入る
24	98	A/K	G L 6	食品？	無色透明	円	円	平	4.2	3.8	9.4	小さい気泡が入る
24	99	B/K	G L 4	食品？	淡青色	円	円	平	4.8	5.2	10	気泡が多数みられる。胴部が若干歪む。エンボス 底面に「K」
24	100	A/K	G L 22	食品	淡青色	円	—	—	(9.4)	(9.3)		醤油瓶。エンボス 底面に「登録①97629号」「Kikkō mas」「○内にN」「Y」

出土遺物観察表5

ガラス製品

押印	No.	調査区	製用No.	用途	色調	底形	胴形	口形	口径(cm)	底径(cm)	胴高(cm)	特徴・備考
24	101	A区	G.L.15	飲料	無色透明	円	円	平	3.4	4.8	14	牛乳瓶。エンボス 胴部下に「○の中に正180ccc」。底面に石塚硝子の「石」(6.6)
24	102	A区	G.L.18	飲料	黄緑色	円	円	平	3.4	4.8	14	牛乳瓶。エンボス 肩寄りに「樽内の中に右から全乳」。胴部下に「180ccc」
25	103	A区	G.L.19	飲料	淡緑色	円	円	平	1.6	5.8	23.4	サイダー瓶。エンボス 肩部の対象位置に「田島」。胴部下に右から「日本麥酒醸造株式会社」。底面に「20003」
25	104	A区	G.L.21	飲料	褐色	円	円	平	2.6	7	28.6	ビール瓶。エンボス 肩部付近に右から「豊田●商標」。胴部下に「SAKURA BEER」。右から「サクラビール」。底面に「KYO 29」。ネーリングなし
25	105	C区	G.L.9	飲料	褐色	円	円	平	2.5	7	28.5	2号コンクリート製出。ビール瓶。エンボス 肩部に「TRADE ○の中に●商標」。胴部下に「ANGEL JAPANESE BREWERY」(COMPANY, LTD., TOKYO)。底面に「3」。ネーリングなし
25	106	B区	G.L.2	用途不明	淡緑色	円	円	S	2.6	2.7	7.1	エンボス 底面に「18」
25	107	B区	G.L.14	用途不明	無色透明	円	円	S	1.4	2.6	4.6	気泡が少し入る
25	108	C区	G.L.2	用途不明	淡緑色	円	円	平	0.9	2.8	6.3	小さな気泡が多く入る。少し歪む

*「S」は残存部を、口形の横の「平」は平底を「S」はスクルー状を表す。

木製品

押印	No.	調査区	製用No.	種類	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴・備考
25	109	B区	その他1-1	木製品	横割板	29.0	上部7.2 下部6.5	上部1.3 下部1.2	上端から4.3cm下に2.4×2.7cmの円形の穴があく。表面の胴部中段と下端部に縦の線跡とみられる痕が入る。内面の下端より1.0cm上に厚さ1.0cm程度の底板がはめられていたとみられる浅い痕が入る。上端部は内面に向けて斜めに削られている。
25	110	B区	その他1-2	木製品	横割板	28.5	上部6.9 下部6.5	上部1.4 下部1.1	上端から4.2cm下に2.5×2.7cmの円形の穴があく。表面の胴部中段と下端部に縦の線跡とみられる痕が入る。この部分に縦方向の痕による凹痕とみられる跡が認められる。内面の下端より1.2cm上に厚さ0.8cm程度の底板がはめられていたとみられる浅い痕が入る。上端は内面に向けて斜めに削られている。
25	111	C区	その他3	木製品	下駄	22.0	8.1	(2.4)	縦線が多く付いた木目が見えている。滑面下駄。鼻縁を透す穴「眼」の内、前のものは径0.5cm、後ろのものは径1.0cmを開く。台の中ほどには赤色の塗りの線跡が残る。

第4章 調査成果と課題

第1節 東町遺跡周辺の水田遺構との関連

本遺跡からはAs-B一次降下層に埋没した水田跡が検出され、本遺跡周辺で調査された東町遺跡～東町遺跡7でも同時期の水田跡が検出されている。広範囲に水田が展開していたことが理解される。それらの水田面は凹凸があるものの比較的平坦な状況で検出されているものが多い。広範囲に調査され、田面の様相が把握された栄町I遺跡でも同様である。しかしながら本遺跡の状況は、A区北東の範囲のみ凹凸が弱い状況であったが、他は全面にわたって凹凸が顕著であった(写真PL11・12)。本遺跡南側の都市計画道路造成に伴う東町V遺跡の水田面でも凹凸のみ目立たない状況であり、本遺跡の田面が特異な様相を示しているように思われる。As-B降下直前水田利用状況に何らかの違いがあったのであろうか。今後の課題の一つとして捉えていきたい。

なお、東町V遺跡において検出したAs-A下水田跡および災害復旧痕については、今回の調査では近代遺構の残存状況が想定以上に良く江戸時代遺構の面的検出はできなかった。

第2節 近代における高崎市東町80番地周辺の土地利用と検出された遺構について

高崎市街地は江戸時代から城下町兼宿場町として栄えてきた。市街地東側には鉄道が全国的にも早い明治17年(1884)5月に東京の上野駅～高崎駅間、同年8月高崎駅～前橋駅間で開通した。鉄道開通後は高崎駅周辺に工場が徐々に進出してきたが、鉄道線路の東側一帯は水田が広がる地域であった。

26頁に示した年表や図28の周辺地図で示したように、徐々に工業地域となっていた。水田の埋め立てには全面に大量の炭殻が使用されていた。当時燃料は石炭を主流としていた外、近隣に高崎駅があり蒸気機関車から排出される炭殻を入手しやすかったことも一因として挙げられる。

●製糸工場の時代

製糸は繭を煮て糸を引きやすい状態に保ちながら行う作業で、生糸1kgの生産には1トンの水、あるいは工女1人に1石、または、1石2〜3斗の水が必要とされ、用水確保は製糸場の課題であった。高崎市では明治43年(1910)に上水道が完成し、大正元年(1912)に市製糸工場奨励規定が制定されるなどの条件や第一次世界大戦による好況も背景となり、市内に製糸工場が相次いで設立された。そのうちの一つに株式会社龍栄社製糸所がある。

龍栄社は高崎の有力実業家の井上保三郎らにより設立され、高崎市赤坂村字中沖(現 東町)で製糸工場を操業した。龍栄社時代の工場建物配置図は見つかっていないが、「大正6年高崎市街全図」(個人蔵、令和6年(2024)11月開催第2回「高崎の歴史再発見」コラボ展の染色伝統工芸コーナーに展示された)によると、龍栄社は現在の市道広小路栄町線旭町アンダー東側交差点の東一帯に描かれていた。創業時の敷地は都市計画道路として新たに造成した市道を中心に南北に展開されていたことが傍証される。当時は東三条通(大正12年開通)が無く、市街地側の西側が正門であった。

大正12年(1923)9月1日に発生した関東大震災は、東京や南関東を中心に甚大な被害をもたらした。高崎でも高崎板紙会社の煙突が倒れるなど被害が発生した。長野県諏訪に本拠を置いた小口組は、徳島県、東京赤羽、福島県郡山、兵庫県和田山、茨城県石岡、宮崎県都城に支店製糸工場を持つ巨大製糸所であった。このうち東京赤羽工場は震災による被害が大きかったため、代替地として同じ鉄道沿線(東北線・高崎線)の高崎に白羽の矢が立ったようである。小口組は龍栄社を買収し、大正12年12月高崎製糸所を創立した(支店所在地は高崎市赤坂村704番地)。その際「380釜を540釜に拡張した」とあり工場施設の大規模な拡張があったと推定される。

小口組時代の工場の様子がわかる写真が、『高崎大観』(昭和3年(1928)高崎大観刊行会発行)所収「小口組高崎製糸所」である。図書の発行年から大正末〜昭和初期の撮影と推定され、画像手前に水田と畔が広がるので北西方向からの撮影とみられる。敷地は塀で囲われ、塀の内側に東西方向の木造瓦葺建物2棟、奥に煙たなびく煙突1基、塀の周囲に電信柱数本、南北方向の木造瓦葺平屋建物1棟、その奥に木造二階建物数棟が確認できる。煉瓦造建物は確認できない。ちなみに昭和初期における小口組の原動力は電動機6基(20馬力)、汽缶2基(1ヶ60ポンド)であった。

小口組の工場建物配置は、昭和6年高崎市全図や昭和9年高崎市街図に表記された小口組製糸場や昭和9年高崎市鳥瞰図(吉田初三郎1884〜1955年 大正から昭和にかけて活躍し「大正の広重」と称された絵師。全国各地の鳥瞰図を作成した)で確認できる。広大な敷地の中に南北に長い三角屋根建物とその東側に東西棟建物6棟、敷地南にも東西棟建物3棟のほか小ぶりな建物が多数配置された様子が描かれている。工場正門は東側の東三条通りである。全盛期の製糸工場の様子がうかがえる図である。小口組は、昭和8年(1933)の生糸価格の暴落により大打撃を受け、土地所有者から訴訟も起こされ操業停止になったようである。

●軍需工場から機械工場へ

昭和12年(1937)日中戦争が始まり、戦時体制に備え戦開用航空機生産関連工場が東三条通沿いの江木町(東町の北隣)や高崎駅の北北東約1.8kmの塚沢小学校周辺に建てられた。昭和16年(1941)桐生市在住の日本航空機材製作所社長の山田勝太郎は、中島飛行機株式会社のすすめで高崎に工場の進出を決定し、東町の旧小口組製糸所の土地建物を買収して山田航空機製作所を創業した。翌17年組織を改編して山田航空工業株式会社が設立された。買収した土地の面積は1560坪(約5150㎡)、建物は事務所2棟131坪(木造瓦葺ラズ張二階建1棟、木造瓦葺平屋1棟)、第一工場652坪(約2150㎡・木造瓦葺平屋3棟)、倉庫158坪(木造瓦葺平屋1棟)、寄宿舎2棟155坪(木造瓦葺二階建1棟、木造平屋1棟)の計延べ坪1096坪である。工場建物3棟を「整理工場、部品工場、タンク工場、鍍金工場、熟処理工場、組立工場トナシ外ニ5棟ヲ事務所、守衛所、倉庫、手洗所、便所及寄宿舎に当て」

たとある。

軍需工場である山田航空工業株式会社の建物配置図は発見できなかったが、昭和23年(1948)撮影の空中写真(図32)および図30・31で当時の様子がある程度確認できる。その後昭和34年(1959)マックス工業(株)は本社工場を山田興業(株)時代から使用していた工場建物の場所に鉄骨造2階建てで新築している。山田航空工業株式会社の敷地は、「第一工場」との記載から旧小口組製糸所の北半分と推定される。敷地北辺の建物は東から事務所二階建(Ⅰ)、事務所平屋(H)、変電所(C)、居宅(D)、その南に守衛所(J)、工場(B、G 鋸屋根平屋)、事務所(A)、工場(E)、居宅(F)(注:アルファベットは図30に対応している)が配置されていた。なお、南東側の大きな建物(木造代用セメント瓦葺平屋建工場1棟 建坪576坪)については山田興業から群馬トヨタ販売株式会社に土地建物が貸与された。

以上の主な土地利用から推測すると、工場建物が変化する契機は大きく3回あったとみられる。

1. 小口組が龍栄社を買収し釜数を増やした時、2. 山田航空工業が設立され軍需工場として稼働した時、3. マックス工業の新社工場建設時である。

●検出された主な遺構の特徴

・石列について

A区とB区から検出された石列は、一部に欠損があるものの南北方向に約1.8m間隔(一間)でほぼ規則的に並んでいた(S-2～S-22、S-13～S-23およびS-24～S-34の3列)。石列の構造は2タイプあり、S-2～S-22とS-24～S-34の2列は、炭殻層から古代の水田面の深さまで掘り込んで石を設置し、その石の上に角柱石を直立させ周囲を小石で補強している。一方S-13～S-23は炭殻層の最下層の深さに設置している。前者の東西間隔は約9mで柱五間分相当で、S-3とS-4、S-8とS-9の間隔は約3.6m(二間)で一石分空いている。2本の石列は小口組製糸工場の南北に長い建物の外壁基礎とみられる。S-13～S-23はレンガ遺構の下に位置することから製糸工場関連の遺構と考えられるがその性格は不明である。

・レンガ遺構について

C区2号レンガ遺構は、コンクリート基礎の上に煉瓦積み乗る遺構で、小口組時代からマックス工業時代まで継続して使用された建物(工場)と推定される。また、4号レンガ遺構は貯水槽と南に延びる土管、2号レンガ遺構は排水樹と2方向への土管があり関連度の高い遺構で製糸工場時代と推定される。基本的に煉瓦を使用した構造物は製糸工場の遺構と考えられる。

・コンクリート遺構について

1号コンクリート基礎と3号コンクリート基礎は、3号基礎上面から青色ガラス製糸鉤の破片が出土していることから、製糸工場の遺構と推定される。調査区南端や、C区1号コンクリート遺構、2号コンクリート樹の埋土中には白色破片が多数見られ、自然科学分析によると漆喰と分析されている。木造建造物の部材が混入していることから製糸工場建物を壊した際に埋められたと判断されることから製糸工場の遺構と推定される。1号コンクリート遺構から耐火煉瓦や瓦片が多量に検出された。耐火煉瓦は燃焼施設等を伴う建物に用いられた可能性がある。西側に耐火煉瓦を使用したA区3号レンガ遺構が存在することからこの付近に燃焼施設が存在した可能性があり、製糸工場の遺構と推測される。

A区南東の東壁断面で観察できるコンクリート基礎は布基礎下に煉瓦片が使用されている。上からの土圧によりコンクリート面にゆがみがある。軍需工場以前の建物基礎と想定される。

1号側溝、2号側溝、3号側溝は位置関係から同時期に使用されていたと推定される。

C区中央建物基礎のコンクリートの高まり部分には太い鉄製ボルトや配線用の鉄管と銅線、物を設置した痕跡や半円形の窪みが残る。工場の動力装置が設置された土台と推定される。東側に根太基礎の高

まりがあることから建屋に覆われていたと可能性がある。

5号コンクリート遺構は南に隣接する6号コンクリート遺構が便槽と推定されることから寄宿舍の可能性を指摘したい。

なお淡緑色物質は自然科学分析によるとボーキサイトなどを用いたアルミニウムの精錬に伴う堆積物と分析されている。この淡緑色物質はB区南端やC区中央建物基礎の埋土中、松杭11から大量に出土しており、山田航空工業が航空機部品製造所として大規模に操業していたことが傍証される。

・松杭について

丸太敷本を地面に打ち込んだ松杭部分は、国土地理院空中写真(図32・33)および地図(図28)で区画を照合すると、松杭1・2・3は群馬トヨタ自動車株式会社本社の旧建物基礎、松杭4～10はマックス工業株式会社新工場建物の大型コンクリート基礎を支えるために打設されたとみられる。

第3節 出土繰糸鍋・煮蘭鍋と刻印について

本遺跡からは復元したのもも含めて113点の鍋破片が出土している。それらを形状・胎土・施釉状況などを基準に観察したときにおよそ2つのタイプに分けられる。1つは図13-1・2、図14-3・4に代表されるように、浅黄褐色の胎土で内面から口縁部外側まで灰白色系の釉薬をかけているもので、底面は平坦であるが同様な位置に重ね焼き痕が認められるものである(Aタイプ)。もう一つは図14-5、図15-6・7に代表されるように、にぶい橙色の胎土で口縁部・直線部の壁は黒色釉、底面～円形部壁は灰白色系の釉をかけていたり、前者の鍋よりやや大型で、円形部側に脚を付け上げ底状になったりしている。底面は平坦でなく目皿を設置する部分や蟻溝と呼ばれる部分、円形もしくは楕円形の浅い凹みを設けたり、口縁部には注水溝がつけられたりしている。また、直線部の内壁に縦方向の溝が見られるなどの特徴をもつものである(Bタイプ)。これらの破片の中には刻印が見られるものがあり、鍋が焼成される前に捺されたもので製造所印や職工印などと呼ばれている。ここでは製造所印とみられる刻印に着目して、鍋のタイプと産地との関係について検討してみたい。

Aタイプの鍋では、出土遺物の項で記したように1・3は3種類の刻印が円形部外面のほぼ同じ位置に捺されている。その刻印から江州信楽ナベヨ(鍋要)製であることが判明する。2には「(右から)信長一(カネ)上」の刻印が押されている。明治7年(1875)に滋賀県の奥田要助(屋号：鍋要)は信楽の長野村で陶器製の繰糸鍋の製造を創業したとされている。また、愛知県豊橋市民俗資料収蔵室(豊橋市美術博物館)所蔵資料に「江州信楽長野一(カネ)上」の刻印が見られ(大西2019)、長野は製造所の所在地を示しているとみることができる。「(右から)信長」は信楽長野村の省略形と推測でき、2も信楽産と考えることができる。「(右から)信長一(カネ)上」の刻印は、遺物整理番号A区FL6(写真126)にも見られる。この他の刻印としてA区FL9(写真127)「信楽 A(ヤマ) □」やA区FL12(写真128)「ナベヨ製」が見られる。A区FL9の刻印は煮蘭鍋図16-9に見られる刻印に似ていることが注意される。

Bタイプの鍋では、7は排水部に接した口縁部の「〇千」刻印から長野県上伊那郡高遠町(現伊那市)にあった合名会社九千組で製造されたものであることが判明する(大西2019)。A区FL1(写真129)は「〇千組製」、B区FL9(写真130)は7と同様の位置に「〇千」の刻印の一部が見られることからそれぞれ九千組で製造されたものと判断される。A区FL41(写真131)は排水部に接した口縁部に「特許林式」の浮き文字が見られる。同文字の出土例から長野県上伊那郡辰野町の林工業株式会社によるものと判明する。A区FL42(写真132)は「信州口・」の刻印があることから信州産と判断される。A区FL40(写真133)については口縁部の小破片であるが、特許番号の筆文字が見られる。大西雅広氏からのご教示でこの番号から大正5年(1916)に長野県諏訪郡川岸村の片倉直人が特許を得た「片倉式注水装置繰糸釜」の破片であることが判明し、信州産とみられることがわかった。

今回の調査で確認された繰糸鍋・煮蘭鍋に見られる刻印は上記のような様相を示している。すなわち、Aタイプの鍋には信楽産を示す刻印が捺され、Bタイプの鍋には信州産を示す刻印が捺されているということである。逆にAタイプの鍋に信州産を示すような刻印は見られず、またBタイプの鍋に信楽産を示すと思われる刻印は見られないことから、Aタイプの鍋は信楽産、Bタイプの鍋は信州産とおおまか推定することができる。

第4節 出土繰糸鍋・煮蘭鍋と2つの製糸場について

出土した繰糸鍋には刻印の他に鉄泥による筆文字が認められるものがある。図13-1、3、A区FL12(写真128)、A区FL8(写真134)、B区FL2(写真135)は「龍」の文字が、図13-2、A区FL6(写真126)は「竜」の文字が円形部外側面に書かれている。繰糸鍋の円形部外側面に文字が書かれている例は、史跡旧富岡製糸場から出土した繰糸鍋にも認められる(富岡市教育委員会2024)。そこでは「富岡」「富」「原」などの文字が見られ、発注者の名称の省略形などが書かれていることがわかる。本遺跡出土の「龍」、「竜」についても大正5年(1916)に創業された株式会社龍栄社(工場主:井上保三郎)がこの地にあったことがわかっており、龍栄社発注の繰糸鍋であったと考えられる。「龍」、「竜」の書かれている繰糸鍋の刻印を見ると、「龍」5点の内3点には製造所刻印があり、「江州信楽ナベヨ製」であることがわかる。「竜」2点の製造所刻印は「(右から)信長一(カネ)上」であり、「ナベヨ」とは別の製造所で作られた可能性が大きい、いずれもAタイプの鍋であり、信楽で作られていることには間違いないと思われる。製造所のちがいが「龍」と「竜」のちがいにつながったものではないだろうか。

Bタイプの鍋には発注者を示すような手がかりは見られなかったが、形態的特徴は繰糸する条数を増やし、繰糸作業を効率よく実施するために加えられた改良点(①従来の鍋より円形部側を作業しやすくするため右あるいは左部分を広めて大型化している。②円形部側に脚を付け上げ底状にして湯量が従来の鍋より少なくすむようにしている。③長方形の目皿を斜めに設置したり鍋溝よばれる凹みを作ったりして鍋内での作業をしやすくしている。④口縁部に注水溝が付けられ温度調節を容易にできるようにしている。⑤直線部の内壁に縦方向の溝が全面につけられ蒸気の対流が効率よくなるようにしている。)に合致している。これら改良された鍋(改良型半月鍋)は、丸千組カタログに掲載されており、大正後半から昭和初期にかけて導入されていたものと考えられており(大西2019)、Bタイプの鍋はその頃に導入されたものと推定される。

株式会社龍栄社は、大正5年に創業され、大正13年(1924)に長野県諏訪郡岡谷町(現岡谷市)を本社とする小口組製糸所によって吸収合併される。合名会社丸千組は大正6年(1917)、林工業は大正13年の創業なので龍栄社が仕事を始めた段階ではどちらもまだBタイプの鍋を生産していないことになる。したがって龍栄社創業時は信楽焼の繰糸鍋を使っていたと推定される。Aタイプの繰糸鍋、少なくとも「龍」「竜」の筆文字がある繰糸鍋は株式会社龍栄社の創業時あるいはそれに近い時期に導入されたものと推定される。

小口組製糸所は全国各地に製糸工場をもっていたが、大正12年(1923)の関東大震災により東京の赤羽支店が損壊したため龍栄社を買収して移転したとされている。大正13年(1924)1月に事業を開始すると同時に拡張し、380釜から540釜とし620名の工女を使役し年額1800梱を産出するほどであったという(高崎市 1927『高崎市史下巻』)。その後も小口組高崎製糸所は600釜(昭和3年度)に増やしており、次々と繰糸鍋を導入していったことがうかがえる。生産性を上げるために改良されてきた繰糸鍋(改良型半月鍋)をこの流れの中で取り入れていったことが充分想定されるところである。信州産のBタイプの鍋は小口組の事業拡大策の中で本遺跡にもたらされたものと考えられる。

第5節 2つの製糸場に関わる出土遺物について

龍栄社に関する出土資料としては、本遺跡の南隣接地で平成7年(1995)に発掘調査された東町V遺跡で検出された「龍栄社」の焼き印が捺された木札がある(高崎市教育委員会1996)。この木札は龍栄社の文字とその上部に三つ輪違い文が方形の枠内の捺されているもので、3点報告されている。社名と三つ輪違い文の配置状況はいずれも同じで、その様相から三つ輪違い文は、龍栄社の社紋であったと推測される。今回、A区出土磁器飯碗(図18-31)の見込部分に手描きによる三つ輪違い文が確認された。東町V遺跡の報告書には掲載されていないが、同じ文様で見込部に手描き三つ輪違い文が描かれた飯碗が出土している。龍栄社の社紋が描かれたこの飯碗は龍栄社用につくられ、社内で使用されていたものと考えられる。次に述べる小口組のマークの入った碗に比べ薄手である。

小口組製糸所に関わる出土資料は、図18-30と40の磁器碗・皿があげられる。いずれも小口組のマークが捺されており、一目で関連がわかるものである。高台内面に美濃窯業のマークも捺されており、美濃窯業が小口組から発注を受け生産したものと考えられる。小口組製糸所のマークが入った磁器碗・皿などは、A区で4点、B区で1点、C区で2点出土している。本遺跡近隣の東町V遺跡、東町VI遺跡でも出土している。さらに茨城県石岡市国分遺跡でも同様の磁器碗・皿が出土していることが判明している(石岡市教育委員会 2008)。ここにはかつて小口組石岡製糸所があったところである。これらの磁器碗・皿は作りが厚手で江戸時代の「くらわんか」碗のような様相で、普段使いの雑器で大量に生産されたとのものと考えられる。高崎製糸所では620名もの工女がいたとされ(高崎市 1927)、その宿舎の存在も想定される。そこで働く人たちが食事の際に使用していたものと推定される。

参考文献

- 石岡市教育委員会 2008 『茨城県石岡市国分遺跡』
- 大西雅広 2019 「信州産陶器製線糸鍋の基礎的検討—丸千組と林工業を中心に—」『研究紀要』37
群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 群馬トヨタ自動車株式会社ホームページ 企業情報>沿革 <https://gtoyota.com>
- 高崎市 1927 『高崎市史 下巻』
- 高崎市 1998 『新編高崎市史』資料編10 近代現代Ⅱ
- 高崎市 2000 『新編高崎市史』資料編11 近代現代Ⅲ
- 高崎市 2001 『新編高崎市史』補遺資料編 近代現代
- 高崎市 2003 『新編高崎市史』通史編1 原始古代
- 高崎市 2004 『新編高崎市史』通史編4 近代現代
- 高崎市教育委員会 1996 『東町V遺跡』
- 高崎商工会議所 1956 「企業紹介 マックス工業」『商工たかさき』昭和31年8月1日号
- 高崎大観行会 1928 『高崎大観』
- 富岡市教育委員会 2024 『史跡 旧富岡製糸場 内容確認調査報告書4 社宅周辺 侯門所跡 遺物編』
- 松村 敏 2015 「巨大製糸小口組の発展と展開：1903-1931年—「匿名組合」の本店経営」
『商経論叢』50巻2号 神奈川大学経済学会
- マックス工業株式会社 1959 『マックスだより』第2号
- マックス株式会社ホームページ マックスについて>会社情報>マックスの歴史>沿革
<https://www.max-1td.co.jp>



図26 昭和9年 高崎市鳥瞰図 吉田初三郎作
(群馬県立図書館デジタルライブラリーより一部改変)

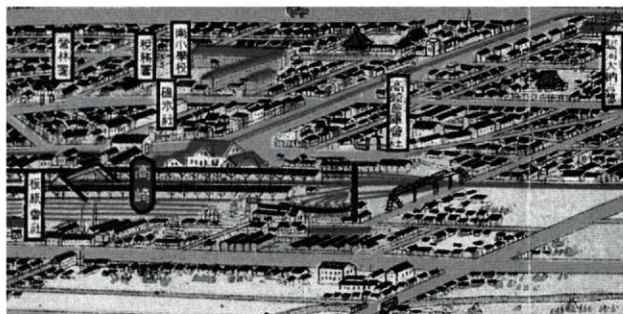
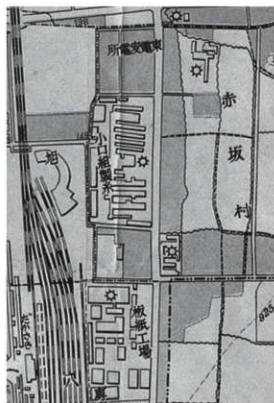


図27 上記の拡大図

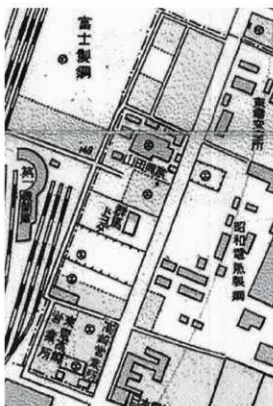
高崎市鳥瞰図は昭和9年(1934)の市街地を北東上空からみたもので、中央部下寄りに高崎駅が描かれている。その高崎駅の右手前側に東西棟の建物が並んでいることが確認できる。同じ昭和9年の高崎市街図に高崎駅の北側に「小口組製糸」の建物が描かれており、やはり東西棟の建物が並んでいる。周囲の様相を見ても鳥瞰図に描かれた東西棟の建物が小口組高崎製糸所であると判断される。



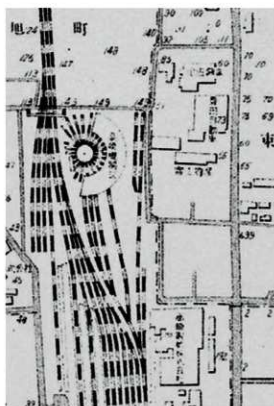
昭和6(1931)年 高崎市全図(一部)
(群馬県立図書館デジタルライブラリーより一部改変)



昭和9(1934)年 高崎市街図(一部)
(『新編高崎市史』資料編10付図より一部改変)

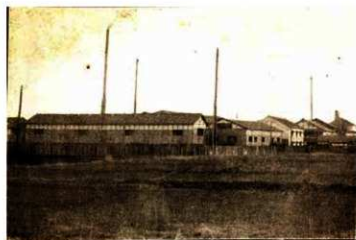


昭和28(1953)年頃 高崎市主要部地図(一部)
(『新編高崎市史』資料編11付図より一部改変)



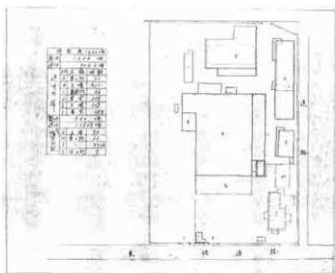
昭和34(1959)年 高崎市街地図(一部)
(『新編高崎市史』資料編11付図より一部改変)

図28 東町通跡8周辺地図変遷



所糸製崎高組口小

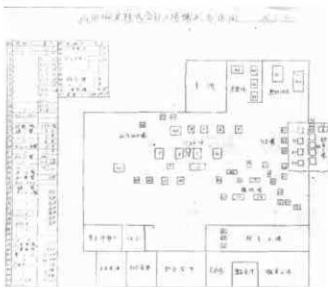
図29 『高崎大観』所収 小口組高崎製糸所
(高崎市立中央図書館提供)
(北西方面から撮影したものと推定される)



東

北

図30 山田興業株式会社 工場敷地建物配置図(昭和26年7月1日)
(マックス株式会社所蔵)
(高崎市立中央図書館提供)



北

西

図31 山田興業株式会社 工場機械配置図(昭和26年7月14日)
(マックス株式会社所蔵)
(高崎市立中央図書館提供)



図32 東町遺跡8周辺空中写真(昭和23年)
(国土地理院所有 米軍撮影 USA-R1250-20 一部改変)

写真中央の上下方向に見える白い筋が東三条通りで、写真上端の左右方向に見えるのが伊勢崎街道である。ほぼ中央の大きな建物の北側（写真の上側）部分とその北に見える左右に通る東西道路までが本遺跡のおよその範囲となる。小口組高崎製糸所の敷地範囲も道路位置が変わっていないので確認でき、写真と図30の「山田興業株式会社工場敷地建物配置図（昭和26年）」を比べても配置図にある建物はすべて確認できる。山田興業株式会社の北西側に「旧榛名航空工業株式会社鋳造工場」、東三条通りを隔てて東側に「昭和電気製鋼株式会社」が立地していた。昭和10年代、高崎市は重工業を主とする軍需産業の振興のため土地区画整理事業を実施し、工場誘致を行っていた。



図33 東町道跡8周辺空中写真(昭和36年)
(国土地理院撮影 MKT614-C8-9 一部改変)

図30の「山田興業株式会社工場敷地建物配置図(昭和26年)」の建物C・D・E・H・Iの5棟はそのままの位置に確認できるが、建物Bが南北棟の建物に変わっている。昭和34年(1959)マックス工業(昭和30年山田興業株式会社から改称)が操業しながら本社工場(鉄骨造2階建、756坪)を新築している。、『マックスだより』第2号(昭和34年11月27日号)掲載記事より・個人蔵)昭和23年(1948)の写真にあった中央の大きな建物の位置に別な建物が建っており、図28の昭和34年「高崎市街地図」ではそこに「豊田自動車」と記載されている。写真では群馬トヨタ自動車株式会社本社屋上にあった看板塔が影で確認できる。写真左隅に延びる国鉄上越・信越線(現JR)と扇形機関車庫の高崎第一機関区がみえる。

第5章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

高崎市東町遺跡8次調査では、As-Bテフラの下位で水田遺構が検出されている。今回の分析調査では、当該水田とその上下層における稲作の可能性を検討する目的でプラント・オパール分析を行う。さらに、As-B下水田当時の水域の環境を復元するために珪藻分析を行う。また、発掘調査で検出した近代製糸工場の建物遺構に係る土壌試料などを分析し、それらの情報を得るために、X線回折分析、薄片作製観察を行う。

2. プラント・オパール分析

(1) 試料

分析対象となった試料の詳細を表1に示す。プラント・オパール分析の対象は、B区南壁より採取されたAs-B直上（火山灰混じり砂質土：9層、試料1）、As-B層上部・下部（火山灰土：10層、試料2・3）、As-B層下水田面（火山灰混じり粘質土：11層、試料4）、As-B層下水田面の下層（粘質土：12層、試料5）、As-B層下水田畔下部（粘質土：試料6）の6点である。

表1 土壌試料一覧表

試料番号	土層番号	層名	区	採取地点	備考
1	9	砂質土	B区	10YR黒褐2/2 火山灰（As-Aか、径1mm）含む（1%）、粘性無し、締まりあり	As-B直上
2	10	As-B層	B区	10YR灰黄褐4/2 火山灰（As-B）、粘性無し、締まり無し	As-B層上部
3	10	As-B層	B区	10YR灰黄褐4/2 火山灰（As-B）、粘性無し、締まり無し	As-B層下部
4	11	粘質土	B区	10YR黒褐2/1 火山灰（As-Cか、径1mm）含む（1%）、粘性あり、締まりあり	As-B層下水田面
5	12	粘質土	B区	10YR黒2/1 粘性あり、締まりあり	As-B層下水田面の下
6	-	粘質土	B区		As-B層下水田畔下部

(2) 方法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて次の手順で行う。試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）する。試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）する。電気炉灰化法（550℃・6時間）により有機物の燃焼処理を行う。超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）により粒子を分散する。沈底法により20μm以下の微粒子を除去する。封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作成する。

同定は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象とし、400倍の偏光顕微鏡で行う。計数は、プレパラート全面を走査し、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行う。計数結果から、試料1g中のプラント・オパール個数を算出する（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率を乗じて求める）。主な分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出する。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に捉えることができる（杉山，2000）。

(3) 結果

産出したプラント・オバールの分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2、図1に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を図版1に示す。なお、植物珪酸体の生産量は植物種によって差異があることから、検出密度の評価は分類群によって異なる。そこで、プラント・オバール群集の占有状況を比較するために、植物体生産量（推定）を算出した。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型、ジュズダマ属型、シバ属

[イネ科－タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、その他

[イネ科－その他]

未分類等

[樹木起源]

未分類等

[その他]

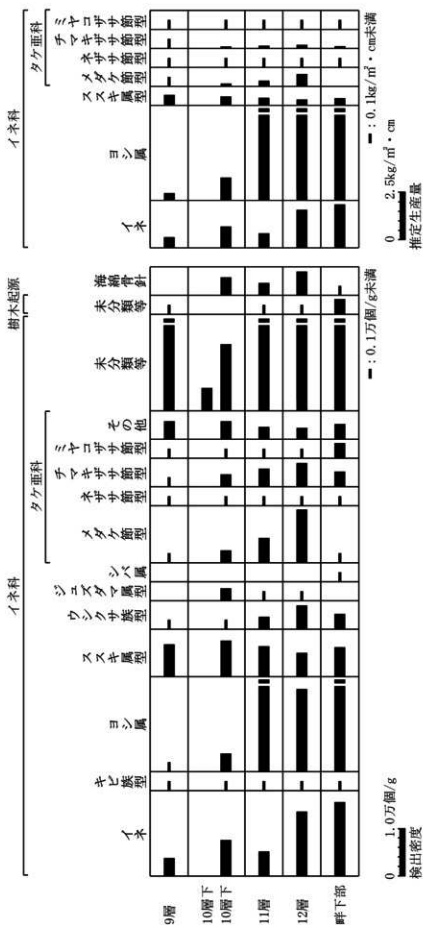
海綿骨針

表2 プラント・オバール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）		9層	10層	10層	11層	12層	群下部
分類群	学名	1	2	3	4	5	6
イネ科	Gramineae						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	19		38	26	68	78
キビ族型	<i>Panicum</i> type	6		6	6	6	8
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6		19	224	87	133
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	44		38	32	25	31
ウシクサ族型	<i>Andropogoneae</i> type	6		6	13	25	16
ジュズダマ属型	<i>Coix</i> type			13	6	6	
シバ属	<i>Zoysia</i>						8
タケ亜科	Bambusoideae						
メダケ節型	<i>Pleiolobus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	6		13	26	56	8
ネザサ節型	<i>Pleiolobus</i> sect. <i>Nezasa</i>	6		6	6	6	8
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	6		13	19	25	16
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	6		6	6	6	16
その他	Others	19		19	13	12	16
その他のイネ科	Others						
未分類等	Others	100	24	70	103	105	141
樹木起源	Arboreal						
未分類等	Others	6			6	6	16
海綿骨針	Sponge			19	13	25	8
総数	Total	230	24	247	486	433	495

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.56	1.12	0.76	2.00	2.29
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.38	1.20	14.13	5.49	8.39
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.55	0.47	0.40	0.31	0.38
メダケ節型	<i>Pleiolobus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.07	0.15	0.30	0.65	0.09
ネザサ節型	<i>Pleiolobus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03	0.03	0.03	0.03	0.04
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05	0.10	0.14	0.19	0.12
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.02	0.02	0.02	0.02	0.05



各試料のプラント・オパールの産出状況は以下のとおりである。

As-B直上（9層、試料1）では、ススキ属が多く優勢である。他には、イネ、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、未分類の樹木が少量産出する。As-B層上部（10層、試料2）では、未分類が少量認められるだけで、プラント・オパールはほとんど産出しない。As-B層下部（10層、試料3）では、イネが多く優勢である。次いでススキ属、ヨシ属が多い。他には、キビ族型、ウシクサ族型、ジュズダマ属型、メダケ節型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が認められるが、いずれも低い密度である。As-B層下水田面（11層、試料4）では、ヨシ属が多産し極めて卓越する。他には、イネ、ススキ属型、メダケ節型が比較的多い。キビ族型、ウシクサ族型、ジュズダマ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、未分類の樹木も産出するが、いずれも低密度である。As-B層下水田面の下（12層、試料5）では、ヨシ属が多産し卓越する。次いでイネが多く、ススキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型も比較的多い。他には、キビ族型、ジュズダマ属型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、未分類の樹木が認められるが、いずれも低い密度である。As-B層下水田畔下部（試料6）では、ヨシ属が多産し卓越する。次いでイネが多く、ススキ属型も比較的多い。他には、キビ族型、ウシクサ族型、シバ属、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が産出するが、いずれも低い密度である。

なお、10層下部、11層、12層、畔下部からは、プラント・オパール以外に海綿骨針が産出する。12層では比較的高い密度である。

（4）考察

プラント・オパール分析において稲作跡の探査や検証を行う際は、通常、イネの植物珪酸体が試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、最近の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。また、ヨシ属やマコモ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。そこで、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。これらを参考にして、稲作の可能性と周辺環境について検討する。

As-B下水田面（11層）では、イネが2,600個/gと比較的高い密度である。稲作跡の判断基準値には達していないものの、水田遺構が検出されていることから、ここで稲作が行われていたことが分析的にも確認された。プラント・オパール密度がやや低いことに関しては、1）稲作が行われた期間が短かった、2）稲の生産性が低かった、3）試料採取箇所が畦畔など耕作面でなかった、4）土層の堆積速度が速かった、5）洪水等で耕作土の一部が流出した、などの要因が考えられる。なお、As-B下水田の畔下部からもイネが7,800個/gと高い密度で検出されていることから、当時、畔の構築に稲藁が利用されていたことや、畦塗りや畔の作り替えに水田土壌が利用されていたことなどが考えられる。As-B下水田面の下層（12層）では、イネが6,800個/gの高密度であり、稲作跡の判断基準値を超過している。このことから、当該層においても稲作が営まれていた可能性が高いと判断される。As-B層下部（10層）では、イネが3,800個/gと高い密度であり、稲作跡の判断基準値を超過している。このことから、ここで稲作が行われていた可能性があるものの、分析対象は火山灰層の下部であることから、直下の水田層からプラント・オパールが混入したことも考えられる。As-B直上（9層）でもイネが検出されているが、密度は1,900個/gとやや低い値である。当該層は火山灰を含む砂質土であることから、ここで検出されたプラント・オパールは他所から混入したものとみられる。

おもな分類群の推定生産量を見ると、イネ以外の分類群ではAs-B下水田面（11層）でヨシ属が非常に高い密度である。このことから、As-B降灰直前の調査地はヨシ属の繁茂する湿地であったか、何らかの目的で水田にヨシが鋤き込まれたことが考えられる。また、As-B下水田の畔下部からもヨシ属が高い密度で検出されている。このことは、畔の構築にイネとともにヨシ属が鋤き込まれたことや、上述のように畔塗りや畔の作り替えに水田土壌が利用されていた可能性を示唆している。As-B下水田下層（12層）でもヨシ属が高い密度である。当該層は水田耕作土である可能性が考えられたことから、ヨシ属の繁茂する湿地を拓いて水田が造成されたか、調査地周辺は湿地の環境であった可能性が推定される。As-B直上（9層）ではススキ属型が優勢であり、ヨシ属は低密度である。このことから、当時の調査地あるいは近傍は乾いた環境であり、そこにはススキ属が多く生育していたと推定される。また、As-B下水田面でもススキ属型が比較的多く検出されていることから、水田畦畔や周辺の乾いたところにススキ属が生育していた可能性が考えられる。

As-B層下部（10層）、As-B下水田面（11層）、As-B下水田の下層、As-B下水田の畔下部からは海綿骨針が検出されている。遺跡の立地から海水の直接の影響は考え難い。海綿が利用されていたか、何らかの用途で海藻等が持ち込まれていた可能性が考えられる。

3. 珪藻分析

（1）試料

試料は、As-B層下水田面（火山灰粘質土：11層、試料4）の1点である。

（2）方法

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満ちし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、標準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot et al. (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot (1985～1991)、Desikachary (1987)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示した。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかにいったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物(岩石・大型の藻類・水生植物など)に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(3) 結果

分析結果を表3に示した。分析した試料から珪藻化石は産出したが、産出数は非常に少なかった。

B区水田面からは、10個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多いため、不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Encyonema silesiacum*, *Rhopalodia gibba*, 止水性種の *Gomphonema gracile* 等である。

表3 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境指標種	B区水田面
	塩分	pH	流水		
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	2
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	1
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	1
海水生種					0
海水～汽水生種					0
汽水生種					0
淡水～汽水生種					0
淡水生種					10
珪藻化石総数					10

凡例

塩分:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	流水:流水に対する適応性
Euh : 海水生種	al-bi:真アルカリ性種	l-bi:真止水性種
Euh-Meh:海水生種-汽水生種	al-il:好アルカリ性種	l-ph:好止水性種
Meh : 汽水生種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種	ac-il:好酸性種	r-ph:好流水性種
Ogh-hil:貧塩好塩性種	ac-bi:真酸性種	r-bi:真流水性種
Ogh-ind:貧塩不定性種	unk : pH不明種	unk : 流水不明種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種		
Ogh-unk:貧塩不明種		

環境指標種

A:外洋指標種 B:内湾指標種 C1:海水藻場指標種 C2:汽水藻場指標種
 D1:海水砂質干潟指標種 D2:汽水砂質干潟指標種
 E1:海水泥質干潟指標種 E2:汽水泥質干潟指標種 F:淡水底生種群(以上は小杉, 1988)
 G:淡水浮遊性種群 H:河口浮遊性種群 J:上流性河川指標種 K:中～下流性河川指標種
 L:下流性河川指標種群 M:湖沼浮遊性種 N:湖沼沼沢湿地指標種 O:沼沢湿地付着生種
 P:高層湿原指標種群 Q:陸域指標種群(以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種(以上はAnai and Watanabe, 1995)
 R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

(4) 考察

B区水田面から産出した種の生態性について述べる。淡水生種で流水不定性種の*Encyonema silesiacum*および*Rhopalodia gibba*は、沼沢地から湿地等の水域に広く生育する種である。止水性種の*Gomphonema gracile*は、湿地や池沼の水深の浅い場所に生育するが、河川等でも岸付近の水の流れが少なく、淀んだ水域に認められる種である。

本試料から産出した珪藻殻は少なかったため、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。次に、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている(千木良, 1995)。

本試料は、湿地～沼沢地に生息する種が複数種産出したことから、もともと湿地～沼沢地の環境であった可能性が示唆されるが、珪藻化石の堆積後に好気的な環境下等の要因で、取り込まれた珪藻化石は分解・消失した可能性が高い。

4. 薄片作製鑑定・X線回折分析

(1) 試料

薄片作製観察およびX線回折分析に供した試料は、表4に示した各所で採取された試料番号1～3の土壤、白色物質、淡緑色物質の3点である。分析前の試料写真撮影を行い、図版に示す。

表4 薄片作製観察およびX線回折分析の分析試料および分析項目

試料番号	土層番号	層名	区	採取地点	備考	外観
1	-	-	A区	煉瓦製建物付属の土管内	H35. 4. 6	土壤
2	-	-	A区	南西隅の石材周辺	-	白色物質
3	-	-	B区	南壁	H35. 7. 5	淡緑色物質

(2) 方法

1) 薄片作製鑑定

薄片の顕微鏡鑑定は、岩石を0.03mmの厚さに薄く研磨し、顕微鏡下で観察すると、構成鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

試料は、ダイヤモンドカッターにより22×30×15mm程度の直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレバートに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレバート上で薄くなった薄膜状の断面試料の上にカバーガラスを貼り付け、観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡を用い、下方ポーラーおよび直交ポーラー下において観察記載を行う。

2) X線回折分析

試料は、乾燥器において60℃以下で12時間以上乾燥させた後、鉄乳鉢を用いて軽く粗粉碎する。粉碎後、目開き63μmのステンレス篩を用いて篩い、通過した細粒分を回収する。回収した細粒試料は、メノウ乳鉢を用いて微粉碎する。微粉試料は、X線回折用アルミニウムホルダーに充填し、以下の条件でX線回折試験を実施する。

装置：理学電気製MultiFlex Divergency Slit: 1°
 Target: Cu (Kα) Scattering Slit: 1°
 Monochrometer: 湾曲Graphite Recieving Slit: 0.3mm

Voltage : 40KV	Scanning Speed : 2° /min
Current : 40mA	Scanning Mode : 連続法
Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
Calculation Mode : cps	Scanning Range : 2~61°

(3) 結果

1) 薄片作製鑑定

①試料番号1 A区 煉瓦製建物付属の土管内

本試料は、粗粒シルト～細礫の鉱物片、岩片、火山ガラス、植物片が中量程度含まれる。基質は、粘土・シルトによって埋められる。全体的に碎屑片の偏りは認められず、おおむね塊状を呈する。鉱物片は、粒径0.60mm以下で、微量程度認められる。斜長石、石英、直方輝石、単斜輝石、角閃石、黒雲母などを含む。岩片は、粒径2.6mm以下で、きわめて微量程度認められる。安山岩、砂岩、多結晶石英などが認められる。火山ガラスは、粒径0.8mm以下で、軽石型を示す。植物片は、微量程度含まれ、針状～薄板状を呈して、長さ0.11～2.9mm程度で散在する。基質は、褐色を呈し、主に炭酸塩鉱物、粘土鉱物および非晶質物質から構成されており、粘土鉱物は、隠微晶質で褐色を呈する。非晶質物質は緑色を呈し、不定形状を示し、濃淡を示す箇所が認められる。

②試料番号2 A区 南西隅の石材周辺

本試料は、粗粒シルト～粗粒砂の鉱物片、岩片、化石片が中量程度含まれる。基質は、微細不定形状を呈する炭酸塩鉱物や粘土によって埋められる。全体的に碎屑片の偏りは認められず、おおむね塊状を呈する。鉱物片は、粒径1.2mm以下で、少量程度認められる。斜長石を主体とし、石英、直方輝石、単斜輝石、角閃石、不透明鉱物などを伴う。岩片は、粒径1.4mm以下で、微量程度認められる。安山岩を主体とし、流紋岩・デイサイト、砂岩、多結晶石英などを伴う。基質は、褐色を呈し、主に炭酸塩鉱物、粘土鉱物および非晶質物質から構成されており、粘土鉱物は、隠微晶質で褐色を呈する。非晶質物質は組織や構造が認められない。

③試料番号3 B区 南壁

本試料は、岩石片、非晶質物質、不透明鉱物、炭酸塩鉱物が中量程度含まれる。岩石片は、粒径7mmで薄片上に1粒存在し、流紋岩・デイサイトである。石基は微細な石英を主体とし、黒雲母を伴う。斑晶鉱物として、斜長石が含まれる。岩石片は、水酸化鉄が分布し、珪長質鉱物で埋められる細脈が3条程度存在する。非晶質物質は、不透明鉱物に伴って分布する。非晶質物質に内包して、不透明鉱物が分布する。この他、極細粒砂サイズの石英、斜長石、直方輝石、角閃石などがきわめて微量伴われる。非晶質物質は、X線回折分析の結果により、アルミニウムと判定されている。炭酸塩鉱物は一部の不透明鉱物の周縁部に分布する。炭酸塩鉱物は不定形状で他形を呈する。

2) X線回折分析

試験結果の同定解析は、X線粉末回折線解析プログラムJADEを用い、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をPDF(Powder Diffraction File)データから検索し、同定した。X線回折チャートは図1～3に示した。図中の最上段が試料の回折チャートであり、下段が同定された結晶性鉱物もしくは化合物の回折パターンである。量比は、最強回折線の回折強度(cps)から、多量(>5,000cps)、中量(2,500～5,000cps)、少量(500～2,500cps)、微量(250～500cps)およびきわめて微量(<250cps)という基準で判定し、表1に示した。

表5 X線回折分析による検出鉱物

試料 番号	区	採取地点	検出鉱物										
			石 英	斜 長 石	角 閃 石	直 方 輝 石	単 斜 輝 石	ハロイサイト	雲母鉱物	ギブサイト	方解石	赤鉄鉱	アルミニウム
1	A区	煉瓦製建物付属の土管内	△	△			±			±		±	
2	A区	南西隅の石材周辺	○	△	±	+		±			△		
3	B区	南壁	△	△			+		±	△		±	○

量比

◎：多量(>5,000cps)，○：中量(2,500～5,000cps)，△：少量(500～2,500cps)，+：微量(250～500cps)，

±：きわめて微量(<250cps)。

X線回折チャート上で使用したpdfデータの鉱物名

石英：quartz 斜長石：albiteまたはanorthite 角閃石：magnesianhornblende 直方輝石：enstatite 単斜輝石：augite

ハロイサイト：halloysite-7A 雲母鉱物：muscovite ギブサイト：gibbsite 方解石：calcite 赤鉄鉱：hematite

アルミニウム：aluminum

①試料番号1 A区 煉瓦製建物付属の土管内

不定方位法回折試験により、少量の石英・斜長石およびきわめて微量の単斜輝石・ギブサイト・赤鉄鉱が検出される。石英、斜長石の回折線が明瞭であり、尖度の高いものが多数検出される。赤鉄鉱は、 2.70Å ($2\theta: 33.2^\circ$) にやや明瞭な最強回折線を示す。

②試料番号2 A区 南西隅の石材周辺

不定方位法回折試験により、中量の石英、少量の斜長石・方解石、微量の直方輝石およびきわめて微量の角閃石・ハロイサイトが検出される。石英、斜長石の回折線が明瞭であり、尖度の高いものが多数検出される。方解石は、 3.03Å ($2\theta: 29.5^\circ$) に尖度の高い最強回折線を示す。

③試料番号3 B区 南壁

不定方位法では、中量のアルミニウム、少量の石英・斜長石・ギブサイト、微量の単斜輝石およびきわめて微量の雲母鉱物・赤鉄鉱が検出される。アルミニウムは、 2.34Å ($2\theta: 38.5^\circ$) に最強回折線、 2.02Å ($2\theta: 44.9^\circ$) に第2強線を示し、いずれも尖度の高い明瞭な回折線となっている。ギブサイトは、 4.8Å ($2\theta: 18.5^\circ$) にやや半幅の広い最強回折線を示す。

(4) 考察

①試料番号1 A区 煉瓦製建物付属の土管内

本試料は、粘土・シルトを伴う組成を示し、含有される鉱物片、岩片、火山ガラスは、遺跡周辺の地質に由来するものから構成されている。薄片で確認された緑色を呈するガラス様物質は、鏡下では等方性を示し、非晶質物質と推測されるため、X線回折分析では検出されなかったとみられる。薄片観察による同定は困難であるため、今後、EPMAなどの理化学分析による同定が望まれる。X線回折分析では石英、斜長石、単斜輝石、ギブサイト、赤鉄鉱などの一般的な土壌に含まれる鉱物が検出された。本試料は、肉眼的に赤褐色の粒子を散含しているが、これは検出された赤鉄鉱によるものと考えられる。赤鉄鉱は、スコリアなどに初生的に含まれる鉱物であるが、土壌中の水酸化鉄が焼成により脱水して生成する場合もある。本試料は焼成の痕跡は認められなかったため、赤鉄鉱は岩石に由来す

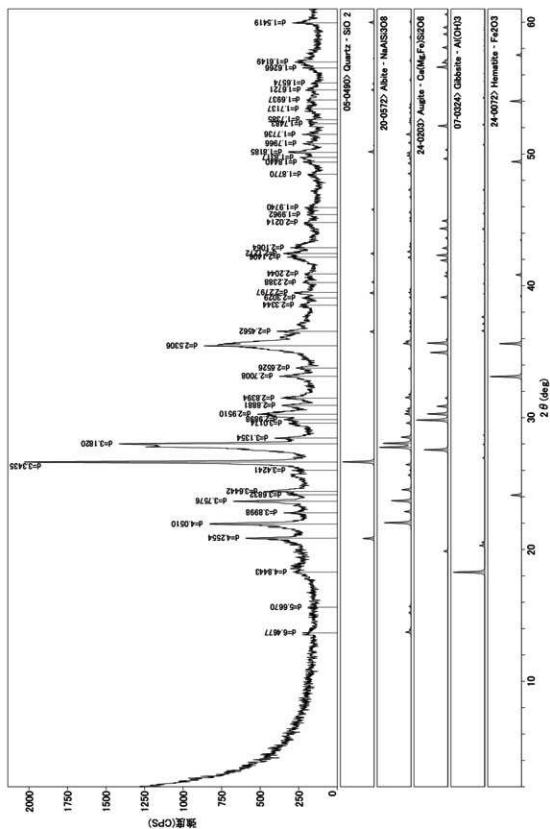


図2 試料1 煉瓦製造物付属の土管内の不定方位法X線回折チャート

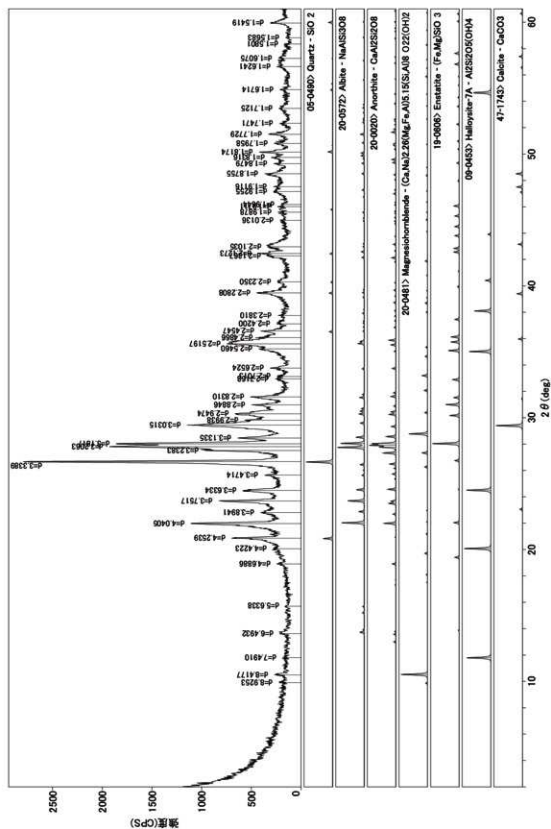


図3 試料2 南西隅の石材周辺の不定方位法X線回折チャート

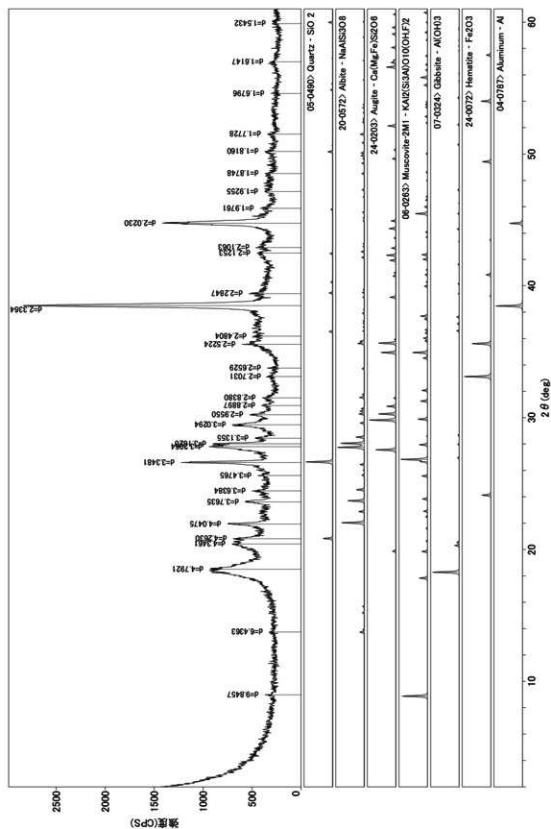


図4 試料3 南壁の不定方位法X線回折チャート

ると考えられる。

②試料番号2 A区 南西隅の石材周辺

本試料からは、薄片観察では炭酸塩鉱物が確認されている。炭酸塩鉱物は、X線回折分析の結果、方解石と同定されている。炭酸塩鉱物は、基質を構成する微細な粒子として多量確認されていることから、本試料は、石灰(炭酸カルシウム)を原料とする漆喰であると判断される。X線回折分析では方解石の他に、一般的な土壌に含まれる石英、斜長石、角閃石、直方輝石、ハロイサイトなどが検出されている。本試料は肉眼的に白色物質が不均質に混在しているが、これは検出された方解石によるものと考えられる。方解石は初生的に含まれていた可能性はあるが、ほかに漆喰の原材料である消石灰が経年的に結晶化することによって生成したものと考えられる。

①試料番号3 B区 南壁

本試料からは、薄片観察では流紋岩・デイサイトの岩石片が確認されているほか、不透明鉱物と非晶質物質が混在して存在する状況が認められている。X線回折分析では石英、斜長石などを含むが、アルミニウムおよびギブサイトの回折線が明瞭である。ギブサイトが検出されていることから、ボーキサイトなどをを用いたアルミニウムの精錬に伴う堆積物とみることができる。

引用文献

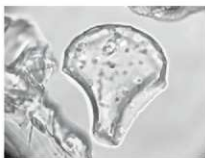
- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 千木良雅弘, 1995, 風化と崩壊. 近未来社, 204p.
- Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, 1-13, Plates, 401-621.
- 藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探索 -. 考古学と自然科学, 17, 73-85.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

- 伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 - 陸生珪藻の細分-. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. *Bibliotheca Diatomologica*, 9, 250p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa*, 2(1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(4): 437p.
- Lange-Bertalot, H., Witowski, A., and Metzeltin, D., 2000, *ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA* Annotated diatom micrographs. *Diatom Flora of Marine Coasts*, 1, 925p.
- 杉山真二, 1999, 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究8(2), 109-123.
- 杉山真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オーバー), 考古学と植物学. 同成社, 189-213.
- 杉山真二・藤原宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として-. 考古学と自然科学, 19, 69-84.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志, 1988, 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用 - 古代農耕追及のための基礎資料として-. 考古学と自然科学, 20, 81-92.

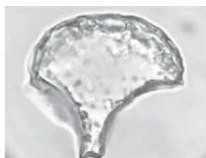
プラント・オパール



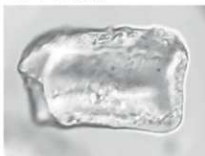
1. イネ (10層下部)



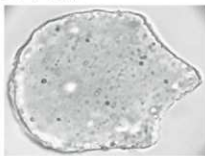
2. イネ (11層)



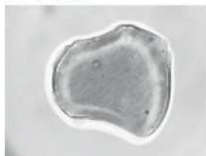
3. イネ (12層)



4. キビ族型 (11層)



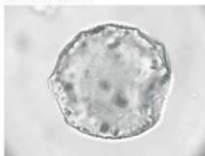
5. ヨシ属 (11層)



6. ススキ属型 (9層)



7. ウシクサ族型 (12層)



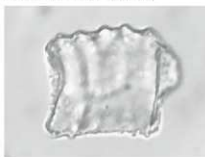
8. ジュズダマ属型 (10層上)



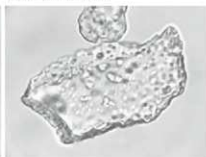
9. シバ属 (畔下部)



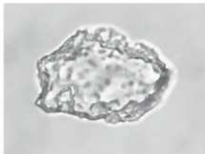
10. メダケ節型 (12層)



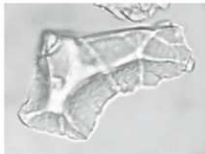
11. ネザサ節型 (9層)



12. チマキザサ節型 (12層)



13. ミヤコザサ節型 (畔下部)



14. 樹木-未分類 (畔下部)



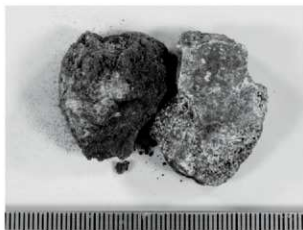
15. 海綿骨針 (12層)

50 μ m

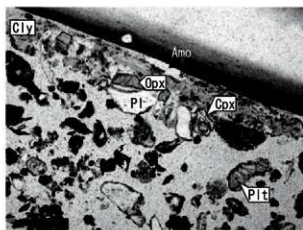
試料・薄片1



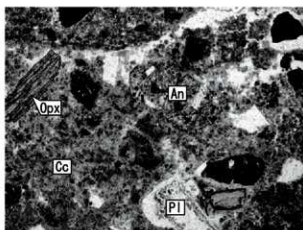
1a. 試料番号1 A区 煉瓦製建物付属の土管内
試料



2a. 試料番号2 A区 南西隅の石材周辺 試料



1b. 試料番号1 A区 煉瓦製建物付属の土管内
下方ポーラー



2b. 試料番号2 A区 南西隅の石材周辺
下方ポーラー



1c. 試料番号1 A区 煉瓦製建物付属の土管内
直交ポーラー

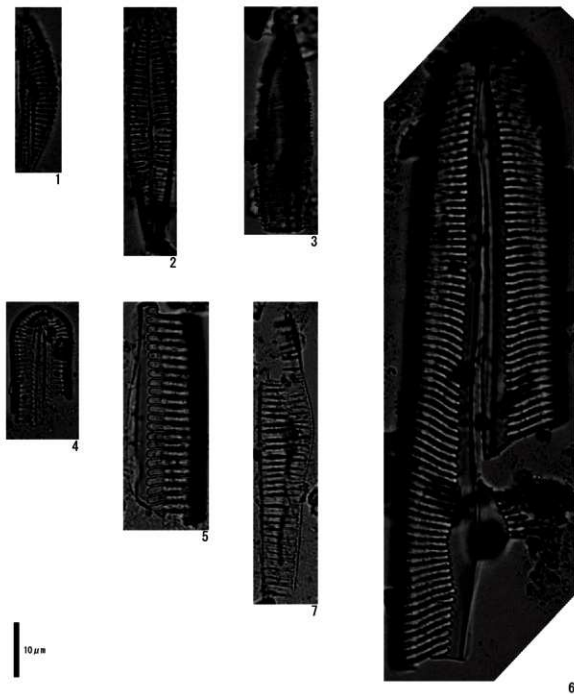


2c. 試料番号2 A区 南西隅の石材周辺
直交ポーラー

Pl:斜長石, Opx:直方輝石, Cpx:単斜輝石, Cc:方解石, An:安山岩, Cly:粘土,
Plt:植物片, Amo:非晶質物質

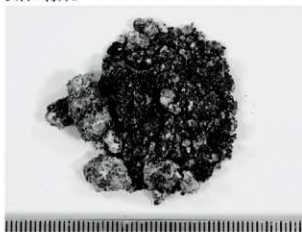
0.5mm

珪藻化石

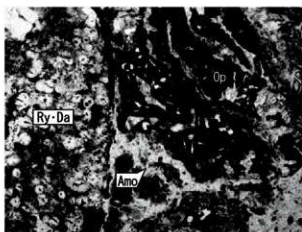


1. *Encyonema silesiacum* (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann (B区;水田面)
2. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (B区;水田面)
3. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (B区;水田面)
4. *Pinnularia* spp. (B区;水田面)
5. *Pinnularia* spp. (B区;水田面)
6. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (B区;水田面)
7. *Rhopalodia gibba* (Ehr.) Mueller (B区;水田面)

試料・薄片2



3a. 試料番号3 B区 南壁 試料



3b. 試料番号3 B区 南壁 薄片 下方ボーラー



3c. 試料番号3 B区 南壁 薄片 直交ボーラー

Op: 不透明鉱物, Ry·Da: 流紋岩・デイサイト, Amo: 非晶質物質

0.5mm



A区 1面検出状況(北東)



A区 1面検出状況(南東)



A区 1号コンクリート遺構部分土層断面(東)



A区 1・8号コンクリート遺構・4号レンガ遺構検出状況(北)



A区 2号コンクリート遺構検出状況(東)



A区 8号コンクリート遺構検出状況(北)



A区 4号レンガ遺構(左)・S-21・大型コンクリート基礎(右)検出状況(西)



A区 大型コンクリート下の松杭出土状況

PL.2 A区近代面遺構2



A区 松杭9出土状況(北)



A区 中央の土層断面SPA-A“(北東)



A区 8号コンクリート遺構西側の検出状況(西)



A区 1号コンクリート遺構部分土層断面(東)



A区 1号コンクリート遺構に捨てられたレンガ(南東)



A区 1号コンクリート遺構完壁後全景(東)



A区 1号レンガ遺構土層断面(東)



A区 2号レンガ遺構土層断面(東)



A区 2号レンガ遺構(西)



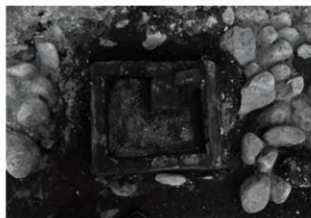
A区 2号レンガ遺構(南西)



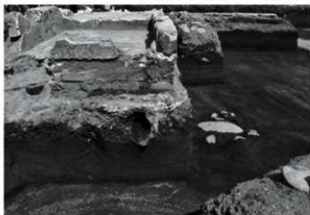
A区 S-5～S-8・2号レンガ遺構検出状況(北)



A区 3号レンガ遺構(西)



A区 3号レンガ遺構(西)



A区 4号レンガ遺構(南)



A区 4号レンガ遺構(東)

PL. 4 A区近代面遺構4



A区 4号レンガ遺構・松杭9・5-9~5-12・5-22横出状況(北)



A区 S-2付近土層断面(北)



A区 S-2上の角柱石横出状況(北)



A区 S-4上の角柱石横出状況(南)



A区 S-5~S-7・S-16~S-18・2号レンガ遺構横出状況(西)



A区 S-10横出状況(北)



A区 S-2~S-22横出状況(北)

PL. 5 B区近代面遺構1



B区 1面掘削状況(北西)



B区 5号コンクリート遺構土層断面(北)



B区 3号コンクリート遺構(北)



B区 4号(左)・5号(中央)コンクリート遺構検出状況(北)



B区 5号コンクリート遺構(東)



B区 6号コンクリート遺構(北)



B区 5号(左)・6号(右)コンクリート遺構(南西)



B区 7号コンクリート遺構(南東)

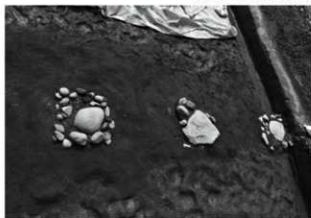
PL. 6 B区近代面遺構2



B区 S-14~S-18横出状況(西)



B区 S-18横出状況(北)



B区 S-24~S-26横出状況(西)



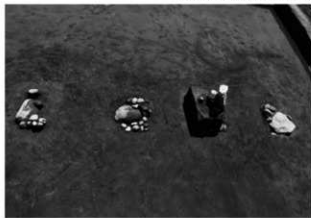
B区 S-25~S-28上の角柱石横出状況(北)



B区 S-26上の角柱石横出状況(南)



B区 S-27上の角柱石横出状況(北)



B区 S-25~S-28横出状況(西)



B区 S-30・31上の角柱石横出状況(西)



B区 S-30上の角柱石検出状況(南)



B区 井戸・S-33・S-34検出状況(東)



B区 S-33・S-34検出状況(東)



B区 S-34検出状況(東)



B区 井戸検出状況(北東)



B区 S-24～S-34・井戸検出状況(北東)



C区 1号側溝とその西側(南東)



C区 1号側溝検出状況(南)



C区 2号側溝検出状況(北)



C区 3号側溝・3号コンクリート基礎検出状況(東)



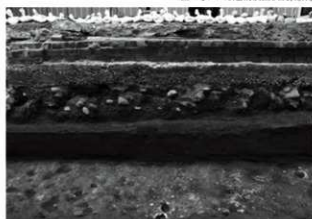
C区 1号コンクリート側・松杭10検出状況(南)



C区 1号レンガ遺構検出状況(北東)



C区 1号レンガ遺構全景(南)



C区 1号レンガ遺構土層断面SPA-A'(東)



C区 1号レンガ遺構土層断面SPB-B'(南)



C区 1号コンクリート遺構土層断面SPA-A'(西)



C区 2号レンガ遺構検出状況(東)



C区 1号コンクリート樹検出状況(南)



C区 2号コンクリート樹ビール掘出土状況(北)



C区 中央建物基礎検出状況(南)



C区 中央建物完掘状況(北)



C区 完掘状況全景(南)



C区 東端B軽石下水田検出状況(北西)



C区 調査区全景と周辺の様子(南)



C区 完備状況全景(上が北)



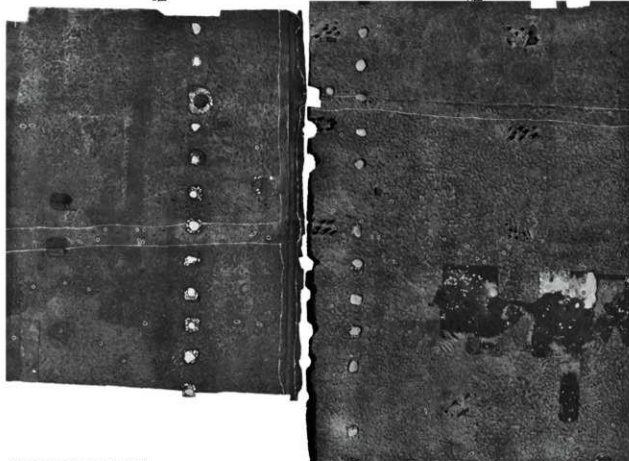
C区 完備状況西半景(上が北)



C区 完備状況東半景(上が北)

B区

A区



A・B区B軽石下水田跡全景(上が北)



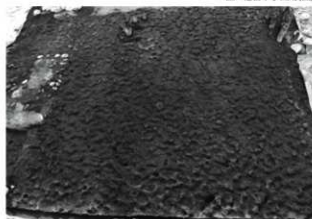
A区B軽石下水田跡全景(左が北)



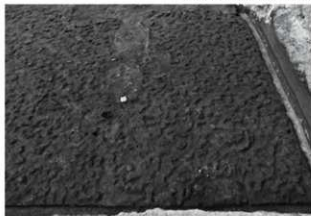
A区 B軽石下水田跡(西)



A区 B軽石下水田面北東部(西)



A区 B軽石下水田面東中央部(東)



A区 B軽石下水田面南東部(南)



A区 B軽石下水田面南西部(南)



A区B軽石下水田面西中央部(西)



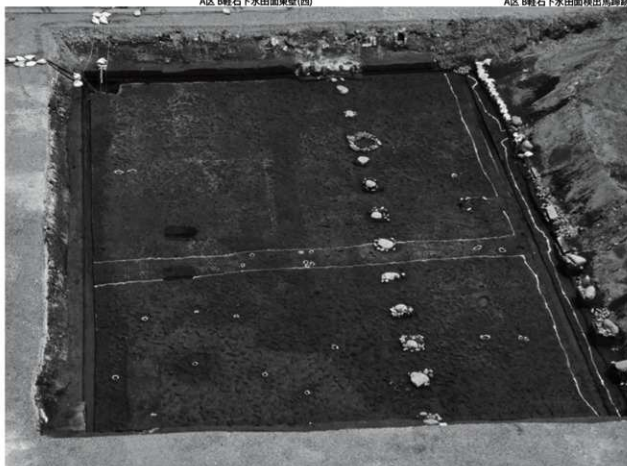
A区B軽石下水田面北西部(西)



A区B軽石下水田面東壁(西)



A区B軽石下水田面検出馬跡跡

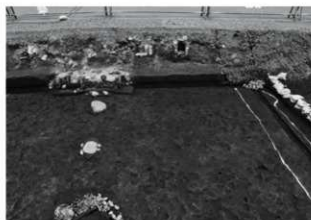


B区B軽石下水田跡全景(南)

PL. 14 B・C区B軽石下水田跡状況



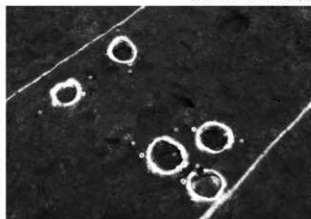
B区 B軽石下水田面北西側(南)



B区 B軽石下水田面北東側(南)



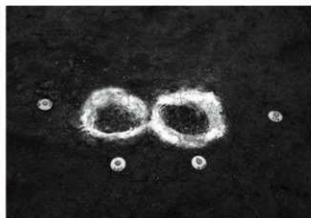
B区 B軽石下水田面人足跡3(左)・4(右)



B区 B軽石下水田面馬蹄跡10~14(南)



C区 B軽石下水田跡(南東)



C区 B軽石下水田面馬蹄跡3・4(南)



C区 B軽石下水田面北半(西)



C区 B軽石下水田面南半(西)



1

2



4



3



5



6



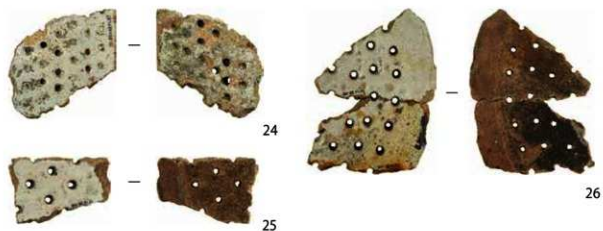
7



8



9







43



44



45



46



47



48



49





54



55



56



58



57



59



60



61



62



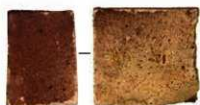
63



64



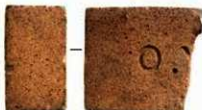
65



66



67



68



69



70

72



71



74

75



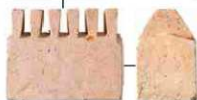
73



77



78



76



79



80



81



82



83



84



85



86



87



89



88



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



106



107



108



103



104



105



109



110



111



112



114



113



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



126



127



128



125



129



130



131



132



133



134



135



136



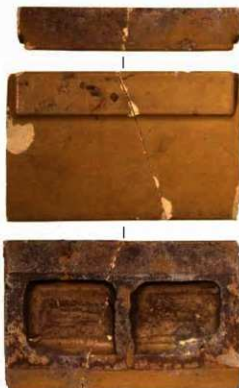
137



138



139



140



141



142

報告書抄録

ふりがな	あずまちょういせき8								
書名	東町遺跡 8								
副書名	高崎市労使会館建替え事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第512集								
編著者名	田村 孝 宮下昌文								
編集機関	高崎市教育委員会								
所在地	群馬県高崎市高松町35番地1								
発行年月日	2025(令和7)年3月31日								
ふりがな	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地		市町村	遺跡番号					
あずまちょういせき8 東町遺跡 8	群馬県高崎市東町80番地 1		102024	860	36° 19' 23"	139° 1' 1"	2023.03.01 ～07.26 2024.01.29 ～03.16	1300㎡	労使会館建替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
	田畑	平安時代	水田跡					浅間B軽石下水田	
東町遺跡 8	工場跡	近現代	製糸場跡 工場跡			製糸関連器具、煉瓦、陶磁器、耐火製品、ガラス製品、木製品、新聞片		近代の製糸場とその後の工場の基礎部分を検出	
備考	今まで「高崎市全国」などでしかわからなかった大正時代から昭和初期に営まれた2つの製糸場、龍栄社と小口組製糸所の具体的な様相を知る手がかりを得ることができた。また、製糸場で使用されていた繰糸鍋、煮繭鍋、糸鉤など製糸関連遺物が出土し、遺構とともに高崎市における近代化遺産の一端を明らかにすることができた。								

高崎市文化財調査報告書 第512集

東町遺跡8

—高崎市労使会館建替え事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2025(令和7)年3月31日
編集 高崎市教育委員会文化財保護課
発行 高崎市教育委員会
〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1
電話 027 (321) 1292

印刷 上武印刷株式会社